と云つた。

伸子は、父の椅子の背にもたれて立ち、この心理的對面のなりゆきを眺めた。母が佃に對してどう出てよいものか迷つてゐたのは、入つて來た時、彼女が立つて居た樣子で判つて居た。佃を尊敬し、或間隔を置いてものを云ふべきか、又は、伸子の配偶として、碎けて樂に取扱つてよい人間か。彼女はそれを是等二度の短い應待で試みたらしく思はれた。彼女は既に、舌で云へば嫌な味のやうに、何かそぐはないものを佃から感じたのではあるまいか。――さもなければ、何故あゝ時々、奇麗な白足袋の爪先を、焦立たしさうに動す必要があらう。伸子は、自分に不安を與へる眞白い生ものゝ耳のやうな其方を見ないようにして、父に云つた。

「父樣お召かへになつてはいかが？　本當に有難うございました。――今日はね」

伸子は彈まない空氣を引立てるやうに佃に說明した。

「私が大寢坊をした處へ電報が來たのよ。だから慌てたと云つたらないの。父樣だつて不意の召集よ、ね」

「あゝ。――然し日曜で結構だつた。――他の日は無茶に忙しくてね。君なんぞも當分、餘程氣をつけないと神經衰弱にかゝりますよ。外國は一般に規則だつて居るが、此方は生活のシステムも、プリンシプルもあつたものぢゃあない。盲滅法、どた〳〵です。――まあ家にかへつた積りで、暫くのんびりし給へ」

「有難うございます。いろ〳〵御面倒になります……」

風呂場に佃を案內して伸子が戻ると、客間の入口に立つて、亢奮した顏付で良人と低聲に何か話して居た。

佐々は伸子と入れ違ひに書齋に去つた。多計代はそこで伸子をつかまへ、警告するやうに云つた。

「佃さんといふ人はいつも彼那顏色なのかへ？――たゞの色ぢやないよ、あれは」

伸子は、餘り自分の豫想が當つたので、思はず無邪氣に笑ひ出した。

「船に醉ひつゞけて居たからよ、可哀想に――勿論『林檎のやうな頰ぺた』は、いつだつてして居ないけれど」

「――永く外國に居た人といふのはあんなもんなんだらうかね……變だね何だか――挨拶も人なみに出來ないやうでさ」

「母樣が餘り堂々挨拶なさるから面喰つたのよ」

佃が手や顏を洗つて來、果物や紅茶が卓子に出た時、伸子は、

「みんな被來い。お茶！」
と弟妹たちを呼んだ。三人一どに來た。伸子は、
「和一郎さん、保さん、つや子ちやん」
と順ぐり佃に紹介した。佃は、おかつぱで含羞んで居るつや子に、優しく笑つて、
「いらつしやい」
と兩手を差出した。
「さあ行つてだつこしておいたゞきなさい」
皆が笑ひ乍ら見るので、つや子は、益々極りわるく、佃の方に行かうとはせず、
「お姉ちやま」
と伸子にからみついた。幼いつや子が佃の膝に行くか行かないか、冗談のやうな眞劍な注意で皆が見守つて居るのを感じ、彼女は、つや子が佃になついて欲しかつた。
「どうしたの？　つや子ちやん、だつこして御覽なさい。——そーらお姉ちやまごと動き出したぞ……」
伸子は、小猿のやうにからみついたつや子を膝にのせたまゝ、佃の方へいざり出した。つや子は、

急に、きつしり兩手で伸子の頸にしがみついた。そして、息もせず、體ぢゆうを強ばらせ、足を疊に踏張つて抵抗した。肩に顔を伏せて居るので見えはしないが、いづれ眞赤に汗ばんで、わつと泣き出す一歩手前に相異ない。伸子は動くのをやめた。
「——ぢやおやめ！　今日はおあづけ」
「この子は妙な子でしてね、つい去年あたりまで豆腐は可怖がる、眞綿はこはがる、親父の私まで嫌がつたので閉口しましたよ」
すると、つや子が、皆に背を向けて、伸子に抱かれたまゝ仔細らしく、
「キヤンムシも」
と小聲でつけ足した。初めて心からの大笑ひになつた。キヤンムシは、神主のつや子語であつた。
十時頃女中が、
「お床はどう致したらよろしうございませう」と訊きに來た。
「さあ……」
多計代は伸子を見た。
「お前の部屋でいゝんだらう」

「いゝわ」

「ちやあ、いつものやうに――」

「あの、おかけものや何かはどれに致しますのでせうか」

多計代は、彼女の場所から動かず、當然それは伸子のすべき事だといふ風に答へた。

「さあ――何かあるだらう……。伸ちやん、お前行つて見てやらないぢやあ判りませんよ」

伸子は、默つて女中の先に立ち納戸に行つた。戸棚をあけさせた。

「それ……その縞のと八丈の」

女中に夜具を運び出させ、伸子は洗面所に行つた。電燈をつけ、鏡にうつる自分の顏を見守り乍ら手のひらで髪を撫で上げ、彼女は、寂しいやうな滅入つたやうな心持を感じた。これが、彼那に待ちわびた彼を迎へた心持であらうか。圍りに人が多すぎ、氣疲れがし、伸子は有頂天な悅びより寧ろ憂鬱を感じた。彼女は電氣を消した。そして洗面所を出た。その時、彼方の部屋の扉が開く音が大きくした。體を半分廊下へ出し、うつむいて上靴を穿かうとして居る佃の姿が伸子の處から見えた。

「和一郎一緒に行つてお上げ」

「いゝえ、一人でわかります――さつきも參りましたから……え？　大丈夫です……」

佃は、まるで伸子が其處に立つて居るのや、彼女の心にある慾望を透視して居るやうに、眞直暗い廊下を此方に向つて歩いて來た。伸子は、一瞬間前のしよぼくない自分を忘れた。彼女は嬉しくて堪らない惡戲小僧のやうに笑ひを殺し、四邊の暗闇まで一緒に脈打つて感じられる程胸をどきつかせ乍ら、そつと隅の本棚の側にかくれて立つた。

七

一週間ばかり後、伸子は佃と、彼の故郷の田舍へ歸つた。十日餘滯在した。伸子にとつては樂しさと遠慮との混り合つた旅行であつた。佃の老年の父や兄夫婦や弟など、肉親ではあるが、久しく別れて居て、全然未知な生活をして來た佃、又伸子に對して心遣ひするのがわかつた。菜の花盛りで、金色の花が高く〳〵咲き連り、遠い白山山脈に照り榮えた。古い村落には、狹い街道を挾んで黑板塀の家が並んで居た。淨土眞宗が非常に盛んで、村の寺は倶樂部又は集會所であつた。家々には素晴らしい佛

壇が飾つてあつた。其の大小が家の格を支配するといふ事であつた。

「この邊ぢやあみな、此那ものを大切にしてゐますのぢや」

伸子は珍しく思つて、金を打つた觀音開きの扉や内部の欄間に親鸞上人の一代記を赤や水色に彩りした浮彫で刻みつけてあるのを眺めた。爐の粗朶火に當つて居る老人は、寢所に入る前、必ず佛壇に行つた。燈明をあげ、肩衣をつけ、歎異鈔に類したものを唱した。そして口の裡で、

「南無、南無、南無」

と弱々しく稱名しながら戻つて來る。焚き火で燻づた天井の大枘からは籾俵が吊下つてゐた。默つて焰をふく焚き火を眺めて居る者達の、大きく重り合つた影法師が板敷きを這ひ、板戸の上で搖れ乍ら延びたり縮んだりする。生活全體が、その佛壇のやうに古風な傳統に滿ちて居た。

彼女達が歸つた時、東京ではもう櫻も木蓮も散り、楓が若葉を擴げ始めて居た。

伸子は、或日、片手で着物の裾を抓みながら、如露で部屋の前に水撒きをして居た。

天氣つゞきの上、彼女の部屋のまはりは、建て增しの時地肌を荒されたので、乾きやうがひどかつた。雨に打れることのない庇の下など、土は黄粉のやうにボク〳〵であつた。いくらでも水を吸つた。さつさと如露を動かすと、水滴がひろがつて土に落るとき、歌かい清らかな粒の揃つた音がした。すがすがしい土の香が立つ。伸子は段々あとじさり乍ら、一心に撒いて居た。

障子が開いて、佃が顔を出した。彼は、暫く默つて伸子のすることを見て居たが、

「それはぢきすむの」

と云つた。

「ぢきよ。——でも——やめたつていゝのよ」

「——お茶が欲しいんだが」

「ぢやあ一寸待つて、すぐ行くわ」

「此處で飲みたいんだがな」

伸子は如露の水を切つて、敷居際に立つて居る佃を見上げた。

「——彼方へ行きませうぢやないの、ね？」

「……」

佃は、沈默で不服を表した。

「お畫に出たつきりだから、少し行つて喋つて來ませうよ。あつちでもきつとお茶を上りたい頃よ」

「行つたつていゝけれども——永くなるんで」

「いやな方！　何とか彼とか、いつでも駄々ばつかりこねて」

伸子は、冗談に本氣を混へて叱つた。

「することもないのに、いそがしいなんて口實は通して上げないことよ！」

個はまだ定つた職業はなかつた。旅行から歸つて後、伸子は二間續きの六疊に二つ机を置いた。彼はその前に窮屈に膝を曲げて坐り、履歴書を書いたり、彼方からのノウトを、漠然と整理したりして居るのであつた。初め、伸子一人の勉强部屋として作られた其等の部屋は、緣側つゞきだが離れのやうな工合になつて居た。藏前の廣緣と二階の裏階子とで、他の部屋々々から遮斷されて居た。袋のやうなたつた一つの出入口を閉め切ると、前の庭を見晴す丈で、一日人に會はずに暮せた。伸子が個と tête-à-tête で居るには、其故、大層都合よい構造なのであつた。然し、實際そこで彼と暮すやうになつて見ると、伸子は其特典を却つて痛し痒しに感じた。何故なら、個は只さへ引籠りであつた。伸子が細々彼の爲に小間使ひをすると、個は仕方ない時しか部屋を出ない――例へば三度の食事時とか、厠へ行く時とか、電話とか。父がかへつた時とか。――

田舍へ立つ前、斯う云ふ事があつた。矢張り、彼が部屋で茶を飲みたいと云つた時であつた。伸子は何心なく、

「ちやあ持つて來て上げるわ」

と云つて、食事部屋へ行つた。母が女中と夕飯の仕度の打ち合はせをして居た。彼女は伸子を見ると、

「何だい」

と尋ねた。

「お茶」

「――お湯があるかしら」

多計代は、手を延して鐵瓶に觸つた。

「あゝ丁度いゝ鹽梅だよ」

伸子が茶碗を揃へる間に、彼女は自分で急須を調へた。

「美味しい蒸羊羹があるよ、あれでも切らうかねえ」

ゆつたり茶を注ぐ母の態度には、伸子と一緒に茶を飲むことを樂しむ樣子があり〳〵見えた。伸子は三つ茶碗を並べたまゝ、部屋へ個を迎へに行つた。

「いらつしやいよ、母樣がその積りなんで私困るわ」

頻りに進めたが、佃は到頭動かなかつた。伸子は、已を得ず戻つて、母に囁をついた。

「今一寸手がはなせないんですつて。これだけいたゞいて行くわ……私はすぐ來るから待つてらして頂戴ね」

母は、惡意もなく皮肉に云つた。

「それは〳〵。——宿屋暮しのやうで御不自由なことだね」

母に後を向け、小さな盆に湯呑をのせて居た伸子は、自分達二人が愧しいやうな、大きな家の隅つこにいちけてかたまつて居るやうな、いやな心持がした。部屋まで數間の廊下、伸子の感情は複雜に動いた。

——さういふ經驗もあり、彼女は、如露を元の場所に戻し、バケツを執り上げ乍ら、佃に云つた。

「私足がよごれたからお風呂場へ廻つて行くことよ、先に行つてゝ頂戴」

伸子は、裏から風呂場へ入つた。彼女はタタキで足を洗ひ乍ら、時々耳を澄して、自分達の部屋の襖が開くかどうか注意した。ことりとも仕ない。伸子は足を拭いてから、藏前へ來て聲をかけた。

「どうなすつて？」

「居ますよ」

八

その返事で、伸子は襖を自分からあけた。

「——さあ、もういゝのよ」

佃は、まだ庭に向つた敷居際に佇んだまゝ、顏だけ伸子の方へ向けた。彼の額に陰鬱な横皺が現れて居た。迷惑げな、解つて居て臭れる筈ぢやあないか、といふ訴へが讀めた。伸子はその前に近づいて、低い眞面目な調子で云つた。

「ね、一つ家に居て、御飯の時しか顏を出さないといふやうなの、何だかよくなくてよ。一緒に暮す以上、打ちとけなければ、ね。だから來て頂戴——O村の家で此那ことないでせう？」

彼は、伸子に對する義務だと云ふ心持を示した聲で答へた。

「では行きます」

極微妙な、神經的な不調和が、段々家ぢゆうに蔓り始めた。伸子は自分も其を神經で感じた。

夕飯の時、彼女は元したやうに料理の手傳ひをした。その間、佃は部屋に居る。卓子の仕度が出來ると、伸子は、

「みんな被來い！」

と呼んだ。彼女の若々しい聲は遠くまで響いた。裏庭に居た保も、和一郎も、つや子は勿論、

「御飯　御飯」

と叫んで、どた〳〵馳けて來る。伸子も、手を洗つて食卓に就いた。父や母も箸をとるばかりに成つて居るのに、佃一人が揃はない。つや子は、

「お母ちやま、もう食べていゝ？」

と訊いた。伸子は氣が揉めた。其處へ、正面の戸をあけ、佃が、皆に向つて輕く頭を下げ乍ら入つて來る。——時間で云へばほんの一分か二分の待ち合はせであつた。が、一番人目を牽きたい貴婦人は最後に、皆揃つた舞踏場へ姿を現す通り、其の場の氣分に、何か際立つものが生じた。彼だけ變に別者——お客として目立つやうな、其瞬間、あゝ彼がゐる、といふ事をぼんやりではあるが、皆が新に感じなほすことを、伸子は感じるのであつた。伸子は、

「——どうなすつて？　おそかつたわね」

と云つた。彼から、お待ち遠でした、と云はせ度いと思つた。

「みんなお待ちかねよ」

佃は、一つの膝をかためるやうにして坐布團の上に坐り、卓子の上を狹く見、不明瞭に、

「さう……一寸」

そして、父母の方だけ向いて挨拶した。

「失禮いたしました」

「いや。——どうですね、山崎さんの都合をきゝ合せましたか。今日倶樂部で偶然會つたから、又改めて話して置きましたよ」

……次第に食事は賑になつた。仕舞ひ頃には、伸子を除いた誰もが、初めの一寸した心持の引懸りは忘れて仕舞つた。然し、このやうなことは一度ですまなかつた。次の日、一日隔いて又次の日、その次の日、如何いふ都合か同じことが起つた。ちき消える淡い感じが、度重るにつれ明瞭になり、伸子にとつて一種惱しい豫感のやうになつて來た。「食事時に」なると、多計代は制へつけた苛立たしさで云つた。

「佃さんには早めにお云ひよ、いつまでもお客様みたいに皆を待たせないで」

「さうしませう」

「――一體外國の大學なんかは、ひどく氣さくな青年らしい氣風だつて云ふぢやないか。あの人だつて、此處へ來てお前の手傳ぐらゐしてもよささうなものだね、――二人の時でも斯うなのかい？」

伸子は、エプロンの紐を解き乍ら、酸いやうな笑ひで口元を歪めた。

「さうでもないわ」

「ぢやいゝやうなもんだけれど……」

多計代は、それ以上云はず、卓子の花の工合をなほし始めた。古くなりかけた矢車草の葉をもぎ、少し上體を反らせるやうにして枝ぶりを見る。花いぢりは手先だけのことで、母の胸に云ひたいことが詰つて居るのを、伸子は直覺した。多計代は其きり何も云はなかつた。

數日で四月が終らうといふ日、伸子は從妹達と或友人の宅に招待された。曇つて居たが、艶のある灰色の空に、ねつとり濃い地上の青葉が美しい日であつた。四時頃、伸子が仕度をして洗面所に行くと、佃は、一緒に部屋を出て來て、廣縁の隅につくりつけた本棚の片づけを始めた。その本棚は家族共同のもので、本と云つても碌なのは一冊もなかつた。古雜誌の仕舞ひどころであつた。幾年間かの婦人雜誌

類が無秩序につめこまれ、それが崩れて、片方の硝子戸が開かないやうになつたことを、多計代が何かのついでにふと話した。伸子は、今彼の仕ようとすることを見て驚き、

「決して、貴方にしてお貰ひする積りで云つたんぢやあないのよ」と、止めた。

「放つて置いていゝのよ、其那ことは。本當に必要なら、誰かにさせればいゝんですもの」

「仕たつていゝでせう？　少しでも皆の爲になれば結構だもの」

「――氣晴しになさるんならいゝけれど……」

伸子は、梳きかけの髪を片手に握つた、そのかげから佃を見た。彼はぴたりと本棚に向つて板の間に胡坐を組み、もう戸をあけて、塵だらけの古雜誌を引出しては分類しだした。その後つきに、彼の心持を察するに馴れた伸子の眼を、捕へて離さない或ものがあるのであつた。危く、

「不機嫌？」

と訊きかけた。が、やめた。若し彼が不機嫌だとしたら、自分は友塚へ行くのを中止にするだらうか？　否。鏡の前に戻り乍ら、伸子は、何時の間にかこういふ風に働くやうになつた自分の感情を省みて、憫笑した。――鏡の面に顔を近づけて白粉をつけて居る伸子の頭の裡を、考へが靜に重く進行した。そして、伸子は、斯ういふ一見けちな簡單さうな心の煩ひで、自分だけでない、結婚して居る多

くの女が、氣を重くされ、不活潑になつて居るのを感じた。

仕度が出來上ると、伸子は自分で自分の氣を引立て、氣輕く彼に、

「行つて參ります」

と挨拶した。彼女は、帶や着物をきしませ乍ら、胡坐をかいて居る佃の上にこゞみかゝつて頰を觸れた。

「今夜は父樣もお留守だから、悠くり母樣と話でもして居らつしやい」

夜に入つて、細雨が降り始めた。九時頃になると、家のことを思ひ、落付けなく成つた伸子は、伸を命じて貰つた。晩春のしと〳〵雨で、伸の中は濕つぽく、生暖いいきれと幾の匂とがした。それに、登りの坂が多く、手間どつた。歸つて見ると、玄關にはまだ靴が見えなかつた。

「父樣は？」

「まだお歸り遊ばしません」

奥へ歩き乍ら、伸子は、どうか母と佃とが睦じく話し込んで居る光景に出會ひたいものだ、と思つた。戸をあける拍子に、愉快さうな二人の顏が自分に振向き

「おやお歸り！——今お前の惡くちを云つて居たところだよ」

とでも云はれたら、如何那に樂しいことであらう！　本當に、如何那に樂しいことであらう！

暗い廊下で、伸子はひとりでに微笑しかけた。然しその暖かい想像は忽ちかぢかんだ。——人間は、自分が棲息する家の空氣に對して、獸が巣の安全、或は近づいた危險を本能的に嗅ぎ分けると同じやうな直覺を持つて居る。伸子は部屋々々の鎖りかへつた調子、何處からか流れ出て、廊下にさへ感じられる冷やかさに、用心を感じた。伸子は靜かに扉をあけた。

「たゞいま」

佃は其處に居なかつた。弟達も居なかつた。夜氣の裡に母一人であつた。伸子は、我知らず搜し求めるやうに室内を見廻した。

「雨になつて困つたらう？」

多計代は、雜誌を伏せ、時計を見た。

「いゝえ伸をいたゞいて來たから……父樣だだつてね」

「——今夜はきつと遲からうよ、例によつて燒物の御連中だから……」

彼女は、沈着な觀察的な視線で、コートの紐を解いたなりで坐つて居る伸子を見た。

「着物でも着換へておいで」

伸子は素直に立つた。急ぎ足で、彼女は自分の部屋の襖をあけた。佃は机の前に居た。

「たゞいま」

「お歸り」

彼は、入つて來た伸子に背を向けて坐つたまゝ、首も廻さず答へた。——これも自然ではない。何があつたのだらう——伸子は、母と佃との間に不快が流れて居るのを察した。伸子は、岩壘な無愛想な、自分の力では押すも引くも出來ない崖に、左右から挾み込まれたやうな困惑を感じた。

伸子は、着かへてから父母の處へ行つて見た。多計代は、彼女の來るのを待ち兼ねて居たらしく、いきなり制し切れない率直さで云つた。

「佃さんといふ人は餘程如何かして居るね」

この間から母の心に溜つて居たものが、愈々溢れ出した。

「さうお——何かあつたの」

多計代は、伸子を凝つと眺めた。

「彼方で聞いて來たゞらう？」

「いゝえ」

「……斯うなのさ……」

話しかけ乍らも、多計代はさも厭はしさうな顏をした。

「——此那ことを繰返して話したりするのも大人氣ないやうで、本當に不愉快だがね……まあ初めから云はなければ解らないことだから。——お前が出かけて間もなく、あの人も獨りで淋しからうと思つて、お茶に呼んだのさ。丁度保やつや子は居ないし、いゝ折だからと思つてね、私はいろ〳〵二人きりで話す積だつたんだよ。お前も知つて居る通り、私にはまだあの人と云ふものが、しつくり腹に入つて居ないし、此迄しんみり話す機會もなかつたしね——私の心持では、まあ隔意なくお前といふものに對しての意見も交換したかつたのさ、口の先だけでお母さまお母さまと呼ばれる許りで、妙に他人行儀な氣持を兩方で持つて居ては堪らないからね」

「さうだわ」

「私は馬鹿正直だから、きつと佃さんも左樣感じて、眞卒な心持になつて呉れるだらうと期待したんだが——それが間違ひさ」

多計代の顏に新たな腹立ちが甦つた。彼女はぽつと耳朶まで赧くした。

「——駄目だよ！　あの人は」

「どうして？」

「どうしてつてお前……あの人はまるで冷淡だよ、ちつとも感激といふもんがない人だ。如何那無學な者だつて、此方が眞心を打ちわつて話せば本氣になつて來るのに、あの人つたら何て云ふのか――後ぢさりする許りなんだもの。たゞ自分は、お前の爲には如何那にでも盡す積りだ、自分は犧牲になる覺悟をして居る、と云ふ一點張りなんだもの。――何も私はいきなりあの人に犧牲になつて貰はうなんぞと云ふのぢやありやしない。氣違ひぢやあるまいし――お前の身も立つやうに、又あの人も工合よく暮させたい、其には、と思つて話し合はうとするのに、――問題にならないぢやないか」

母の氣象と佃の性質と、兩方知つて居る伸子には、これ等の不滿がよく理解された。母が、此程自分は衷心から話して居るのに！　と、熱した心のやり場がなくて齒痒ゆがる心持は同情された。其かと云つて、伸子には、決して佃が惡いとばかり思へなかつた。彼女は中立的に、

「あのひと口下手だから……」

と云つた。

「それに、私に就て話すと云つたつて――誰しも一寸困るぢやあないの、何をどうするつて云ふ、具體的な問題が今ある譯ぢやないんだし……」

容赦ない母の一種の熱辯に狩り立てられて、捕へどころない抽象的な追求に對し、佃が頻りに、又これも、彼一流の激昂性で、犧牲とか努力とか云つたであらうのを思ふと、伸子は何だか情けない氣持がした。

「――……其はまあ、さうみたいなんだがね――あれは――どうゆう夕飯時分だつたらう、あの人の處へ電話がかかつて來たのさ。大分長く喋つて居たから、私もよせばよかつたのに、つい何心なく、何處からですつて訊いたのさ。淺草の親戚です、といふのだらう？ちつともそんな親類のことなんか聞かなかつたし、大層下町だと思つたもんだから、おや〳〵妙な處に被居るんですね、と云つてしまつたんだよ。すると、あの人はひどくむつとしたらしい樣子でね、顏色まで變へて『お母さまは、私が何か變なことでもして居るとお思ひになるんですか』つて云ふぢやあないか！私にはさつぱり譯が分らないぢやないか。それでも何しろ、たゞ事でない顏つきだから、よく〳〵考へて見たらお前、――何かひどく邪推をして……」

伸子は、眉根の邊を引搾られるやうに感じ、きゝ乍ら傍を向いて、頰杖をついた。

「……私は、其那考へかたをするのは貴方の恥辱ですよ、と云つたがね……」

再び伸子が部屋に戻つた時、彼はまだ机の右にも左にも本を擴げて、その間に坐つて居た。

彼の强情さうな盆の窪は、彼女に向つて云ふやうに見えた。「私は何を聞いて來たか知つて居ます。貴女は私を理解して呉れるだらう？……が、思ひたいやうに思ひなさい。私は辯解しません」

母から聞いたことを、再び口に出すことは堪へ難いし、部屋にその心持のまゝ居るのも切ないし、彼女は藏前の廊下へ出て、腕組みをし、體を左右にゆすり乍ら、そこを行つたり來たりした。高い天井から十燭の電燈が下の板の間を照して居た。正面に土藏の網戸が見えた。拭き込んだ廊下は足袋の裏に滑らかに堅かつた。此那にも滑つこかつたか、と驚かれる夜の板間であつた。伸子は、寂しいので、益々體を搖り動かして歩いた。

九

風呂場は湯氣で濛々として居た。伸子は、裙を端折つて、大盥の中でつや子の體を洗つてやつて居た。溶けた石鹼の香ひや、水蒸氣の熱い濕つぽさが、衣服を透していやな氣持がした。つや子は、大きなスポンヂに湯をふくませ、兩手で搾つて、自分のおなかへ上から湯をかけ乍ら、噪いで笑つた。

「お姉ちやま、見てよ、見てよ、おぽちよ（臍）にお湯がしみるわよ、ぽらぽら」

多計代は、浴槽に浸つて居た。ふさけ過るつや子に、時々、

「さう騷いぢやあ駄目ですよ」

と云ひ乍ら、伸子にぽつ〳〵話す。佃の批評であつた。先夜伸子の留守中、不快ないきさつがあつてから、彼女は、彼に對する遠慮や最後の敬意を失つたやうに見えた。彼女が佃に向つて、又は彼について話す時には、定つて輕侮や恩惠の意識の混つた、特別な調子が出來た。彼女は、今も鬢櫛で、濡れた後れ毛をかきあげ乍ら云つた。

「まあいづれにせよ、人間といふものは萬全な者はないからね、互に許し合ふとしても……私はあの人を見て、益々疑問に思ふやうに成つたよ——卅——幾つかい？五か六だらう——兎に角その年まで純潔で居たなんて——何だか」

伸子は、

「そつち向いて、そつち向いて」

とつや子に背なかを向けさせた。そして、苦々しげに云つた。

「そんな話……今やめませうよ」

多計代は上り湯を汲み出して、顔を洗ひ乍ら、手拭の合間から亂れた聲で云つた。

「――考へて見ると、お前も全く女らしい人だね、好いとなると盲だもの――二人居る處を見ても、痛々しい位お前の方が餘計愛して居るのが解るよ……それでよければ何よりだがね――」

暫くして、彼女は又獨言のやうに呟いた。

「いつまで私がついて居られるわけでもなし――まあ若し一緒に惡くなるなら成るで、お前が其だけのものだつたと、諦めるばかりさ」

大體佐々の家庭生活と、佃の性質との間には、相容れない多くのものがあつた。佐々の家は、伸子の父親の代になつてから、外にも内にも、稍々物質的な繁榮を來した。勃興時代とも云ふべき家庭の空氣は、精力的で、排他的で、征服的で、餘り知的でない原始生命が充實して居た。皆がよく喋り、よく喰ひ、眠る。佃一人が屢々腸を害し、皆ほど強大な食慾を持たない、といふ一事でさへ、彼がこの家庭にあつては、異分子であることを際立たすやうであつた。

家庭の雰圍氣の代表として生きて、動いて居るやうな多計代は、佃が恐るべき敵でもなく、然し同化もせず、どこまでも、その異分子のまゝに在ることが、神經に障つてならぬらしかつた。彼女は次第に苛立ち、伸子に、露骨な意地惡い言葉を浴びせた。日暮れ方、伸子は部屋にでも居ると、

「こんなに急がしいのに何して居るんだらう――お姉さまを呼んどいで――つや子さん」

と云ふ母の聲がした。

「お姉さやま、およびー――」

「はい、はい」

出てゆく伸子を、立つて待つて居て、多計代は、

「どんな用事があるのか知らないけれど、少しは此方も手傳ふもんだよ」

と云つた。

「人一人が殖えれば、寫所だつてそれ丈いそがしいんだから、さうお客様になられちや困るよ」

獨りであつた時のやうに、單純に、

「いやな母様！ちつとも忙がしくなんぞない癖に」

とは云へない。母は、伸子を奪つた佃に向つてのむしやくしや、彼に自分を奪はせた伸子に對する寂しさをぶちまけて居るのだ。伸子が、卓子の上など片づけるのを、多計代は眺め乍ら、

「一體、毎日何をして居るんだい、佃さんは」

などと云つた。

「本當に大學へ行けるやうになるのかい？」

「來週からですつて……」

「――ちやあまあいゝけれど――人に訊かれても、何處へも出て居ません、ぢや困るからね、あの年で……お前からよくお禮を云ふやうにお云ひよ――お父様、あの御忙しい中を、この間だつてわさわざ津村さんの家までいらしつたんだよ、その爲に……」

佃は、大學へ通ふやうになつた。津村博士の研究室へ客員のやうにして、軈て彼の專門の講師にでもなるのであらうが、それで生活は立たない。彼は、在米中知り合つた人々に就職口の紹介を賴んだ。その爲の訪問になど、彼は安心して伸子の部屋に納つて居る氣にもなれず、毎日晝間は外出した。夕方、佐々と前後して歸宅した。劇務に追はれて一日を過した老齢の佐々より、佃の方が、疲れた疲れたと訴へた。伸子は、それを佗しく感じた。

夕飯後、彼も暫くは一座に連る。が、暫くすると、きつと、

「私は失禮します――少し仕なければならない事がありますから……」

と斷つて、獨り土藏前の部屋に引取つた。佐々の家で、規則立つた勉强をするのは勿論樂ではなかつた。主人が讀書家でなかつたから、夕飯後から眠るまでの時間、家庭の内には陽氣な混雜があるばかりであつた。佃の、皆に混つて遊んで居られない心持。それは伸子に理解された。けれども、彼はどうしてか毎晩、默つて立つて行つてもよささうなのに、きつと、ぎごちなく、

「私は失禮します」

と切口上で述べた。それはまるで、自分だけは、これでも重大な事を控へて居るのだ、と、宣言するやうであつた。彼が一人、皆に背を向けて扉をガラ〳〵と開け、出て、閉め終るまで、呑氣に喋くつて居た連中は、何だか咎められたやうな重苦しさを感じ、一寸默り込む。――その微妙な數秒間の間隙が、伸子に切ない思ひをさせた。そこで、彼女は、

「ね」

と、眞先にその氣まづい沈默を自分から破つた。

「一寸皆おきゝなさい此話知つて居る？」

或時巡査が、一人のこそ〳〵泥棒を捕まへました。交番に引張つて來て、散々擲つてから訊くことには、

「貴様よくも此那耻知らずな事をした。馬鹿奴！良心はどうした！」

「何ですい？旦那？」

「リヤウシンはどうしたといふんだ、人間は誰でも良心を持つて居るからこそ、惡事の出來んのを知らんか、馬鹿！」

「へえ――どうも……何です、わつしの兩親は十年前地震で潰れて死にやした」

「なあんだ！ハツハツハツハツ」

ハツハツハ。一緒に笑ひ乍ら、本當に下らぬ駄洒落だ、本當に下らぬ自分だ、と、伸子はこせ／＼心遣ひをする自分に腹が立つた。伸子には、佃はあゝやつて安心して、皆と喋つて居られない心持だが、部屋の机の上にのつて居るのは、決して大した仕事ではない。イラン語の詩の古臭い飜譯を書きなほすか、下書きを敷いて、墨汁の罐に筆を出し入れしつゝ、更に一通の履歴書を書いて居るだらうことが分つて居た。

十

彼等を繞む感情の渦が複雜で、強くて、伸子は日毎に苦しくなつて來た。彼女の性質は單純で、熱烈であつたから、母から來る刺戟、佃から來る刺戟、各々に全心で反應した。彼方へ打つかつて跳ねかへり、此方へぶつかつて跳ねかへり――伸子は落付いて仕事でもしたくなつて來た。佃が歸朝して以來、ちつとも整理されない感動や經驗が心の中にごた〳〵沸きかへつて居る。彼女は或日彼に云つた。

「――私少し落付いて勉強したくなつて來たわ」

「いゝでせう、おやりなさい」

「引越ししなけりやならないわ、――でも」

「……」

佃は疑はしげな、不安な顏付で伸子を眺めた。

「あゝ、違ふのよ、机だけ引越すのよ――こゝ、お互に出入りが邪魔だから、元の部屋へ行きたいと思ふの」

すると、佃は暫く默つて居たが、伸子の手を執り、訊きかへした。

「本當に勉強のためだけですか？」

「もちろんよ」

然し、伸子はその刹那、心の底の何處かを、微小な、棒ふらのやうな疑問が閃き過ぎるのを感じた。――

本當にそれだけかしらん？……伸子は一層快活さうに斷言した。

「もちろん、だから手傳つて下さる？」

「あゝ手傳つて上げますとも」

もう二人ともセルを着て居た。彼等は伸子が、祖父譲りで使つて居る樫の机の兩端をかいて、庭づたひに、客間の横手の部屋へ運んだ。

「暗すぎませんか」

「――でもいゝでせう？此處……」

客間と玄關だけが、昔、茶人の建てた時のまゝの建築で遺つて居る。その一部である古風な小庭に面したその部屋は、長年の塵を被つて柱さへ破れて居た。伸子は、新たに掃除した古疊の上に据ゑた机に向ひ、佃は、上り框に腰かけ――

「その松の下へ蕗の薹が出るのよ、春」

「――おや」

「なあに」

「蜥蜴」

初夏の日が庭の苔に落ち、刷毛目ついた羽目の白壁を照すのを眺めつゝ、彼等は喋つた。

幼年時代の思ひ出が、この部屋に坐つて居ると、伸子の心に次々に甦つて來た。

夏、獨りで遊んで居た時、飛石に置いてある四角い瓦のやうなものを何心なくめくつた。下にこんもり、ぼく〳〵乾いた土が盛り上つて居て、驚いたことには、そこに御飯つぶのやうなものが澤山あつた。蟻が周章て駈け廻つて、その御飯粒を銜へ、サワ〳〵音が聞えさうに、足を動して逃げ出した。

思ひがけない光景に、伸子はびつくりした。が、見て居るうちに面白さが募り、彼女は、竹の棒で、もう一つ瓦を引くり返して見た。其處は空つぽだ。もう一つ。あつた！あつた！御飯粒みたいな物を見る瞬間の官能的なセンセーションを享樂しつゝ、暑さの中を次から次へ、瓦をめくつて歩いた。

伸子はその蟻の卵を懐しく思ひ出した。わく〳〵した少女の心持が、再び經驗されない透明な激しさであつたやうに思はれる。

紙は展べられて居ても、そのやうな精神狀態で、伸子は現在の入り組んだ感情を、どう整理する手段

も見出せなかつた。現在は、實生活の上で彼女の手に餘つて居ると同じに、伸子の力量以上の素材だ。

何ぞといふと口論となつて卷き上る嶮しい渦を避けて、佃は土藏側の部屋に、伸子はその小部屋に、多計代は眞中の食事部屋にと三方に別れて數日暮した。

「――居るのかえ？」

或午後、多計代が、低い襖に束髪をこゞめて、伸子の部屋へ入つて來た。

「――案外い〻風が入るんだね、こゝは……」

「下見窓のせいね」

多計代は、他處の家へでも來たやうに、その邊見廻して居たが、

「佃、夕方歸るのかえ」

「さうでせう、別に何とも云つて居なかつたから……」

「そんならいそがないけれど……」

語調を更へ、やがて彼女は、

「私もこの間からいろ〳〵考へたがね」

と云つた。

「……」

「――おや〳〵、まるでひとのことみたいな顏だね」

伸子は勢

「何なの」

と、云はずに居られなくなつた。

「何、御迷惑なら云はないだつていゝけれどもね」

「いやあね、何なのよ」

「お前がたのことさ、いづれ。――あのひと、長男ぢやないつていふ話だつたね」

伸子は怪訝に思ひ、

「えゝ、何故？」

と、母の面を見た。

「ぢやあ他家へ入れるわけだね」

「さあ……」

「さうぢやないか、後繼者があれば、二男からは自由ぢやないか――實はね、いろ〳〵お父樣とも御相

談したんだが、どうせお前、離れられないんなら、一素佃を養子にしたらどうかと思ふんだがね……」

伸子は、

「――どうして？……」

と、目を瞠つた。

「――変ぢやないの、家にはちやんと和一郎だつて保だつて居るのに」

「それはさうさ、家のためぢやないよ、何も此那こと――お前達のために考へたことにきまつてるぢやないか」

伸子には、母の云ふ意味がはつきり飲みこめなかつた。飲みこめない乍ら、彼女は本能的に強い警戒を感じ、

「私達のためつて――私達は私達でやつて行けてよ」

と云つた。多計代は、歯痒ゆさうに、

「だから、お前は世間知らずだと云ふんだよ」

と、きめつけた。

「第一、考へて御覧、學校のことだつて、お父様の紹介や何かゝあつたからこそ、あゝやつて津村さんも直ぐ引受けて下すつたんぢやないか。それでなくて誰が素性も知れず、背景もない佃に、其那好意をしめすものか」

伸子は、十のものなら、大きな聲でこれは十だよ、十だからそのつもりでお受け取り、と繰返し云つてからでなければ、十の親切を與へられないやうな母の性格を情けなく感じた。餘りその聲が大きいのでつい、えゝ何だ！と思つて仕舞ふ。今も、苦々しい氣持で、伸子は母の言葉に沈默で答へた。

「世間に對してだつて、佐々姓を名乗れば、どこの誰だか知れもしない佃で居るより、どんなに重味が増すか知れやしない。さうでもしたら、ちつとはあのひとの價打ちも出るだらう」

伸子は、むら〳〵とし、

「そんな價うちなんぞ、つかなくたつていゝわ」

荒つぽく云つた。

「佃は佃で結構よ――人間の價うちなんて――そんなことで左右されないものよ」

「お前は今目が眩んで居るからね、さぞ立派な佃に見えるだらうが」

多計代は、刺すやうに、悠くり云つた。

「さうでもしなければ、少し極りのわるい御仁體だよ」

「極りのわるい人なら人でいゝのよ。そんな――養子にするなんて……」

佃と自分に與へられた屈辱の感じで、伸子は顏が赧くなるやうであつた。彼女は、幾らか心を鎖め、母に說明するやうに云つた。

「母樣は、ちつとも私の心持がわかつて居らつしやらないのよ。彼那に云つたぢやありませんか、母樣たちとは根本的に目的の違ふ生活をする積りだつて――それに、佐々なんて、大きい目から見たら、やつぱり何處の誰だか判りもしない名の一つよ。佐々が通用する中だけ、母樣なんか動いて居らつしやるからだけれど……」

「どうせ、そりや私は狹い生活しか知らないよ。だがね、事實が、今度の場合だつて證明して居るよ」

「――さうなら猶、私はいやよ」

「まあ、あのひとによく話して御覽」

多計代は、皮肉に笑つた。

「お前はいやでも、佃はいゝと云ふだらう」

其事について、伸子は佃に一言も話さなかつた。

數日經つた夜、佃も其處に居合せた椽側で、多計代が突然、その問題を再び執り上げた。

「どうだい――この間の話、勿論佃さんにもしたんだらうね」

伸子は不機嫌に、

「しないわ」

と答へた。

「……」

佃が傍から訊いた。

「何です？」

「――……」

すると、多計代が、

「いろ〳〵將來のことについてね、私達がいつまでつゞいて居られるものでもないから、お父さんとも相談したことがあるんですが――仕樣がないぢやないか、伸ちやん」

伸子は、さすがに母も、いきなりは云ひ出せずに居るのに、好意を感じた。彼女は、

「だから、もういゝことよ」

と云つた。

「いゝですみますか」

庭を月が照して居た。八つ手や梧桐の廣い葉の面が、濡れたやうに光つた。反對の側の樹蔭、枝の奥は異樣に暗く、庭がいつになく迫る力を持つて見えた。膝を抱へてそれを眺め乍ら、伸子は母と佃との問答を、熱心に聽いた。佃は勿論斷るに定つて居る。斷るに定つて居る——

「さういふのが私共の考へなんですがね——」

軈て多計代が一段落で、佃の返答を求めた。

「尤も、伸子は貴方も御存じの通りの性質だから、まるで耻辱でも受けるやうにお腹立ちですがね」

伸子は、耳を裏向けにするやうな集注で、佃の言葉を期待した。

「——……」

「どうです、私共は貴方の爲にだつて、決して惡いとは思ひません」

「——考へて見ていづれ御返事いたします」

伸子は、くるりと後を向き、

「そんなこと——考へないだつてもうわかつて居てよ」

と、叫ぶやうに云つた。

「貴方、そんな積りおありになりやしないんぢやないの」

默つて居る佃を見つゝ、多計代が云つた。

「お前は引こんでおいで——佃さんは佃さんの意見がおありだらう」

伸子は、皮肉さうに落付いた母の言葉で、絶望的な不安を覺えた。多計代は我知らず彼方にこづき、此方にこづきした佃を、今度は伸子ぐるみ、一層確り自分の手の下に結びつけて仕舞はう、として居るのだ。伸子は萬一其那ことになつたら最後だと思つた。何とかして自分を離すまいとする母の愛より、伸子は、生存の根底を脅かされるやうな恐怖を感じた。佃が、卽座に、一言の許に——伸子が豫期して居たやうに、その問題を笑殺して仕舞はなかつたことは、彼女にとつて深い不安であつた。

佃が立つて行く。踵にくつついて行つて、伸子は、

「ね、貴方、本當に考へる必要のある問題なの」

と、立つたまゝ背の高い彼の顏を見上げた。

「私——いやよ」

「……」

「私共の生活といふものは絶對に無くなつて仕舞ふことよ、若し其那ことしたら」

「だから考へて見ます、と云つたでせう？」
「禮儀上の挨拶？ぢやあ」
「……」
「ね、本當によ。私にだけ早くきかして。どつち？勿論いや、ね」
「さあ……然し——若しそれが貴女の幸福になるんなら、私は——どうせ捧げた體です」

十一

本心の明かでない、其辯變に對手の感謝を強るやうな佃の返答は、伸子の心を暗くした。
彼の曖昧な返事は、佃に對する母の辛刺な批評を自ら思ひ起させ、伸子を不安で苦しめた。彼女は、どうせ捧げた體です、と云ふやうな佃の言葉の厭味を感ぜず、そのまゝ受取る程幼稚でなかつた。同時に、恐ろしくて、それを彼の僞善的な云ひ廻しだけだとも思ひ得ない。而も、彼女の理性は、その

返事が、非常に複雜な性質のもので、言外に、彼は養子になることを大して迷惑と感じても居ない——それどころか、或は成つてもよいのに、たゞ伸子の思惑を憚つて、漠然とした言葉で答へたと思へなくはないことを、告げ知らす。——
伸子は、第一、母の期待通りの返事を佃がしたことが、殘念であつた。母は、それ見ろと、內心思はずには居られないであらう。それ見ろと思ふことは、取不直、佃が、彼女の豫言通り處世術に惡狡い男で、利用する爲に伸子を結婚まで引ずつて來た、と云ふ推測を承認することになる。伸子は、二人の愛のため、此は思ふに堪へなかつた。佃の名譽の爲、自分の名譽のため、母の爲、人間の心に潛む眞の愛の純潔の爲、伸子はどうしても、此問題は成就させまいと決心した。
たださへ人を信じ得ず、時々自分の疑惑が實現するのを見て、一種の誇さへ抱いて居る多計代は、更にその裏道りの人生觀を强めてしまふだらう。佃が、萬々一（實に萬々一、と渾心の力をこめて伸子は思ふのであつた）自分との結婚に不純な勘定を加へて居たとしたら、此世でそれは、さう易々のさばれない事を知られなければならない。伸子は、このやうに親と衝突し、周圍に反抗してまで、まともなものにしようと努力する愛が、單に佃が自分の愚かさにつけこんで、愛するよう努力するように仕向けてゐる結果だと、どうして思ひ得よう！

その晩、伸子は病的に切ない心持になつて、佃さへ颯爽とした態度であつて呉れたら、と思ひ、泣いた。生活に於て自分が孤獨である、と云ふ心持が彼女を泣かせた。

其後折々多計代が、

「どう成つたえ」

と云つた。

「駄目よ――無かつた話にして頂戴」

そして、伸子は佃にせつついた。

「早くはつきりした返事、しとしまいんなつた方がよくてよ。本當に斷つた方がいゝんだから、分つて居るぢやないの」

伸子が居ない時、居る時でも、多計代は何かの機會で佃を捕へると、返答を求めた。

「貴方、あれ程、伸子のためになら何でもすると云つて居らつしやるんだから、眞逆前言を食むやうなことはなさらないでせうね。――ちやんと、外國からよこした手紙だつてあるんだし……」

佃は總毛立つたやうな顏色と眼付とで、

「私の眞心は、きつと、今に判つて下さるでせう」

と、震へんばかりに云つた。

「私は、何でも堪へます」

然し、佐々の養子に成る、成らぬ、否とも應とも、それは明言しなかつた。佃は何故か、その點になると、非常な用心と頑固とで、自分の意志を明さなかつた。次第に業を煮やし、多計代は伸子の顏さへ見ると、そのことを云ふやうになつた。或日、伸子は苦しみに堪へられなくなつたので、到頭、

「何と仰云つても駄目」

と、宣言して仕舞つた。

「假令、佃がきいても、私がいやです。佃がどんな動機からにしろ、承知して御覽さい。後で、決してそれを愉快にお思ひになれはしない。私、そんな皆の生活の淨らかさを濁すやうなこと、決していや！」

事實さう展開すれば、伸子の云ふ通りに彼女の感情は動くであらうのに、多計代は擲られたやうに激―た。涙をこぼしつゝ云つた。

「全く――全く親の心子知らずだ。――そんなに親を苦しめて何がいゝ。嫁に行けば、もう他家の人で、私が死んだらもうそれつきりだ、野たれ死をして、この上恥をかゝさないがいゝ！」

伸子も泣きながら云つた。

「ねえ母様、杉苗だつて大きくなれば別に離れて育つでせう？その通りよ、人間の生活も――ね。何年か後に、きつと母様は、私が此那に強情に云ひ張つたよさがお分りになつてよ。私だつて譯なく強情は張らないつもりよ」

傍に居た弟や妹は、一人立ち一人立ちして、部屋を出て行くのであつた。

母は、その間にも、法律上佃を入籍させる準備をして居た。伸子はちつとも知らなかつたが、机の前に居ると、

「お呼びでございます」

と、女中が來た。

「なあに」

多計代は、慎つて、何も手につかない風で坐つて居たが、

「佃といふ人は、恐ろしい男だね」

と云つた。

「どうして」

「どうしてつてお前、あの人はちやんと、養子になれないのを自分で知つてかかつて居るぢやないか」

伸子は譯が分らず、默り込んだ。

「此間父様が、會で井田さんにお會ひなすつたんだとさ、それで、佃を入籍させるについて、種々相談しておおきになつたら、昨日、戸主は養子緣組が、法律上出來ないことになつて居るつて、返事があつたよ」

佃は、岡本の二男であつたが、遠緣の佃の名籍を繼いで居たのであつた。

「本當にね、つい忘れて居たわ」

「まあ／＼お前はそれでさぞ安心だらうが、私達こそいゝ面の皮さ、佃さん腹んなかで、さぞ可笑しくておゐでだらう」

「眞逆。あのひともそれは氣がつかなかつたのよ」

「さうだらうか――怪しいもんだ。然しまあ、流石十五年アメリカを流れて來た人だけあつて、上手いものさ、否ですと一言、はつきり云つて仕舞へば、もう此處に息子顏をしては居られなくなるのを、ちやんと知つて居る」

「あゝあゝ」

伸子は故意と大きな聲で歎息した。

「可哀さうに！あのひと、惡口云はれる爲めに生れたやうなものね」

やつと笑ひ乍ら、

「人生れて、伸子の夫と成る勿れ、だわ」

戸籍の事情で、多計代の感情は一變した。彼女は、佝に疾しい打算がないのなら、その證據に、一日も早く佐々の家を出ろと云つた。

「お前もいやだらうが、私も隨分今日まで我慢して來たんだからね、直ぐ明日にも別になつて貰はう」

娘を愈々手許から奪ひ去られるといふ絶望を、多計代は涙と惡罵とでゝも現すしか、やり場を見出せないやうに見えた。彼女の誇強い氣質は、自分の悲しみを弱々しく認められ、同情されるに堪へないのだ。猛々しく熱情で自らを燃し盡さうとするやうに罵るのであつた。

「そりやもう、お前には居るほど邪魔な親だらうが、まだつや子が小さいからね、もう少し生かして置いて貰はう。さうやつて、私の壽命の縮むのを視て居るのは、さぞ面白からうよ」

あゝ。あゝ。伸子は何と云つて自分の内の親愛を云ひ表してよいか判らず、泣いた。彼女は少女時代から、母とは普通の親娘と違ふ情熱で結ばれて來た。互に強い愛と憎とを持ちつゞけて來た。母は女性

として、伸子にとつて、或時は全き母であり、或時は友達であり、或時には競爭者であつた。とにかく、母は伸子に向つて、存在のあらゆる角度を、生のまゝ、强烈に打ちつけて生きて來たのであつた。伸子にとつても、母は全力を要する生存の對照であつた——自分と母との性格の差を自覺し、生活態度を批判し、一言に云へば、彼女の模型でない一女性としての自分を形造つて行く爲には、伸子は、生半可の力を費したのではない。普通、娘が母親に抱く懷しさ、休安と、正反對の生活燃燒の、異樣な閃光が二人の間に在つた。今その門を經て次の生活期に移らうとする時、伸子の魂が滿す、この苦い、この輝いた、追想の蝟集を、何と母に告げよう。そして又、伸子は涙の隙に思ふのであつた。何と自分達母娘の愛は普はづれであらう、離れると云へばこのやうに全力的に傷け合ひ、はたき合ひ、つまりはその勢で離れなければ、離れることも出來ない程、深く愛し合つて居ると云ふ有樣は。——

より情熱的で無い、平和的な佐々は、妻と娘とのこのやうな心的格鬪に、手の下しやうがなかつた。彼は一方に妻を宥め慰め、一方伸子に心から歎息して訴へた。

「いつも家庭のトラブルを惹き起すのはお前だよ、何故もつとテンダア・ハアトになれないかい、愛を受け入れなさい。——平和に暮さう……え？　自分も人も苦しめる主義なんぞ捨てちまへ」

伸子は辛うじて、

「主義なんぞぢやあないのよ、父様」

と、云ひ難い悲しみで答へるだけであつた。佐々も、心痛から、單純な實務家らしい怒りかたで、終には、

「さあ出て行け！お前が親を捨てるなら、俺も子を一人捨てた。さあ、永久に出て行け！」

と、叫ぶのであつた。

四

一

彼等は引越した。家は、吉祥寺前の醫者の練瓦塀と、葉茶屋の羽目との間の狭い露路の奥にあつた。兩親の家まで、吉祥寺を抜けると十五分ばかりで行けた。

彼等が移つたのは、八月の暑い盛りであつた。伸子は、家さがしに毎日歩きすぎたので、熱を出し、床について居た。引越しの日も、彼女は寢床の上から、庭傳ひに伸夫が本箱を運び出すのを眺めた。

それが行つて仕舞つてから、伸子は、床の上に立つて、少しふらつき乍ら着物をなほした。母は、獨り、二階の椽側で長椅子に居た。凝つと團扇を胸のところにあて、軒先から繁つた桐の青い葉の照りの下に、沈んだやうに横はつて居る。伸子は裏階子から登つてゆき、默つてその傍に佇んだ。母も默つて居る。餘程經つてから、多計代は、娘の方を見ずに訊いた。

「もういゝのかえ？」

「大抵いゝらしいわ」

二人はそれぎり、又言葉をとぎらした。さうやつて居てはきりがないので、伸子は、

「――ぢやあ……」

と云つた。多計代の顏に、引歪むやうな苦しげな表情が現れた。それを見ると、伸子は、自分も腕板を剝がれるやうな苦痛を覺えた。

「……行つて參ります」

迚も他の訣れの挨拶は出なかつた。明かに、今は涙を制しかねて居る母を、伸子は二目と見て居られなかつた、彼女の、咳拂ひとも何か云はうとする前ぶれともとれる噎び聲を後にし、どし〳〵階段を降りた。足に力を入れ、一歩々々降りる時自分の眼からも涙がこぼれた。下に降りきると、暫く堪へ難い心持で、彼女は手摺の柱に頭をすりつけて泣いた。別に暮すのは當然で、その上皆が希望したことだのに、不思議なものだ。自分の育つた家をいざ去るといふことは、此樣に悲しく辛く眞實別離の感が魂を貫いた。古びた家の柱等が急に目を覺し、出て行かうとする自分を、愕いて見守つて居るやうにさへ感じる。伸子は今を境に自分が此處で過した幼年、少女時代の思ひ出のすべてが、家と俱に後に遺るのを感じた。自分は獨り去る。然し思ひ出はいつまでも、當時の新鮮さ、多樣さで、この家に生きつゞけ住みつ

づけるであらう。左樣なら！不思議な、明るい、暗い子供時代の生活よ、總て左樣なら。

其家は西向きで、崖のとつぱさきに立つて居た。午後になると、西日が小箱の口のやうに、たつた一方に開いた椽側からさし込んで來た。力一杯に、西日は部屋の壁際まで照りつけるのだが、それ丈風もよく通ると見え、伸子は大して暑くも感じなかつた。此那小つぽけな家、此那西日。伸子は珍しい心持で、暑くないキラ〳〵した夏の斜光を浴びて坐つて居た。大體、其年は、貸家拂底が極度に達して居た。彼等は、貧しいポケツトから拂へる最高を拂つて、やつとその不健康な住居を手に入れたのであつた。

引越しのごた〳〵も鎭まり、佃は朝毎、大學へか、さもなければ、その頃就職した私立大學へ出かけた。八時頃。それから夕方四時半か五時まで、伸子はたつた一人で暮すのであつた。永い明るい夏の日が何とゆる〳〵經つことか。

或午後、伸子は八疊と六疊との境の開け放した襖によりかゝり、ウクレリーを彈いて居た。

例によつて、西日は、もう疊三分の一位のところまで、眩ゆく躍り込んで居る。粗末な譜本を膝の前にひろげ、胡坐を組み、伸子は譜と首つぴきで、フラットの多い民謠を稽古して居た。

Hao, hae, haae……ハオ、ハエ、ハアエ……、ポロンポロンポロンと三重音の繰返しをつけ

るわけなのだが、伸子の指は、迚も、譜本の挿畫に、頸から大花環をかけてウクレリーを彈いて居るハワイ青年のそれのやうには動かない。一つ位きつと、かんどころがずつた。或は押しがむらで、肝心の音が鳴らない。伸子は、頭で拍子をとりつゝ、一二三、一二三、何遍となくやりなほした。毎日口を利く對手もなく暮すと、伸子はさうやつて、せめて樂器に合はせてゞ自分の聲を出したいのであつた。

ハオ、ハエ、ハアエ……

何と下手なことだらう。三味線のひける人は、きつと忽ち上達するに違ひない。熱心にやり乍ら、伸子の頭はこのやうな事を考へる。そればかりか、彼女はいつの間にか、隣家の物音を悉く聞いて居た。二軒長屋のやうな構造で、伸子の住居と隣家とは、羽目板一枚でぴつたりついて居た。まだ顔を合はせたことはないが、その家には支那人一家が、日本人の家族と暮して居た。男の子に（支那人の）湯を使はせて居るらしく、バシャ〳〵水の音がした。

「坊ちやん！さ、いゝお子、ね」

日本の、家事をとり扱つて居る女の聲が表面は優しく、然し腹では焦々して居るらしい情無さで聞える。何とか、遠慮がちな支那語で、母親が息子に云ひきかせるのも聞えて來る。伸子は、自分の掻き鳴らす樂器の音の單調さを意識した。あの支那語もいやにおとなし過る——愈々燦めき射りつける西日につれ、伸子は目的のわからない憂愁に捕はれた。——捕はれたと云つては當らない、西日が餘りきついので、伸子の內心から憂愁が蒸發するとでも云ふやうだ。

別に家も持ち、仰は職業を得、先づこれで自分等の生活が豫定通り始つて居ると云ふ譯だが——伸子は、然し、何だかその生活に、自分を馴らして仕舞ふことが出來ずに居るのであつた。例へば或一つの晩餐會がこゝにある。料理は勿論、金緣の献立通りに燕尾服の給仕によつて運ばれて居る。招かれぬ客も居ないし、主賓が缺けて居るわけでもない。乾盃から卓上演說まで、總て遺漏なくプログラム通り運ばれて居る。而も、始めから終りまでその席に連り、プログラムの豫定通りの進行の證人となつて居るうち、其會合全體の裡に、自分が何の趣味も意味も感ぜず、突然變な不安に促されて周圍を眺め廻すやうな場合がある。傍の誰一人、自分の感じるやうな屈托は持つて居ないと云ふ發見で、彼は自分を慰め得るであらうか。逆に、益々自分のその場にそぐはない感を强めるであらう。

伸子もそれなのであつた。細君といふ席が、彼女にぴつたりしないのであつた。どうぴつたりせぬかと云ふ原因を一口に云ふのは困難だし、不可能なことであつた。それは奥深いところにあるだらうし、纖細な氣持のニュアンスなのだから。たゞ一つだけ伸子に分つて居たことは、生活が廻轉する幅の狹さ、重さ、若々しい柔歇性の缺乏であつた。是からこそ自分達の生活だ。さあ、私の愛する人よ、多く

の希望をもつて生活に踏み出すと、いつの間にか生活の方が、牧場の柵かなどのやうに自分達をとりまき、伸子はその裡に、夫といふ何處やら嵩張つて動かぬ者と、鼻をつき合はせてしまつたやうに感じるのであつた。

但は、そのやうなことはちつとも感じないらしかつた。前晩寢床の上で背中を丸め「軍は潰走した。我等は勝利を得、敵將五人を捕虜とし云々」と下讀みをして置いた初等ラテン讀本を持つて出勤して行く、歸つて來る。遲疑なく明日の朝も出勤するであらう。彼に、伸子は自分の感情を訴へるきつかけを見出せなかつた。それに、彼女は、自分達の經て來た感情生活を時々顧みた。互に知り合つてから今日迄、彼等に波瀾があり過た。周圍と戰ひつゝ互の愛を見失ふまいとする熱中、彼を守り自分を守る努力、いつもそれ等の爲、伸子の心は緊張しつゞけ、刺戟されつゞけであつた。それ等が無くなつたので、自分は張合ぬけがしたのであらうか？平和に處す法を忘れたアマゾンに、自分は成つたのであらうか。伸子は、そのやうに考へる時もある。然しその考へは、目前にある生活とそぐはない感じを、消す役には立たない。……

伸子は、ウクレリーを袋に仕舞つて、立ち上つた。

二

伸子は、臺所口に錠をかけて外へ出た。表の大通りでは、電車が喧しい軋りを立てゝ、埃の中を走つた。吉祥寺山門前の甃のところでは、三人の少女が唄に合せて毬をついて脚の下を潜らせて居た。伸子は、鐘樓の傍を、裏通りへ抜けた。斜にもう一筋、ごた〳〵した大通りを横切つて、靜かな屋敷町に出た。彼女は散歩がてら、母やつや子に會ふ積りなのであつた。

門の修繕で、左官が入つて居た。木の船の漆喰を、詰らなさうに小僧が掻きまぜて居た。つや子は、書生の手につかまり乍ら、氣をとられて其を見て居た。伸子は遠くからその形恰を見、思はず笑つた。書生がそれを見つけ、つや子に何か云つた。つや子は、ひよいと顏をあげて、往來をゆつくり來る伸子を認めると、

「やあ、お姉ちやまあ」

と、とびついて來た。

「お母ちやまは？」

「ねらしつてよ。おねえちやま、何故もつと早くいらつしやらないの、こなひだ、じき來るつて云つたのに」

「うん……」

仲子は、つや子を助けて、蓙や板切れの間をまたいで通つた。つや子は、仲子の袂の先を引かついで歩き乍ら、じろ〳〵姉の手元を見て笑つた。

「はあ、見つけたな、おづるさん」

「うん、僕ちやんとわかつたの、だつて、この間仰云つたでせう？」

「――でもこれは違つてよ」

仲子は、空恍けて云つた。

「たゞの古新聞」

「嘘う！わかつてよ、ちやんと見えるわよ、コドモノクニよ」

玄關に女下駄が揃へてあつたので、仲子は木戸から庭へ廻つた。西洋間の窓のアスパラガスの鉢植の蔭に、客の小じんまりした束髪の後つきが見えた。七月、佃を佐々に入籍させるさせないといふ事で兩親と衝突した時、仲子は、あの窓のところに立つて汗と涙とを流した。仲子は、その時の自分の激しい言葉をはつきり思ひ出した。あれはもう過ぎたこと、生活は違つた容貌を持つて今流れて居る、さういふ感じが強く仲子をうつた。

つや子と芥かくしをして居ると、客を送り出した母が、窓から首を出して仲子を呼んだ。

「二階へおいでな」

登つて行くと、二間ずつと通して襖をあけ放ち、廣い方に緋の毛氈を敷いてあつた。大きな盆に、繪筆や筆洗繪具皿などをのせてある。多計代は、毛氈の上で唐紙を截つて居た。仲子は、その光景を見ると、

「おや」

と云つた。

「繪の御稽古？泉さんがいよ〳〵來て下さるやうになつたの？」

「あゝ。何だのかだのと例によつて、なか〳〵捗取らなかつたのだけれど、やつとね。今日で二度目さ、この年で始めたんじやあ、どうせ本ものになりつこはないから、せめて色紙ぐらゐ間誤付かないやう

になれば大出來としないじやあね」

繪でも習はうと思ひ始めた母の心持を、伸子はいとしく感じた。

「それで結構ですとも！打ちこんで稽古するものが出來ただけで萬歳よ、――どれ？この前のは……

……一番初めの……」

「何にしろ、何年も繪筆なんぞ持たなかつたから、からきしさ。小藾さんの頃からずつとやつて居たら、どうしてこれだつて今頃は、小何とかだよ」

多計代は、自分の氣焰に興じたやうに、晴やかに大笑ひした。屈託ない笑ひであつた。伸子は、繪の稽古が此那に心に影響するものかと、一寸刺戟を感じた。伸子は以前から、母が和歌でも本氣でやればよいと思つて勸めたこともあつた。その方に却つて緣がなく、繪になつた。學校時代の若い時、野口小藾に好意のある指導をされた、それが因緣になつて居るのだ。多計代は、大色紙ぐらゐの唐紙に竹を描いたのを見せた。

「どうだい」

そして、自分も傍から覗き込んだ。

「こうと頭では分つて居る積りでも、いざとなると、筆が何とも云ふことを聞かないでね」

「ハ、、、。まるで十年か廿年おやりになつたやうね、ハ、、、筆がいふことをきかない、は虫がよすぎるわ」

「又ひやかす！どうせお前は偉いよ。――それは冗談だがね」

多計代は、泉さんの繪を出して見せ、それについて二三批評した。

「如何思ふかい？氣魄が無さすぎるだらう、私は玄人になり過ぎて、かぢかんだやうなのは嫌いさ」

伸子は、違ひ棚の下に、見なれない螺鈿の支那の、小箪笥が置いてあるのを見つけた。

大膽な柘榴の實の圖案だが、象眼した貝の色が、深味もあり厚みもあつて、素晴しく立派であつた。

「いゝのね、いつお買ひになつたの」

多計代は、竹の清書でもするのか、片手を毛氈について、筆に墨をふくませ乍ら、

「え」

と、生返事をした。

「どれ？　あゝ、それかい、綺麗だらう？例によつて父様のどらさ。私の繪具箪笥にしろつて、下すつたの」

伸子には、夜、父がわざと知ん顔で、其大包みを部屋に運ばせて入つて來た樣子が、見えるやうで

あつた。

「相變らずフエイスフル・ハズバンドね……親切にして上げないと罰が當るわ」

「……私も近頃はさう思ふよ」

多計代は、首を曲げて、自分の描いた細竹の枝を眺め乍ら、緩くり云つた。

「近頃は全くいゝ父樣さ、私もお氣の毒だと思ふようになつた……相變らず癇癪はひどいけれどね……」

「元からいゝ夫ぢやないの」

「若い頃の氣むづかしかつたことゝ云つたら！伸ちやんなんか知らないさ。……だけれども、まあ、あれで、父樣もごく純な人だつたから持つて來たのだね。それでなかつたらお前……今になつて、いろ／＼男の人を見ると、つく／＼さう思ふよ……仰なんかとは比べものにならない純粹さがあつたよ、確に」

段々形になつて來る繪を眺めながら聞いて居た伸子は、女らしく自分の夫自慢をする母の調子の朗さに愉快を感じた。だがほんのぽつちり、極ぽつちり、佗しくないこともない。――伸子は、自分が姉になつて、妹の罪のない夫自慢をきいて居るやうな劬り心になつた。

「……ふあ何ね、父樣があれだけ愛してゐらつしやることが確だから、母樣もいろ／＼強さうにして居らつしやれるやうなものねっ土臺が大丈夫だから、安心してその上で跳ねられる……さうぢやあないこと？」

「さあね……そんなものかね」

階下で、二人は茶をのんだ。空也の話をして居ると、如何かして喉がいらつき、伸子は顏を顰めて咳拂ひをした。すると茶飲茶碗を口の傍へ持つて行きかけて居た多計代が、手を止め、じろりと伸子を見た。

「おや、そつくりだこと！」

伸子は、無邪氣な氣持で訊きかへした。

「なにが？」

「咳拂ひがさ、お前の。仰もそんな、乙う氣取つたやうな咳拂ひをするよ」

伸子は、澁い、辛うじての薄笑ひで唇を歪めた。

「……いやあだ、偶然よ」

「さうぢやあないよ、そつくりだよ、だつて……」

伸子は、厭はしさうに、然し穏やかに云つた。

「さう一々神經質に檢査しないで頂戴よ、私は何の氣なしにするんだから」

伸子は、和一郎が此頃凝つて居る寫眞の、靜物印畫を一枚貰つて歸つた。

夕飯の時、伸子は佃に話した。

「今日はね、おひるつから勤坂へ出かけたのよ、そして一つ、新しい發見をして來たわ」

佃は、興味もなささうに、

「へえ」

と云つた。

「なんです」

「母様についてよ、少し違つた考へかたになつたの。これまで、私子供の時からの癖で、母様の云つたり仕たりなさることを、餘り重大にとり過ぎて居たのかもしれないと思ふのよ」

伸子は、今日印象を得て來た母の心の單純さ正直を說明した。

「だから、いろんなものが——僕しさでも、意地わるでも、その時々によつて聯絡なく、率直に無技巧に出るのね、きつと。どうしてやらうとか、斯うしてやらうとか云ふやうな計畫的なものはないのよ、さうお思ひなさらないこと？」

伸子は、勤坂から歸る道々其等のことを考へ、平和に至る道を見つけたやうな心持を感じた。母との交渉は、彼女にとつて絕えざる重荷であつたが、そこに、理解を單純にする一見地が出來たやうで、伸子は淸らかささへ感じたのであつた。佃もさう分れば、氣の持方も違ふだらうと、伸子は樂しい期待をもつて其を話し出したのであつた。けれども　彼は、無感動の狀態から出なかつた。彼は、小揚子を使ひつゝ、額の上に皺をよせ、斜に伸子を見上げて答へた。

「僕は批評しませんよ」

「批評ではなくよ、見かたよ。どうせ私共は一生無關係にはなれないんだから、なるたけ賢い理解を持つ方がいゝと思ふの、お互の爲に……好意のある、けれども、うはてな心の持ちかたね……」

「——まあ、分る時が來れば分りませう」

さう云ひ乍ら、彼は、顏に一種特別な——餘り高貴でない表情を浮べて、指の節を一本づつぽきぽき折り鳴らした。伸子は、眼を逸し切ないやうな顏をした。佃が、一般に、人間的興味のある活々した話題を好まないのが、伸子に不滿なのであつたが、其にも增し、彼が、氣のない、一寸面倒くさい時、ぽ

きぼき指頭の平たい、無骨な指の節を鳴らすのが、伸子には厭なのであつた。彼は、近頃其を始めた。その骨の鳴る音をきくと、伸子は氣が滅入つた。

（恐ろしい。彼も指をぼき〳〵折る。カレーニンも、冷淡な、いやな顏をして机の前で指を鳴した。彼はカレーニン的なのだらうか？では？）

伸子は、今も衝動的に、「やめて」と云はうとして片手を延した。が、譯の分らないものに制せられて黙つた。彼はもう一度遣るだらうか。――伸子は、自分に對して他處〻〻しい、暗い、苦痛を待つやうな氣持で、彼の手元を見守つた。然し、彼は其に心付かず立ち上つた。そして、机の前で、勤め先から持つて來た風呂敷包みを解き出した。

伸子は、母のところで見た朝鮮の小簞笥のことを思ひ出して、云つた。

「螺貝でも隨分いゝ色のあるものね、繪具箱にするんだつて、まるで大きな蛋白石を嵌め込んだやうなのを見て來てよ――今日」

「ふうむ、よつぽどするだらうね」

「――さうね。……ほら、よく水色つぽいのや薄い桃色みたいなのあるでせう？そんなのとはまるで違つて複雜なの、光りかたが。……　焰みたいだつたわ」

けれども佃は、それの話題に關係なく、机の上の鉛筆やペンを片よせ、やゝ唐突に云つた。

「あれを見て置いて呉れた？」

「えゝ」

「どう？」

伸子は、

「さうね」

と云つた。

「持つて來るわ、とにかく」

佃は、彼の專門に關する小著書の下拵へをして居た。通俗的な、波斯文學概論であつた。伸子は、丁度その目的に適つた素人讀者の代表として、選ばれたのであつた。伸子は、二寸程厚い原稿を、自分の机の抽出しから持つて來た。佃は、自分の仕事に對する、親しみの現れた手つきで、ぱら〳〵頁を翻した。

「何か苦情がある？」

伸子は、彼の氣を挫く氣はなかつた。佃が、重い筆を働かして、其丈の仕事をしたのは、彼女も忱

びと感じて居るのであつた。

「苦情は大袈裟だけれど、もう少しどうにかした方がいゝと思ふところはあるわ」

「どこ？」

「紙が挾んでありやあしないこと？説明が足りないのよ、處々。まるで豫備知識のないものが讀むと、物足りないの。それに何といふか、材料の底まで、たつぷり筆が屆いて居ないやうなところがあるやうな氣がするんだけれど……」

伺は、辯疏的に云つた。

「そりやあ、小説のやうなものとは違ひますよ。面白いものぢやあないに決つて居る。——何しろ片手間にやる仕事だから……材料を整理するだけだつて、容易ぢやあない」

「さうよ、だから猶更、いゝものに仕上げなくてはね」

伸子は、劬りつゝ、奥から閃くものゝあるのを自覺して云つた。

「仕事から云へば、學校の先生よりこの方が貴方の本道なんだから、云ひわけをしないですむやうなものに仕上げなけりやあいけないわ」

彼等は、原稿について、暫く話した。昨日の午後、今朝と、其を讀み乍ら感じたのだが、伸子は、其を書いたのが夫だからと云つて、自分が些も寛大な批評者となれないのを知つた。却つて、慾が加はるせゐか、敏感で、氣むづかしくなつた。凡庸な小冊子の著者によくあるやうに、常套語を平氣で數多く使つたり、廻りくどくて、明快な思想も感情もない文に出會ふと、伸子は悲しみと腹立たしさを一緒くたに感じた。

「駄目、駄目、これはなあに？」

禮儀も何もはね飛ばした癇癪を破裂させない爲に、伸子は、それが下書きだといふことや、夫の初めての試みだといふことを、絶えず念頭に置く必要があつた。同時に、彼女は、自身に對して疑ひをもつた。心の優しい人といふものは、斯ういふことに對して此那氣持は持たないのだらうか。自分が見榮坊で偏狹な故で、斯樣な、謂はゞ特殊な文學的感覺の缺乏を、此程苦にやむのだらうか——

伺にも、種々理窟があるので、彼等は敎唆、重苦しい沈默に陷づた。一區切すんだ時、伸子は吻として云つた。

「あゝ、やつとすんだ！、頑張りの寄り合だから大變だ」

彼女は、手を延して、赤インクの栓をした。

「さ、一寸息ぬきに喋らない？」

「喋つてもいゝが――勁坂で充分樂しんで來たでせう」
「樂しんでなんか來やしないわ、別に。貴方と外の者とは違ふぢやあないの――何か珍しいこと無かつた？」
「さあ……。ぢやあ斯うしよう」
但は、いゝ思ひつきだといふやうに云つた。
「どうせ、たゞ喋つて居るんなら、喋りながらこれをつけませう、ね？……頭を使ふことでもないからいゝでせう？」
彼は、机の上から、下積みの茶表紙の小帳面を引出した。伸子は、其を見るとふざけたやうに、
「ふあ――」
と、閉口した。
「閻魔帳？」
伸子は　冗談の下に本心を現して云つた。
「樂しみたい、あゝよし、小遣帳――洒落にもならないわね」
但は、落付いて小遣帳に日づけを記入し乍ら、じぶくる伸子に教訓するやうに云つた。
「何年もあとで見ると、その頃の生活が分つて面白いものになりますよ。今日は――と、バジ十五錢……多賀君の送別會費三圓。君の方は？」伸子は、興ざめ乍ら答へた。
「――つや子にコドモノクニを買つて行つてやつただけ」
伸子の部屋は、北向の三疊で、疊硝子の障子が二枚たつて居た。上一枚は透徹る硝子で、葉茶屋の土藏だの、穢いトタン塀の天邊、自分の家の古びた庇などが、何時も同じ光線の中に見えた。其處から、空は見えなかつた。疊硝子の上に、前に住んで居た子供の、太い鉛筆の、終りになる程大きい、亂暴な惡戯書があつた。5×82÷1.1＋000

三

彼等の家には、訪問客といふものがなかつた。高等教育を、日本で受けなかつた故であらう。但に友達と呼ぶ者は殆どなかつた。

佃は、夜よく近所へ散歩に出た。伸子もついて出た。彼等は槇や檜葉類を少しづつ買つた。それ等を、西日のさす崖ぶちや、むき出しな格子の左右に植ゑた。其邊は、遠くに小石川臺の梢を望むぎりで、立てこんだ各々の家には、木らしい木の生える餘地も無かつた。槇は露路の中で、青々と、子供の目を牽くらしかつた。午後、小學校のひけ頃になると、男の子たちが、其二本の、四尺たらずの槇の周圍に、いつとなく集つた。

「おい、何だい、この樹」

「松だよ」

「違ひますよ、松ぢやあねえよつと。松の葉は觸るとちく〳〵するよ」

ひつそりしたかと思ふと、いきなり一人が叫んだ。

「あら！あら！わあるいの」

するともう一つの、ひそ〳〵聲が臆病らしく云つた。

「叱られるよ」

佃が家に居ると、伸子は惱ましい思ひをした。彼は、其那聲を聞きつけると、大人對手のやうに險しい顏つきになつた。そつと下駄を下げて來て庭へ廻し、板塀について居る切戸へ忍びよつた。彼は音を立てずに掛金をはづすと、突然姿を現し、物も云はずに子供達に向つて近づいて行つた。ひそ〳〵して居た連中は一目散に逃げ出す。狹い露路に入り亂れて響く跫音が、子供の本氣な恐怖を語つた。度重ると、滑稽を越えて、伸子は變に寂しい、淺間しいやうな氣がした。

「仕方がないのね、珍らしいからよ、――庭へ入れた方がいゝわ」

佃は亢奮しつゝ、神經質な焦立ちで、

「折角ひとが植ゑたものを、搖るなんて怪しからん。僕はなかへは入れませんよ、決して」

伸子は、彼の、頑固な所有慾といふやうなものを感じるのであつた。

散歩に出て伸子が買ひたがるのは植木より本であつた。古本屋をよく見た。何か目につくと、彼女は其をぬき出し、

「これ」

と夫に示した。佃は、その本を手にとつて、あつちこつち返して見て、訊きかへした。

「是非なくてはならないもの」

その調子が、伸子をしよぼんとさせた。彼女はあきらめて本を元の處に返した。

「――ぢやあ又にするわ」

伸子は、買つても、買はないと同じやうに、さつぱりしないのを知つて居た。彼女は、夫婦として暮して見ると、佃が、元からたつぷりしない暮しを經驗して居ながら、馴れ、大膽に快活に、其を支配することを知らないのを意外に感じた。

伸子は、大概家に居た。本を讀んだり、崖下に井戸がある。その井戸端で、長屋の女達が喋るのを聽いたりして居た。永く一日が過ぎる。彼女は、佃が歸るのを待ち切つた。彼女は、堤を切つたやうに話したがり、彼にも喋つて貰ひたがつた。けれども、佃は、伸子が面白がる事を、餘り面白いとは感じないらしかつた。餘り身を入れて聞かなかつた。氣が乘つて彼の話すのは、多く勤先の出來事、同僚の噂であつた。佃は、低い、これはお前にだけ話すのだが、と云ふ意味を示した聲で云つた。

「今日、幹事のところへ用があつて二三度行つたら、×君が、私に小さい聲で、幹事に何か御用ですか、と訊いた。」

「ふうむ、それで？」

「私は、えゝ一寸相談がありますと云つただけだが――皆氣の毒に神經質だ。私なんか幹事だらうが誰だらうが、平氣で行つて話すから、きつと皆、意外に思つて居るんでせう」

佃は、それが得意でなくもない。――

「ゴーゴリね！」

と笑ふが、心の裡で伸子は、夫もその中で、明かに小勤人の一役を受持つて居るのを感じ、彼が其を不平ともしないとに哀愁を感じた。

秋が進んだ。庭に、月がさした。その月の光は崖下の梯比した屋根屋根を照し、終夜、床下で蟲が鳴いた。霜が下りるやうになつてから、まだ暗い午前六時頃、寒く凍つた道路を、工場へ出かける人々の朴齒の音が、伸子の寢て居る枕に響いて來た。

伸子は、段々自分の心に切ない渣滓が溜つて來るのを感じた。彼女は毎日絶え間なく飢ゑて居た。それ等は、誇るに足る程高い程度のものではなかつたにしろ、內的に育つ盛りの若い伸子にとつて、食物と同じに必要な藝術的雰圍氣の缺乏が、深く彼女を苦しめた。佃は、長年アメリカの女の生活を見馴れて居たから、寢たい丈伸子を眠らせた。日常の買物も自分で厭はずした。臺所さへ伸子一人でぽつねんとしないでよかつた。然し、眠り足りたスポンデのやうな頭腦で、貪り讀み、感じ考へたとしても、それを共に語るに誰が居よう！佃は、近頃のやうに生活が定つて仕舞ふと、ちよい〳〵した此までの精神上の荷物を、何處へか卸して仕舞つたやうに見えた。――彼の文學は、數年前の貯藏であるシエクスピア、ベーコン問題から進まず、雜誌さへ、恐らく一冊以上目を通す事はなかつた。彼は、それ

でも本能的に敎師らしいところがあつて、うまく伸子の突擊を躱す手練はある。――これは何と異樣な孤獨だらう。伸子は恐ろしい絶望的な寂寥に打たれて、激しく泣き出すことがあつた。

「あゝ、何故此那に寂しいの？寂しいの？……もう少し、どうにかしませうよ」

仰け、當惑し、眉をひそめ、伸子を抱いて背を撫で乍ら、なだめるやうに顏をよせて、繰返し〳〵呼いた。

「其那に泣くもんぢやありません、ね、今によくなる。――今に馴れます」

その馴れるといふ事こそ、何より伸子が可怖がつて居るのであつた。人間が、飼はれた獸と同じやうに、馴てはどんな境遇にでも馴れるといふ事實は、悲しく恐ろしい。自分も、今に矢張り、この生活に馴れて仕舞ふのだらうか？そして、幾年か經つうちには、趣味も、情熱も失ひ、最初成らうと目ざして居た者とは似ても似つかない者に成つて、さう成つてしまつたのさへ知らず、一生を終るのだらうか？伸子は、目に見えないうちにすぎ去る生活を惜しみ、不安に襲はれた。――

三月になつてから、或日、動坂へ行つた。親戚の子供が來合せて賑かであつた。皆を集めて、和一郎が寫眞をとつた。其がすむと、和一郎は伸子だけを、又別に迎へに來た。

「今日は光線の工合がいゝから、姉さんだけでもう一枚とらない？」

「さうね」

伸子は、元來他處ゆきになつて、商賣人に寫眞をうつされることが嫌ひであつた。彼女は、弟にすゝめられると、近頃自分がどんなに見えるか、と、好奇心をもつた。

「ぢやあとつて貰はうかしら……でも、ぼや〳〵幽靈みたいなのはいやよ」

「大丈夫さ！此那天氣にしくじるなんて、決してありやあしないさ」

伸子は、弟と連立つて客間の庭に廻つた。そして、木犀の前に立つた。

數日後行くと、其が現像出來て居た。

「丁度乾かしたところよ、もういゝだらう」

伸子は、一緒に和一郎の仕事部屋へ行つて見た。洗濯場の奥を區切り、藥品を澤山並べた小窓の處に、印畫が乾かしてあつた。

「まあ何枚もあるのね、皆あの時の？」

「ううん、あとでつや子と大學の御殿へ遊びに行つた時のもある。――こなひだのだけぢやあ、まだフキルムがあまつてたもんだから」

「どれ……拜見」

「これが大學で撮つたの」

つや子が、兄とふざけて、笑ひ乍ら此方を向いて來るところを、不意に撮つたと見え、手脚の動きが律動的で美しく見えた。

「これがこなひだの。元ちやんが少し動いたんでぼやけちやつた。——姉さん一人の方がいゝや」

「さう？」

伸子は、セピアにやきつけた一枚を渡された。印畫としては奇麗に仕上つて居た。けれども、最初の一瞥で、伸子はその寫眞が、自分に相違ないのに、すらりと承知出來かねる變な感じを受けた。自分と思つて居たのとは何處か違ふものが、正面を向いて兩手を束ねた顏に漲つて居た。こんな太い縱の陰影が、二本も、元から自分の眉の上にあつたゞらうか。老けた、複雜な、險しい顏つきであつた。其だのに、口許ばかりに、穩やかに〳〵と、取繕はれたやうな微笑があつて、醜い顏であつた。

「私の顏本當に此那？」

きゝたい位であつた。

伸子はつく〴〵自分の顏を眺めた。

いつまでも默つて居るのを、和一郎は、寫眞に不滿なのだと思つたらしい。彼は辯解的に云つた。

「もう少し、全體濃くてもよかつたな、この次、又やきなほして上げませうね」

「これで結構よ、有難う」

伸子は、寫眞を、もう一遍見なほし乍ら、云つた。

「よく——はつきり撮れて居るわ」

四

高臺の濃やかな青葉と其を透す日光の美しい氣候が來た。崖ぶちの、彼等の家で、生活は相變らず單調であつた。生活は狹く無表情に廻轉して居る。伸子は、不可抗力にその調子に卷込まれて居ながら、いつまでも不本意で、抵抗を失へなかつた。伸子の氣分が平和なのは、二人が別にこれと云ふ話もせず、笑ひもせず、ぼんやり緣側に腰をかけて、樹でも見て居る時であつた。丁度、二匹の犬が、日向で前脚を延し、その上に顎をのせて、うつら〳〵して居る時のやうに。けれども、その眠つたやうな平穩は、い

つも永續きしなかつた。先づ、伸子が自分達の有樣に、云ひやうない物足りなさを感じ出すのが常であつた。これが二年前、あのやうな熱情で生活し始めた男女の有樣であらうか。

よき結婚生活といふ、あの時分の標題は、勿論全然無くなり切つて居た譯ではない。伸子が、自分の感じる不安について彼に話せば、彼は立所に、その表題を再びとり出した。それで彼女を安心させようとした。然し、それとても、近頃は何と疑はしいものになつて來たゞらう。伸子は、夫が、言葉ですする愛の誓で、愛す愛すとだけ云へば萬事解決する、と思つて居るのが味氣なかつた。愛しても食物はいるやうに、愛しても、伸子には活潑な生存がいるのであつた。毎日の細かいことでは、互の心持に就て、まるでやり放しでとり合はず、伸子がやり切れなくなつて涙をこぼすと、急に熱烈に、これ程愛して居る心が通じないかと訴へられる。――伸子は、途方に暮れて云ふしかなかつた。

「ね、かういふことは、言葉に現せない毎日々々の感じから來るのよ……貴方のはまゝで、一旦自分は愛してゐると思ひ込んだら、頑固に思ひ込む程度の強さを、愛の強さだと勘違ひして居らつしやるやうね」

「あゝ、其那皮肉を云ふ！ちやあさう思つてゐらつしやい」

其故、犬のやうにたゞ並んでゐるのが佗しくなり、

「ねえ」

と呼びかけはしても、彼女は大抵あとの言葉を云はず仕舞ひにした。伺はそれを怪しまうともしない。――是が、平和な家庭生活といふものであらうか。

伸子は、沼に浸つて居るやうな生活氣分に、堪へ難くなつて來た。

外の世界は五月だ。明るい潑剌とした五月だ。自分の心も曾てはこのやうでなかつたか？

初夏の空氣が充滿して來るにつれ、旅行に出たい渴望が募つた。出かけると云つても、伸子に心當りは、一箇所しかなかつた。其は、祖母が一人住居してゐる東北の田舍だ。其處なら、伺も承知するに違ひなかつた。彼女は、仕事をしたいといふ理由で、伺の承諾を得た。

農繁期なので、東北本線の急行はすいて居た。

伸子は、日のさし込まない側の、居心地よい場所をとることが出來た。汽車に乘りたての騷然とした氣持のうちに、埃々して不潔な大都會の外廓を拔け去り、追々田舍が車窓の外に開けて來ると、伸子は、名狀仕難い廣々とした快さ、落付きが、心に滲みて來るのを感じた。田畑の上を、電信柱や人や森が、スイ、スイ、來ては飛び去る。伸子は、其にも子供らしい愉快を感じた。程よい動搖や規則的な車輪の響が、彼女の神經を鎭めたのだが、伸子の心には何かそれ以上、うれしさがあつた。う

れしさ、悦ばしさ。たゞ違つた景色を眺めつゝ旅行するだけの樂しさではなかつた。自分の體を壓へつけて居たものが、やつととれた、ア、！と、初めて周圍を暢々見廻した刹那の爽やかさなのであつた。伸子は貪るやうにその心持を味つた。此のこだわりなさ！こんな自由な豐富さ！この、力が漲つて來る洋々とした心持。——

沿線の風景は、伸子にとつて、子供の時からの知己であつた。列車は那須野ケ原にさしかゝつた。一面若葉をつけた倭樹林の間を、汽車は走つた。それ等は、綠の波のやうに、列車の左右で泡立ち戰いだ。大氣の澄んだ地平線の彼方には、日光の山々が、巔の雪を燦かせて、聳え立つて居る。若し人が四邊に居なければ、心をこめて兩腕をこの山々に向つて延したい程感動を覺えた。彼女は、再び自分に還る生活を感じ、勇しく疾び駈ける馬に立ち騎りでもして居るやうに、確り、窓に向つて兩脚で突立つて、遠い〳〵山巔を眺めて居ると、車體の搖れと自然との交感が音波のやうに錯綜して、伸子の全身に音樂的リズムがこみ上げて來た。

シュツシュツ　カ、カ、
（——然し、彼の山々は——）、いきなり、疊句が記憶の底から浮み出て、その後にとびついた。
シュツ　シュツ　カ、カ、——然し彼の山々は——
シュツ　シュツ　カ、カ、——然し彼の山々は——
——彼の山々は——

伸子は自分の亢奮に驚いた。自分はこのやうに野原や山々へのノスタルヂアにかゝつて居たのだらうか？そして、又何と貪慾に、自分は自分の自由を享樂して居ることであらう。伸子には、夫をつれて來て、この悦びや鮮やかな自然の印象を分ちたい氣持が起らなかつた。彼女の氣持は逆であつた。彼女は、この山々を、この倭樹林を、自分だけで眺められるからこそ、嬉しいのであつた。傍から誰にも妨げられず、心全面で眺め、味ひ、感覺する、その快さこそ、實に彼女に、久しく失つて居た自由の蘇生を感じさせるものなのであつた。

五

家ちゆうに鏡は、たつた一つあるきりであつた。水銀に罅の入つた古い掛鏡が、流しの横の柱に懸つて居た。田舎へ來てから、伸子は毎朝顔を洗ふ時、氣をつけて其鏡を覗いた。日により、或は光線によつて、起きぬけの額がすらりと晴れて見えると、伸子は其日一日、正しい心で暮せる瑞相のやうな喜びを感じた。何の工合か、陰翳が濃く現れて居ると、暫く陰氣になつた。彼女はそこを幾度もこすつて、もう一生この襞はつききりなのだらうかと思つた。

祖母は女中と、おとよさんと云ふ、元は他人だが、今は遠い親類のやうになつた婦人と、三人で暮して居た。伸子は毎日野天に出て、祖母と二人で庭樹の刈込みをした。柊や生垣の檜葉などが、春の芽をがむしやらに延して居た。冬越ししてもさ〳〵になつた野馬の毛を刈るやうに、それ等に手を入れるのだ。木鋏で刈り乍ら、伸子は祖母と種々なことを話した。

「これからはなか〳〵いそがしいどんだ。茶はつまなけりやならないし……何故なわけか、茶を拵へる男が年々減つて、錢を出してもはあ來てがないから、今年はもう、茶は製しないかも知れない」

「樂しみでもないんならお止めの方がいゝわ、どうせ、手間をかけるだけ澤山もとれないんでせう」

椽側にぺしやんと坐つて、胡桃をむいて居るおとよさんが口を出した。

「御隱居さん、そりやお氣をおもみなさるんでね、はたでお氣の毒でございますの」

「呑氣に遊ばせよ、もうおばあ樣なんか、いろ〳〵の樂しみだけを仕事になさつていゝお年よ」

祖母は少し太い小枝を挾み當て、弱々しい腕に力を入れやつと剪んで、答へた。

「空家のやうにしては置かれまいつちえ」

「――東京へいらしちまへばいゝわ、何も世話なんかなさらないですむから……いゝ御隱居所になつてよ、小じんまりした。――今度私と一緒にいらつしやい」

「……ふむ」

祖母は考へ乍ら、おとよさんに經木の鍔廣帽を出させた。

「日がてりつけて禿があついどんだ。――お前達、二人で住めばよかろ」

伸子は離れて、自分の刈つた楓の枝ぶりを眺めた。

「何處へ？御隱居へ？」

「さうよ、そしたら家賃なぞ、馬鹿々々しく出さないでよからうちえ、おれが住むよりその方がやくに立つになあ」

「其んなこと駄目よ、おばあさまのために建てたんですもの……」

「おれが住まはせろと云つたらよからう？」

伸子は、陽氣に笑ひ乍ら云つた。

「有難いけれどお斷りするわ。叱られるとこわいから」

「……おれのやうな田舍婆が行つたら、さぞ笑はれつべなあ。——ほんにおれなんぞお國風で、稼ぐことばかり敎へられ、字も書けないで、今になつてからはあ口惜しいことよ」

祖母は茶の間に、人に會ひに引込んだ。おとよさんは椽側に腰かけて居る伸子に云つた。

「本當に御隱居さんも、あちらへ御一緒におなりなさるとようございますのにね……なか〳〵その氣におなりなさらないんですものね。貴女、よく勸めておあげなさいませよ。貴女の仰云ることは不思議におきゝになりますもの」

「……今度もたのまれて來たのよ、お連れしろつて……」

おとよさんは語勢をつよめて、

「是非さうなさいませ」

と云つた。

「——それは、私が斯うやつて御厄介になつて居りますうちは、及ばずながらどんな御世話でもしますが……私も……」

彼女は少し顏つきをかへ、笊の中を見た。

「いつまで斯うして居られますか分りませんし」

彼女は中年まで小學校の敎員をしてゐた。それから結婚し、その夫に二年前死別したのであつた。

「何かお話があるの？」

「え……少し……いろ〳〵私も先々のことを考へますもんですから——」

暫くして、おとよさんは伸子に訊いた。

「もうどの位ゐらつしやるお積りですか」

「さうね」

伸子は足をぶら〳〵ふり乍ら元氣ない笑顏をした。

「當なしよ、歸りたくなる迄居るわ」

おとよさんは、ちらりと女らしい偸見で伸子を見た。

「……佃さんが何でもよく御解りですから、伸子さんはお仕合せですわ」

「……」

「……よくお獨でゐらつしやいますことね、男の方だのに。お手紙參りますか」

五日ばかり前、彼は、伸子が滿足するだけ逗留すればよいこと、彼は彼の愛が理解される時を樂しみにいくらでも待つ、と云つてよこした。その手紙を受取つた時、伸子は嬉しいより腹立たしく、淋しかつた。彼は、勿論伸子が仕事など出來ず、遠いところで彼に心を捕はれて暮して居ることを知りつゝ、それには一言も觸れず、自分の堅忍を體裁よく示して居た。伸子はそれつきり、細かい手紙も書かないのであつた。

それから二三日後の或晩のことであつた。低い生垣の外から、

「伸子さん　伸子さん」

甲高に呼ぶ女の聲がした。

「其處にゐらつしやるの、伸子さんぢやありませんですか」

伸子は其時、東京から送つてよこした新聞を皆に讀んで聞せて居た。外は暗く、頭の上に電燈があるので、伸子の方からは誰も見えなかつた。

「どなた」

「誰だどんだ？今頃」

祖母が外をすかしながら呟いた。

「私、飛田です。そちらへ廻つてようございませう」

「――どうぞ」

飛田は三保といふ名で、東京の會社員と結婚して居る此村の人であつた。伸子と親しい間柄ではなく、寧ろすきでない部であつた。何時此方に來たのだらう、何故訪ねて來たのだらう。一人だと思つた三保が、中の口で下駄をぬぎ乍ら誰かに云ふ聲がした。

「さあ、お前もお上りよ、何故？大丈夫よ！」

伸子は立つて見た。式臺に上りかけた三保の後に、地味な女が二人、暗い中で佇んで居た。そして、ひどく遠慮し、もう夜が更けて居るから、このまゝお暇すると云つた。兎に角三人上ることになつた。二人の女は、三保の妹とその友達で、三十近い人々であつた。三保はけば〳〵した大島の着物を着、騷しい調子で挨拶した。

「私ね、昨晩おそく來ましたんですよ。今日はこの人達と一日喋つて、さつき大神宮樣の方へ散歩に出ると、玉が間の抜けた顏をして、伸子さんが來てゐらつしやる、つて云ふんでせう。頓馬なねえ、早くさう云へば何を置いても上つたのに、ぢやあ是非これからお目にかゝつて來るつて、上りましたのよ、本當に田舍の人つたら、氣が利きませんね、頭がないつたら、ありやあしませんわ、で、貴女

はいつ？いつおいでになりましてすの」

「さうね、もう十日程になるかしら」

伸子は三保の辯舌に後退りするやうな氣がした。

「いづれ何か、お書きになつてゐらつしやるんでせう？」

「いゝえ、どうして！のらくらよ」

「私もふだんはいそがしうございましてね、お父様が有難いことに、私のしたいことは何でもしろ、と云つて下さるんで、この間ぢうはお習字をやつて居りますし、お花の稽古はする、家のことはする、間には赤ちやんまで拵へなけりやあならないんですものハ、、、、大いそがしですわハ、、、、、」

丸髷に結つて、内氣らしく默つて居た三保の妹が苦笑ひをして、

「まあ」

と云つた。

「だつてさうぢやあないの？ねえ――なか〳〵飛田が離しちやくれませんわ」

三保のヒステリツクなのが誰の目にもついた。彼女は、何かに憑かれたやうに、白粉を濃くつけた顏の上に眼を光らせて、一人喋つた。二人の同伴者が上るまいとした理由や、迷惑さうに坐つてちよ

い〳〵伸子を見たり、三保を見たりして居た理由がわかつた。氣が變になりかけて居るのかと、伸子は少し不安を感じた。

「――この頃はずつと御丈夫？」

「いゝえ、貴女、ひどい目に會ひましてね」

三保は婦人科の病で手術を受け、退院するとすぐ此方に來たのだと云つた。

「お父様と居ると、ね、ほら、どうしたつて貴女――」

伸子は、三保の氣持がどうかして居て、何を云つても性的なことの方にひきつけるので、默り込んだ。二人の連れも其が氣遣らしく「――そろ〳〵失禮しませうよ」

と頻りにすゝめた。

「又ひるま、ゆつくり上つて御話するとしてね、御隱居樣ももうおやすみの時刻でせうから」

「さうしませう……伸子さんはいつ迄此方です」

伸子はおとよさんに答へたと同じ返事をした。三保は、

「まあ！あんなこと仰云つて！」

と叫んだ。

「旦那様を放つて置いて、其那こと仰云る奥様がありますか……一人で置いちゃ第一あぶないぢやありませんか。よく辛棒なさること、うちなんか」

「さあ行きませうよ、姉さん」

門の方へ出て迄も、三保の盛に喋る聲がした。やゝ暫くして、祖母がさもげんなりしたやうに云つた。

「何だべ、あの女！」

伸子はその調子の滑稽さにつられて笑ひ出した。——が、普通夫婦と云ふものは、本當に三保が云つたやうなものなのだらうか。さういふ疑念が伸子の心に生じた。彼女は、自分達夫婦が別々に旅行することについて、三保の云ふやうな危險は、全然感じるとさへ知らなかつた。

伸子は痒ながらもそれを考へ、自分に不安や嫉妬を起させない 佃の性格を却つて物足らず感じた。佃の身持の堅さは、人間の面白さ、愛らしさなどに魅せられるとの少いところから來て居るやうに思はれたのであつた。

六

おとよさんはよく小一里ある町まで買物に出た。彼女は其度、伸子に用を訊いた。伸子は男物の單衣を買つて貰つた。其を仕立てさせて佃に送つた。祖母はおとよさんが出かけると、

「——買物ばかりぢやなかろ、又新町へよる氣などんだ」

ひそ〳〵聲で、話對手かた〴〵一緒に縫物をして居る近所の老婆に云つた。

「さうよしか。……、でもおとよさん、ほんとに若く見えるない、卅一寸出た位で通るものなし、……又いゝ旦那様がすぐ見つかることよ」

祖母は、老年で震へる指先に針を持つてめどを通し乍ら、年とつた女の底意地わるさで

「俺がおとよさんだつたら、四十越して嫁さるなんぞ嫌だなあ、今の者は年とつても一人で居られないか知らて……」

「ほんによ、……フヽヽヽ」

伸子は、おとよさんが行先に不安を感じて、養老保險でもかけるやうに、結婚しようと焦つて居るのが齒痒くもあり、哀れでもあつた。それを、目引き袖引きする、無知な年とつた女共にかこま

れて居る彼女の境遇に同情を持つた。彼女は祖母に、

「おばあさんは何としたつてあのひと、一生仕合はせに暮させること出來やしないんだから、五月蠅彼此仰云らない方がいゝわ、誰だつて仕合はせを見つけて居るんだからね」

すると、祖母は妙に捩くれて述懐し始めた。

「――おれなんぞ、本當に不仕合はせな生れとでも云ふんだらうなあ、若い時は若い時でお前のお祖父さんが事業々々で貧乏するし、年とりや年とつたで、息子にまで嫌はれるし……お前に會ふだけがおれあ樂しみなどんだ」

さう云つて、彼女は涙をこぼした。

おとよさんは、伸子と下手な五目並べなどしながら、身の上の不安を訴へた。彼女は新町にも、從つて町への買物にも、程なく出かけなくなつた。後で、彼女は、綜誠が持ち上つて居た歯科醫と會つて、自分から斷つて來たことを話した。――伸子は、女性の生活の様々な、然し一様に思ふやうには行つて居ない標本を眺めて居るやうに感じた。祖母にしろ、おとよさんにしろ、皆暮したいやうには暮して居ない。其でも生きつゞけては居る。どんよりと蠢き乍ら暮して居る。伸子は自分が、生活の不満に降參しないのを頼もしく思つた。彼女等を見て居ると、伸子は、しんから斯う云ふ生活をしたくなく思ひ、邪魔は除け、根氣よく人生にぶつかつて、斯うと思ふ生活を開かうといふ熱意が湧くのを感じた。幾代かの家族の中に、せめて一人位、愉快に一生を回想出來る女があつてもよいではないか？

六月の中旬に、和一郎が徴兵適齢で、檢査を受けに來た。彼等は、さう澤山はない仲よい姉弟の一組であつた。伸子は、久しぶりで彼と數日田舍で暮せるのがよろこびであつた。和一郎は、近年肋膜を患つたので、乙種か、丙種かもしれなかつた。其故この滞在は、猫心輕やかであつた。祖母の箪笥の引出しに、古い風月の菓子箱があつた。昔の寫眞がしまつてあつた。伸子の、生れて百日目といふのだの、少し大きくなつて、和一郎が天鵝絨の水兵帽をかぶつて乳母に支へられて居る横に、伸子が姉らしく澄して立つて居るのだの。祖母は、ぼく〳〵して、今は大きくなつた彼等に其等を見せた。

「おや、此那なのがあつたかしら……この時分ぢやなくて、ほらよく人攫ひが來るつて、可怖がつたの。――吉さんを送つて行つたかへり、坂の角から、貴方をおんぶして、夢中で家まで駈けて歸つたことがあつたぢやないの」

「本當ね、滑稽だな。だがあの時は本氣で可怖かつた、姉さん、まるで一生懸命なんだもの」

「今度は、和一郎が姉さんをおんぶしてやらにやなるまい」

「――こんなでかいの？　参つちやうなあ」

「ハ、ハ、ハ」

祖母が居ないと、彼等はもつと打明け話をした。和一郎は、戀愛禍素時代であつた。憧憬、不安、熱情が、時々激しく彼の精神を揺ぶるらしかつた。彼は、自分の細かい心理狀態や、豫備校の學生仲間にある、特殊な、彼自身の趣味とは全然合はない戀愛病的雰圍氣などについて、信頼に滿ちた穩やかさと、若々しい正直さとを以て話した。伸子にとつて、話題は自分達と違ふ世界に屬することなので、深い興味を感じた。が、それより彼女の心を動したのは、和一郎が、今も子供時代からの結びついた氣持を失はず、自分だけには直截に、幾分頼りにさへ思ふらしく、其那ことも話してくれる心根であつた。伸子に、その信用を、寧ろ力にあまつて感じた。

和一郎は、櫻坊の種を、口から出すと、海に小石を投げるやうに、庭に遠く放り乍ら、云つた。

「……姉さんなんか、僕達みたいぢやないんだらうな、きつと」

「さう云ふことについて？　ちやんと解つたり落付いたりして居ると云ふの？」

「うん」

「――結婚して居るから？」

「さうばかりでもないけれど」

「若し、結婚して居るからさうだらうと思ふんだつたら、間違ひだわ……結婚は結論ぢやないもの、出された試驗問題、それもなか〳〵手硬いの……」

伸子は、我知らず暗示的な微笑を浮べた。和一郎は、眩しいやうな複雜な表情をした。

「――妙なもんだな。僕、級の奴の氣持なんか、一言喋らせりや大抵分つちやうんだけど――全くお嬢さんには參るなあ、妙に手應へがなくて、ふわ〳〵で、直ぐ目から水は出すし……」

伸子は、和一郎の表現に愛情を感じた。

「色どりの派手な空氣見たい？」

「まあさうね――それに友達同志の話なんか、僕閉口しちやうさ、傍で聞いて居ると……他愛なくて……心配に成つちやう」

間を置いて、伸子は訊いた。

「あのお嬢さん――よく寫眞なんか撮つて、あげてた――あのひとどうした？　矢張り遊んでゐる？」

「あゝ、あのひとはよくない」

和一郎は、淡白な調子で、はつきり答へた。

「――先、鍬鍬しに來て居たんでせう？　僕、何だかよくない性質がありさうな氣がしたもんだから――姉さんどう思ふ？　上目で人を視るなんか、陰性で、僕嫌ひさ」

伸子は、センチメンタルであつた彼が、いつか生存適應者らしく足許の確さを持ち始めたと思つた。

「……なか〳〵確りして居るのね、私より偉い」

「其那ことないさ」

「本當！　――生れつきで仕方ないが、私みたいに忽ち空想するのもよしあしだ」

伸子は、ぽつりぽつり、獨言のやうにつけ足した。

「私だつても見えるのは見えるんだけれど、何かの廻り合はせで好きになると、『それはさうだが』と思ふのね、嫌ひなところなんぞ消えるべきだと思ひ込むのね。……處が消えなんかしない、實際になつて見ると。其でがつかりする位なら、貴方みたいに、初めつから蜃氣樓なんか見ないやうな性の方が、却つていゝかもしれない」

床に入つてから、和一郎は伸子も知つて居る或娘について、彼女の意見を訊いた。伸子は何故ともなく、彼の興味が今はその少女にあることを覺つた。彼女は、少し返事に困つた。彼女の印象によると、その令嬢は、先刻和一郎が話した、派手な色どりの空氣ばかりみたいな少女でない代り、餘り鮮やかな、愛らしい處もない、つまり、平凡すぎる生れつきに思へて居たのだ。隣室に電燈をつけてあるので、薄明りが境の欄間から天井にだけさして居た。

「どうつて……ごくあたりまへぢやあないこと……だけれど私、自分が其でいゝ加減いやな思ひをさせられにから、彼此云ふのいやだ」

それにつけても伸子は考へた。自分と他との交渉が始つてから、何と澤山、反他の言葉をきかされたことだらう。云ふ人々の目的は、自分に他を斷念させたい爲であつたらうが、事實はさうならなかつた。逆に作用した。彼女は、萬一和一郎に戀愛問題が起つたら、せめて自分だけは、本當に何等かの言葉が彼から求められる迄、よき沈默を守りたいと思つた。この弟はどんな戀愛をし、どんな結婚をするであらう。成人して居る彼は、姉の戀愛や結婚生活を何と感じて、見て居るであらうか。

伸子は不圖好奇心を覺え、半ば笑ひ乍ら、

「若し貴方結婚するとしたらどんな人がいゝ？」

と訊いて見た。

「さあ――分らないな。僕達の心持、さういふ實際問題までまだ行つてないな」

「まあ、急ぐべからずだ」

「うむ」

和一郎は眞面目に返事した。

「僕もさう思つてる」

軈て、彼は少し工合わるさうに、然し、深い興味をもつて居るらしく云つた。

「佃さんなんか、どんな氣持で結婚したんだらうな」

「本當にね」

或デリケートな感情から、伸子は其以上云はなかつたが、それこそ、彼女の心に在る間ひの一部分であつた。佃は、どんな心持で結婚し、その結婚生活を導いて行く積りなのであらう。伸子には、それが確り掴めなかつた。例へば、斯うやつて、自分を田舍へ寄來して置いて呉れる彼の心持にしろ、彼は、伸子になら何をされてもよい程溺愛して居るから、放つて居るのであらうか。又は、仕たいことをさせて置けば、軈ては飽きてかへつて來るさ、と餘裕をもつて居るからなのであらうか。伸子は、そのどちらもが混り合つた心なのだと思ふのだが、さういふ工合に彼女を扱つて、彼は、さてどんな生活に二人で逞さうと思つて居るのであらうか。窮局へ行くと、いつも伸子は分らなく成つた。口にこそ明かに云へないが、彼女は、自分の達したいと思ふ生活の核心になるものは、感じて居た。彼にそ

れがあるとすれば、感じ程速いものはない。何處からか、必ず、眞直伸子の心にも通じて來て、彼女の失望を救はないと云ふ事はあるまい。

その證據には、(伸子は考へる、考へる)彼が、自分を愛すなどとは唯一言も云はないうち、自分は、彼が愛すのを感じたではないか。——

自分等二人を嗤ふやうに、伸子は、又斯うも、この頃は思ふ折があつた。——是等は、みんな自分が勝手に考へ、勝手に苦しんで居るだけのことなのだ。彼には、何にも複雜なことは無いのだ。全く——彼が自分でいふ通り、彼には何も無いのだ。

幻滅の痛みを、益々自分に思ひ知らさうとするやうに、伸子は、もつと、もつと澤山、自分と彼について侮蔑的なことを考へた。然し、彼女はよく知つて居る。自分の心は其を本氣にはして居ない事、そして、萬一他人がその半分のことでもを彼について自分の耳に囁いたら、其奴と絶交するであらうことを。打たうが蹴らうが、彼はもう彼女の一部であつた。自分に痛みと苦しみとを感ずることなしに、伸子は、彼を小づくこと一つ、出來はしないのであつた。

やゝ暫く經つて、伸子は不圖和一郎の聲をきいたやうに思つた。夙に眠つたと思つて居たのに。——

——伸子は、そつと、

「起きてたの」

と聲をかけて見た。和一郎は返事せず、ムニャ〳〵譯の分らない言葉を呟いた。寢言だ。伸子は暗闇の中で、自分に向つて笑つた。彼は眠り乍ら、舌で乳を吸ふやうな音を立てる癖があつた。和んだ心持で耳を傾けて居ると、和一郎は急にはつきり、

「あ――」

と、長く引張つて溜息をついた。伸子は反射的に片肱つき、起き上つて彼の顏を覗き込んだ。夢中にしては溜息に實感がこもり過ぎて居た。眠ることは、其でも眠つて居た。彼はもう一度あゝと短い吐息をつくと、今度は低い迫つた調子で、

「あゝ、僕苦しいなあ――僕苦しいなあ」

さう云ひ乍ら、彼は胸の上に載せて居る兩手の指先を、細かく、扇ぐやうに動かした。計らず、彼の若い靈の裂け目を見たやうに感じ、伸子は愛と痛みとを感じた。彼女はそつと、目を醒さないやうに片方づつ、腕からおろしてやつた。大きな、暖い、重たい手であつた。彼は、何も知らず眠りつゞけた。

和一郎が歸つて仕舞ふと、森閑とした生活が戻つて來た。伸子は里心づいた。夕方村に、焦臭い霧が低くこめる。山裾の町の電燈が、點々と燦めき出すのを、廣い耕地越しに緣側に立つて眺める。東京の街々を包んで居るだらう雜踏、押し合ひ、けたゝましく交通機關が右往左往する光景を想ふと、そこに溫い人間の息と、生活の息きのあるのを感じ、伸子は、今直ぐにでも伸を呼ばせたいやうになつた。彼女は、雨戸が閉り、すつかり夜に成りきるまで、ひどく落付きを失つた心持になつて苦しむのであつた。十燭の電燈が、黑光りのする茶の間の板戸をテラ〳〵輝やかすと、田舍の眠たい、永い宵が伸子を鎭めた。祖母、おとよさん、女中、各々の影を振り返りもせず、靜に糸を卷いたり、針の錆を落したりして居る。彼等の上には、チクタク、チクタク……

生命の流れの寂として充實した感じが、屢々伸子を動かした。夫は、このやうな夜、彼の机に向つて、一人何をして居るであらうか。彼のところにも この靜寂がありさうな氣がした。

伸子は、大きい小さい幾多の反動を經驗した後、段々、個は個として生きる場所があるのだ、と思ふやうに成つて來た。世界には、無數の、何でもない男といふのがある。その一人で彼があつたとして、何の惡い事があらう。自分が、彼から期待したものを得られないと云つたつて、それは、自分が惡いのではないか。伸子は、小さい自分の灯の下で考へた。彼自身が、現在の生活に滿足して居るとしたら、それを妨げる權利が自分に與へられて居るだらうか。自分のオリヂナリティーの缺乏にも苦

します、日本へ波斯研究の爲の本を集める仲立ちとして、彼が存在することも、或は意味のない事では無いかも知れない。彼は、伸子に突つき動かされなければ、彼の立身の希望と、日常の習慣と、堅忍の美德の中にあつて、幸福なのであらう。——

勳坂の家で、多計代の熱情や、伸子の、激しく彼をゆすぶる情に攻め立てられた佃を思ふと、伸子は變な氣がした。彼は全く困つたであらう。急に違つた仲間に入つて來て、前後から吠へ立てられた、小膽な一匹の犬のやうに。

けれども、これから、伸子はどう自分の始末して暮して行つたらよいのだらう。彼の幸福の種類は伸子のいるものではなかつた。夫が滿足して、その幸福を食ふのを傍から眺め、自分は食はず、微笑んで居るべきなのであらうか？　伸子は食ひたい人間であつた。きびしく空腹を感じる人間であつた。食はずには居られない人間であつた。伸子は、自分は自分で、彼の横で、欲しいものを見出すか、拵へるか仕なければ成らない立場に置かれた女であることを、知つたのであつた。頼めば、夫は彼の分を分けて與れるだらう。然し、伸子にそれは食へなかつた。彼女は、もつと清潔なものを欲した。

伸子は、これまで自分の心にあつた樣々の思ひ違ひ、子供らしい夢想、あれがたつた二年前と思へない程若く、稚く、夢中であつた自分の信頼などを思つて泣いた。けれども、泣きつつ、人生の結局の嘘りなさといふやうなものが朧氣乍ら感じられ、伸子は新しい勇氣を得た。消えるものはどし〳〵消えろ。遺るものなら自ら遺る。No sentimentalism. ——然し、是まで自分が強ひても拙かうとして居た夫といふものと、これは別れだ。

彼女は、一つ、夫をお客に置いても窮屈でないだけ廣く、さつぱりした心の宮を建て度い、と思ふやうに成つた。自分に本當の生きる力があるならば、どうして其が建てられないと斷言出來よう！

そして、自分の矛盾に自分で憫笑し乍らも、伸子は、さうやつてやつて行くうちには、佃とて木の根つこではない、いつかは少しづつ變るまいものでもないと、希望を抱きなほすのであつた。自分が雄雄しくならうとする決心、それが無駄でないといふ信念も、結局は最後に來るその芥子粒ほどの望みによつて、全體命づけられることを、伸子は否めなかつた。

伸子は、佃のところへ手紙を出した。彼女は歸りたくなつたこと、彼が留守でも家へ入れるやうにして置いて欲しいことを知らした。佃から、伸子が歸らうとして居た日には、夜外出するから、その翌々日にするようにと云つて來た。臺所の入口で、受取るなりそれ等の文句を讀み終ると、伸子は「儘の內部からせき溢れたひとりでの勢のやうなもので、そのハガキを破いた。彼女は、もう歸ると定めた日を、翌々日まで延したりするのは厭であつた。

七

その夏、伸子は久しぶりで短い小説を一つ書いた。春から計畫して居た長いものは、内部的に不足なものがあつて遂に出來ず仕舞ひであつた。結婚してから仕事が出來ないことが絶えず彼女の氣を重くして居た。それが、田舍に行つて居るうちに、幾分心の持方が變り、兎に角集注して四五十枚のものが書けた。出來榮より、書けたといふそのことが、伸子にとつては一つの吉祥であつた。仕事が出來るといふことは、自分や自分の周圍の生活に對して、曲りなりにも一つの精神的足場の持てる證據ではなからうか？　その足場が持てさへすれば、自分が田舍で、歎きと勇氣との縺れ合つた感激の中に思ひ定めたこれからの生活法――心持の上では、夫にたよらず自力で立たうといふことも、萬更見込みないことゝも思はれない。――伸子は、自分の心持が其處へ來る迄の、渾沌と動搖した氣持を書いたのであつた　其作品は、文學的には大して重きを置かれて居ない、或政治雜誌の附錄に載せられ

た。

掲載號を送つて寄來した日であつた。伸子は、活字になつた自分のものを讀みかへし乍ら、机の前で考へに耽つて居た。すると、表の格子戸が開いた。伸子は獨りつきりで居る晝間、がらりと格子の音がすると、四邊の空氣を衝き動かされるやうな不安を感じた。そのやうにして來るのは、乞食聲を出す、押强い物賣りか何かに定つて居た。障子をあけかけたが、土間に立つて居る者を認めると、

「なあんだ！」

と、現金に聲まで變へて、伸子は嬉しさうに立ち上つた。

「いやなひと！　誰かと思つたぢやあないの」

和一郎であつた。

「今日は。――一寸本當のお客の眞似をして見たのさ」

「おあがんなさい」

「……有難う……」

伸子は、彼の躊躇するらしい樣子を訝かつた。

「何故？　いそぐの？　それともオウトバイが心配？」

「そりやあいゝけれどね、今日は迎へに來たのよ」
「……――でもいゝぢやあないの」
和一郎は上つたが、落付かなかつた。彼は、
「いそがしい？　來られない？」
と訊いた。
「――行かれない事はないけれど……何か用なの？」
彼女は、呼びつけられるのはすきでなかつた。例へ、その日出かける氣で居ても、不意に誰かを迎へによこされ、今直ぐ來いと云はれると、氣が澁るのであつた。
「お母さんが、話があるんだつて」
話があるといふのは多計代の慣用手段なので、云ふ和一郎も、聞く伸子も、思はず一種の可笑しさを感じて笑つた。
「そりやあ、話があるには定つて居るけどさ」
「今日は、でも少しむきよ」
「何なの」

和一郎は、云ひ難さうに、不器用に云つた。
「姉さんが今度書いたもの、それを讀んで、文句があるんだつて」
「ふうむ」
伸子は、心の中で一通り考へ、一箇所だけ、其かと思ふところを思ひあてた。それは、主人公の女の夫に對して、女の母が、或反感、敵意に似たものをもつて居ると云ふ僅かの部分であつた。若し母が何か云はうとするなら、恐らく其處以外にはあるまい。
「ぢやあ行かう」
伸子は立つて仕度をした。彼女は、早くこぢれないうち、互にさつぱりするのが肝要と思つた。心持の上で、迷惑を受けずにはすまされまい父や、和一郎も氣の毒であつた。伸子は短いノオトと鍵を隣に頼んで出た。
多計代は、氣輕く平常通りな伸子を見ると、
「――おいでなさい」
と、蟠りのある調子で迎へた。
「今日は」

母は、自分でせず、女中を呼んで茶を入れさせた。

「其處いらに、長崎のカステラがあつたようだが……よかつたらお上り」

伸子は、母が、深く考へた結果或不愉快を抱いて居るのではなく、感情的にむしやくしやし、そのむしやくしやを、自分から楽てまいと、重々しく仕て居るのを感じた。

「何かお話しがあるんだつて？」

「……もうわかつて居るだらう」

「……和一郎が一寸話したけれど、細かくはわからないわ……何もまだ伺はないんだもの」

「――自分の書いたものだから、お前にや勿論わかつて居るだらうが、今度のは一體、どう云ふ積りで書いたのかい」

伸子は、氣まづさを我慢して、丁寧にモウティブの説明をした。然し多計代は、其を皆までしんみり聞きしめず、

「そりやあ、お前の理窟はどうでもつくだらうがね」

と云つた。

「――理窟ではない、私の本當の心持よ」

「實はね、昨夜、澤谷さんが夕飯に來て、お前の今度書いたものを讀んだかと訊くから、ちつとも知らないと云ふと、奥さんのことが書いてありますよ、と云ふんだらう。どうせ碌なことちやあるまいと思ひ乍ら、直ぐ買はせにやつて讀んで見ると――私は、何も活字にまでして、お前に赤耻を掻かされなければならないやうなことをした覺えはないよ」

伸子は不愉快になり、同情的な氣分を失つた。彼女は、自分の心を第三者として觀る習慣のない母が、問題は、例へたつた二字の形容詞にすぎないとしても、自分を餘り芳ばしくない心の狀態で書かれたと思つたら、事實であれば一層いやに思ふのは無理ないとさへ思つた。其故、その厭はしさは厭はしさとしても、伸子が其作を書いた衷心の事情が分れば、或諒解が得られるだらうと、多くの口數を利いたのであつた。けれども、母の言葉で、伸子は索寞とした氣持になつて來た。知識階級の青年らしくもない澤谷の態度も、いやであつた。母の、それに動かされ方もいやであつた。伸子は、默りこんで、冷えた茶を啜つた。

「……そりやあ私はお前の親だから、私さへ踏臺になつて居ればお前がよくなる、とでも云ふんなら、どんな目も辛棒しますよ。土足にかけられても、喜びます、けれども、恐らく其那ことはあるまい――たゞさへ、どんな工合だらうと世間から目をつけて居るのに、何も、それ見ろ、と思はれるやう

なことを、自分から書かなくつてもいゝだらう」

彼女は、女らしい毒々しさでつけ足した。

「――それとも、何かい、お前の得にでもなるやうなことがあるのかい」

伸子は、相手が母でなかつたら、何と云つたか知れない勢で、

「おやめなさい」

と遮つた。

「さういふものゝ云ひやうをし始めたら、仕様がないぢやありませんか」

多計代は、伸子の顏を見、幾分弱く云ひ張つた。

「……だつてさうじやあないか」

彼女は、それから長く、亢奮した心のめりはりに引摺られ乍ら、伸子が佃との關係で彼女にかけた苦勞を思ひ知るべきだといふことや、伸子の藝術が、目に見えて墮落し始めたといふやうなことを攻擊した。伸子は、議論がましい其等の言葉から、眞心を打つものを受けられず、喰ひ違つた氣持で歸つた。

六日後、動坂から又迎が來た。土曜日であつた。今晩は、是非佃と二人で來て呉れといふ口上であつた。先日伸子が呼ばれた時、多計代は、いづれ、佃も呼んで話さなければならないが、と云つた。用事は其事なのであつた。伸子は、自分が書いたものによつて惹き起されたいざこざに、佃を卷き込むのは眞に厭であつた。氣の毒でもあるし、此處だけは自分の世界と思ふ心の中へ、どた〳〵多くの者に踏込まれるのが辛かつた。佃は、勿論讀んだに違ひないのだが、其について彼女には、一言も云はなかつた。

動坂へ行くと、二人はいきなり二階に通された。繪の稽古の赤毛氈などすつかり片づけ、隅の螺鈿の小簞笥だけが、遠い燈火に燦いて居た。母が上つて來て、床の間の前に、一つだけ離して置いてある坐布團の上へ坐つた。伸子は、圍りから壓しつけるやうな扱ひ方に對して、反撥を感じずに居られなくなつた。世間話を一つ二つして、多計代は、

「わざ〳〵貴方までお呼びしたのは、他のことぢやありませんが」

といふ風に切り出した。

「この間は、何だかぐず〳〵で伸子を歸してしまひましたが、私は、あれからずつと考へつゞけて、夜も碌に眠らない程だつたのです。いづれ、伸子からおきゝでしたらうが、貴方からも、意見をおきゝしたいと思ひましてね」

「お迎へだつたから伺も上つたんだけれど、これは、母様と私だけが話してすむ事と思ふわ、伺は、關係のない人でせう」

「さうは思へないね……伺さん、貴方もお讀みでしたらう……どうお考へです？」

伸子は、夫が答へる顏を見て居られず、暗い廊下の戸の方を眺めた。

「……私は、御承知の通り、このひとの書くものには、絶對の自由を認めて居りますから……」

伸子は、自分に有利な辯明だのに、何故か、この寛大らしい返答から眞實を感じず、夫の狡さのやうなものを感じた。滑つこい、解つたやうな解らないやうなこの答へかたは、時によつて、伸子自身にも向けられる夫の遁辭となることを彼女は感じ、坐つて居る場處が沈んで行くやうに思つた。何を書かうと、彼女の自由です——その自由を私は認めて居る。其故、書いたものは飽くまでも書いたもの。そこに、どんな苦しみや涙があらうとも、それは、自分や互の生活に全然關りない彼女の書いたもの——ほう、何と胸に浸み徹る、冷たい寛容さ！　伸子が、このやうな思ひをつゞけて居る間に、多計代は話しを進めた。

「——それはさうでせうが……私はこの間から考へて、どうも伸子が今度あれを書いたのには、譯がありさうに——まあそこまで行かないにしろ、何か感化がありさうに思はれて來ました——さうぢやありますまいかね、公平に云つて」

伺が怪訝さうに、訊きかへした。

「どういふ意味でゝせうか」

多計代は、伺に答へず、伸子に向つて云ひかけた。

「ね、さうぢやあないかい、伸子、よく良心に手をあてゝ反省して御覽——お前も、苟も文字を書く人ならその位は分るだらう」

伸子は、既に此等の押問答に、云ひ難い嫌惡を感じた。不快な、何だか心の底に觸れない、殆ど不必要と思はれる言葉をぐん〳〵つみ上げて行つて、結局何をどうしようとするのだらう。

「つまり、どういふことを仰云るの？」

多計代は、激しい眼つきで伸子を見た。

「云へと云ふなら云つてもよいがね——餘り伺さんにお耳さはりがよくあるまい」

「何なの」

「——一言で云へば斯うさ、あれは、まあ全部ではなくても、私についてのところは、どうもお前が伺さんに、暗々にでも唆かされて書いたとしか思はれないのさ」

「……」

「どうだい？」

「……」

多計代は、居住居をなほした。

「これは、尤も私だけの意見ではない――皆もさう云つて居るんだが……」

「――」

夜の廣い疊の上に、明るさ、皆の口を噤んだ沈默が、皎々と漲つた。伸子の心の中もその通りであつた。彼女は悲しくも、腹立たしくもなかつた。その程度を越して、髓まで傷けられた感情で冴えかへつた。

多計代は、

「默つて居ちやあ分らないよ」

と云つた。硬ばつてしまつたやうで、伸子は口が利けなかつた。

「……私の考へ違ひだつたらあやまりますがね」

暫くして、伸子はかすれたやうな聲で咳拂ひし、夫に云つた。

「……貴方、あつちへいらしつて頂戴」

母が佃に謝まれる譯はない。佃が、自分の夫となつたといふだけの因緣で、このやうな屈辱を堪へる譯はない、と伸子は思つた。

「行らつしやい」

佃は、腕組みをしたまゝ、

「うむ」

とうなつた。彼が不決斷で居るうちに、多計代が、

「話もすまないのに、お前の勝手でそんなことはさせられません」

と、云つた。

「――でも母様は、後へ引けない方でせう？」

「引くわけがないから引かないのです、――お前のやうに自分が惡いと思はない者はない！」

激情的な意地張で、多計代は伸子に謝れ、謝れと强ひた。これから一切、家庭に關するらしいことは書かないと誓へと迫つた。それは伸子にとつて、不可能なことであつた。今、假に氣やすめの謝りや誓をしても、それは、いつか必ず破れる事だ。又、伸子には、自分が、母の强調する意味で惡いとも

考へられなかつた。氣の毒なことゝ悪いことゝは自ら別に思へた。それに、多計代の方から亂暴に與へた數々の言葉に對して、母の云ふことだからと折れる度量は、伸子には持てなかつた。

「では、どうしても自分の云ふことは枉げないと云ふんだね」

「――お座なりを云つても仕方がない……」

「ちやあ仕様がない、お前と私とは根本的に相容れないのだ。――さういふわけたら」

多計代は、改めて決定的に宣告した。

「以來、出入りしない事にして貰ひませう。その方がお互の爲だし、伽さんもいゝでせうから……」

彼女は、終りの方をやつと云つて、顎や唇を震し乍ら顏をそむけた。その打拉けた横顏を見て居るうちに、伸子は、母が哀れになつて來た。彼女には、母が其那ことまで云ひ出したのは、決して永續的な考へからでなく、當人こそ思慮の結果と思ふだらうが、實は強烈な感情の刺戟を好む、激し易い性質から出たことゝしか思はれなかつた。これでもか、これでもか、と押して來た自然の勢で、或は豫期せず、其那斷定的なことまで口にしたのではなからうか。母には本當に、自分の云ふことの意味が解つて居るのだらうか。伸子は、自分が、謂はゞ勘當されるといふことより（此は何故かちつとも實感に訴へて來なかつた）母の、自身の激越性を制御出來ないやうな姿を見ることの方が堪へ難かつた。彼女を不幸な人と思ふ氣さへした。伸子は、優しく、

「まあ、さう一飛びにお考へにならないでもいゝわ」

と云つた。多計代は、其を辱しめのやうに感じたらしく、涙をはら〳〵こぼした。

「私に迎も其那ことは出來まいと高を括つておゐでだらう。――私にも覺悟といふものはあるからね。さう見くびつては貰ひますまい。一旦云ひ出したからには、……會ひたくて、死にさうになつたつて、願つて來て呉れとは云ひません」

空虛のやうな靜寂が擴がつた。すると、いきなり、伽が儀式張つて疊に手をつき、母に挨拶した。

「――では已を得ませんから……どうぞ御個をお大切に……」

伸子には、すべてが信じられず、わざとらしく、變に感じられた。何でもない筈のことを、行きがかりで、仰々しく、悲壯らしく振舞つて居るやうな落付かなさ。同時に何とも云へずがらんどうな、火の消えたやうな氣持。――伸子は坐り込んだまゝ、この妙な心持に沈んで居た。母は母で、兩腕で確り自分の胸を抱き込むやうにし乍ら、凝つと前方を見据ゑて動かない。――

伽が立ちかけて、伸子を促した。

「ちやあ……失禮しませうか……大分夜も更けたから――」

伸子は、佃のわざと低めた聲や、いかにも自分のものといふやうに彼女を見る眼つきが、何か五月蠅かつた。形の上では突き離され乍ら、却つて母の心持と相通じるやうな、錯倒した感情が生れた。二階を降りようとして、伸子は階子口でよろけた。佃は、痛い程彼女の腕を捉へて支へた。

八

目を醒すと、佃は起きて、緣側に居た。秋らしい朝で、乾いた梧桐の葉が、空の高いところで鳴る音がした。伸子は、體ぢゆう非常にだるかつた。——床から體を持ち上げる張が抜けて居た。彼女は寢たまゝ、高臺の方の秋空を眺めた。實に澄んで居る。此那空を、これまで見たことがあつたどらうか。寢て居る部屋を通して、その碧い空から、淸々しい力ある九月の風が吹いて來た。無碍な、其故、ひとしほ魂にしみる哀感で、伸子は思はず眼を瞑つた。

昨夜、一時頃歸つて來てから今朝まで、伸子は殆ど物を云はなかつた。寢しなに、佃が着物を着換へ乍ら云つた。

「あゝあ、——まあ仕方がない、人間は二つの神には仕へられないから」

「……貴方だつて私の神ぢやない」

床に入つても寢つかれず、異樣な寒しさであつた。伸子が、夫である佃と、自分達二人の生活に對して抱いて居る氣持が、若し母に分つて居たら、あゝは云へなかつたであらう。伸子は、勝氣から打ち明けずにこそ居るが、母が嫉妬し憤るやうなものは、何一つ持つて居はしないのだ……目が醒めても、そのやうに思ひ乍ら何時となし寢入つた夜前の淋しい心持が消えなかつた。瞼から日の光がさすと一緒に、その淋しさが、一際心の底にしみるやうであつた。

「——起きた？」

佃が來て、寢て居る伸子の額にさわつた。

「工合がわるい？」

「大丈夫」

「醫者呼びやすか」

「いゝのよ、本當に。……一寸へばつただけ」

一日伸子は横はつて居た。

二日五日と經つうち、伸子は恢復した。氣持の上で、新しい一つの添へものを持つて恢復した。それは、これ迄にないさつぱりした氣持、輕やかな氣持に、不斷の淋しさが加はつたもので、田舍から歸つて後ずつとある彼女の、自分でしやんと立つて行かうとする欲望と眞面目に結びついたものであつた。伸子は、次の少さな仕事に着手した。自分の精神を引締めて呉れる點、この外見不幸らしいことも感謝してよい氣がし、伸子はしんみりとした元氣があつた。彼等は、その夜以來、勳坂のドの字も口に出さなかつた。

月が變つて直ぐの或日のことであつた。伸子は思ひがけず、玄關に和一郎の聲をきゝつけた。伸子は、元氣な彼の顏を見ると、思はず自分も男の子のやうに、

「やあ」

と、よろこびの聲をあげた。

「どうした？」

「姉さんもどうした？」

「この通りよ」

和一郎は、伸子の顏や、勉强のために散らかつて居る四邊の樣子を見廻し、

「ぢやあ結構ね」

と、はじめて坐つた。二人は三時間ばかり、とりとめなく愉快に雜談した。和一郎は、やつと來年の春、或專門學校へ入る氣になつたと話した。

「——どんな奴だつて、中學を出たばつかりにすぐ悅んで、上の學校の試驗なんぞ受けるんぢやあないと思ふな。第一、何が自分の好きな仕事か、大抵は分らないし、氣持だつて過當ぢやあないもの——」

歸りがけ、向うをむいて靴をはきながら、和一郎はさりげなく云つた。

「ゆうべ、お母さんが僕に、この頃ちつとも姉さんのところへ行かないやうだね、つて仰云つた」

月半ばに、伸子は、思ひがけずおとよさんの訪問を受けた。祖母がいよ〳〵隱居所へ來たので、その伴がてら上京したのであつた。

「御隱居さんも是非いらつしやりたいつて仰云ひましたけれど、今日はまだお疲れだし致しますからね——」

おとよさんは、物を云ひ乍ら、しげ〳〵伸子を見て居たが、急に、

「私、さうやつて御元氣にしてゐらつしやるのを見ると、却つてお可哀さうで」

善良な、小皺の多い顔をさつと赧らめ、袂のかげで泣きだした。

「何でもよくおわかりの方々だのに、本當に、どうしてね。——私お話を伺つて、何とも云へない氣が致しましたよ」

伸子は、おとよさんの一途な歎きに、濟まない極りわるい思ひをした。彼女は、おとよさんを慰めるやうに、笑ひさへ浮べて云つた。

「大丈夫よ、あなたにまで其那に涙なんか出されると、私困るわ。今に何とかなるから安心して頂戴」

「どうぞね、あなた、實の親子でゐらつしやつて、其那ことつてあるもんでございますか」

おとよさんは眞心をこめて云つた。

「それは、奥樣から御覽になれば、佃さんにもいろ〳〵御不足はありませうが、その爲に貴女までね……御氣象の確り遊ばした方ですから、御無理もないかも知れませんけれど……」

母は、おとよさんになど、衝突の原因を、實際在つたとは違つた風に說明してゐるらしかつた。伸子は、

「佃は無關係だのに、卷添へをくつたのよ」と說明した。

「私の書いたものがお氣に觸つたの。」

なか一日置いて、つや子が書生と遊びに來た。保が花壇の花を持つて來た。弟妹達が、此迄よりずつと頻繁に來るやうになつた。伸子はその陰に母の心持を感じた。彼等がかへると、彼女はきつと、斯那やうにきくだらう。

「どうだい、姉さんゐらしたかい、面白かつたかい？」

保は保らしく、つや子はつや子で女の子らしく、共に答へるだらう。すると、母は又、重ねて訊くに違ひない。

「姉さん何をしてゐたかい？」

最後に偶然さうに、然し特別な關心で、

「佃さんは居たかい？」

或は、

「どうして居たかい」

などと訊くのではあるまいか。相手が無心だから、彼女は詳細に觸れられず、いくら訊ねてもきゝ足りなく思ふのではあるまいか。弟や妹が歸つたあと、伸子はよく其那情景を空想した。

佃はつや子や保の來るのが五月蠅いらしかつた。つや子が彼の頸にからまつて、

「ね、一緒に遊びませうよ、お姉ちやまと二人ぢやつまんないから、よう」
と甘えたりすると、彼は髷を堅くしたま〳〵拒絶した。
「今僕はいそがしいから駄目です」
勤めから歸つて見ると彼等が居る。彼は人に飽きて來たのだから無理もないが、恐怖した顏つきで彼から離れる子供の姿を見るに忍びず、伸子は夫に云つた。
「貴方いろ〳〵癖に觸るのは尤だけれど、子供は知らないんだから、今まで通りだと思つてるのよ。——あの時堂々云つておやりになる方がよかつたわ、ちびにやつ當りするより」
すると伽は、自分にかけられた寃罪に驚いたと云ふやうに、
「何時か其那ことしましたか」
と反問した。
「ね、私、貴方が勤坂の連中、家へ入れないつて仰云つたつて仕方ないと思つて居るのよ。でも許して居る以上——」
伽は彼として正當な感情さへ公然とは主張せず、例へば、貴方怒つたでせう、と云へば、いや、と云ふのであつた。伸子はその時の狀態を、彼のために解剖し、夫が自身の心持を正面から認めずに居られないやうにした。伽は同意も否定もせず、終りまで伸子に云はせ、嬲て怨むやうに云つた。
「それはみんな君がさうだと思つて居ることです。僕の眞心とは違ふからそれだけ斷つて置きます」
「ちやあ貴方の氣持はどんななの。ね、どう違ふの？」
「——私が上手に話せないのを知つて居るでせう。いつか分つて呉れると思つて居ます。本當に私を愛して呉れる人には分らなくちやあならない筈です」
伸子は此那とき、思はず力を入れて自分の額をぎゆう〳〵擦つた。「さあ、可哀さうな奴！　又皺を殖すな」彼女は其那とき口笛をふきたい氣になつた。だが、それは鳴らなかつた。

九

十一月に入ると、樣々な原因から、伸子は時々、心の平靜を失ふやうになつた。
勤坂とのいきさつは、あれぎり、弟や妹や稀には祖母が來るぎりで、一向變化しなかつた。九

月から、まる二月經つたばかりなのだから、其は寧ろ當然であつたが、伸子に辛く思はれたのは、十二月が近づいたといふ豫想であつた。日本の家族的な習慣で、どこでもさうであるやうに、十二月の大晦日は、伸子の兩親の家でも、一年中で一番賑やかな日であつた。いつからさうなのか思ひ出せない頃から、伸子がこの祝ひ日には女主人役であつた。皆が忙しく働いて居る間に、伸子は花や蠟燭の灯や贈物やらで卓子を飾つた。閉め切つて置いた部屋の扉を、

「さあ！　お入り下さい」

開けた時の嬉しさ！　子供らしい璃々しさは、いつも、彼女を有頂天にした。家中が彼女と倶に喜んだ。その單純な樂しみを、今年は家ぢゆうが持てない。大晦日は滅入つたものになるだらう。伸子は、いつそ親や弟妹が東京に居なければよい、さもなければ自分達が東京に居たくないと思つた。

さういふ或日、伸子は庭の隅で一本の菊をいぢつて居た。泥鉢の、夜店の菊ではあつたが、純白の花は十一月らしい芳香を放つた。凋んだ花を鋏で剪つて居ると、露路に伸のベルが聞えた。伸子は板塀の切戸をあけて見た。祖母が伸から降りた。伸子は、

「おばあさま、こつち、こつち」

と手招きをした。そして、伸夫に云つた。

「かへりはこちらでお送りするから、歸つてよろしい」

祖母は珍しさうに、

「ほう、こんなところに木戸があるのか」

と、見廻し乍ら、草履をふんで庭へ入つた。

「今日は買物を少ししようかと思つて出たが、はあ、俺にや分らないからやめにして、茶をよばれに來たごんだ」

伸子は笑つた。祖母は、伸を命じさせるとき、きつと、伸子のところに來たいとは云はず、本郷通へ呉服ものを見に行くからとでも云つたのだらう。その、せずとよい云ひわけを、彼女は伸子のところに來て迄云ふのだ。

「お茶ぐらゐはいくらでもさし上げてよ。――けふは一つ、菊見の眞似でもしませうか」

伸子は、椽側に、坐布團や茶を出させた。

そして、祖母をかけさせ、自分も傍で、さも宏大な花壇でも眺める振をし乍ら

「――さて、いゝ眺めぢやなう、見渡す限り千本白菊の眞盛りだ」

祖母は美味さうに深く煙草を吸ひ込み、さて吸殻をはたき乍ら、くすくす笑つて揶揄つた。

「……俺の眼がなじよになつたか、菊は一本しか見えないどんだよ」
「――駄目よ、おばあさまつたら。もつと在るつもりよ！　もつとある積りよ！」
傍から、きよが、白い瀝戸ものゝ大きな義齒をがたつかせて、愛想笑ひをした。
「奥様の面白いことを仰云ひますこと、ほゝゝゝ」
二言目には奥様々々と呼ばれる度に、伸子は、體の何處かを、鄭重に指の先で引張られるやうな、工合のわるい氣がするのであつた。祖母は上機嫌で、國技館の菊人形の噂をした。彼女は、やがて、足先が冷えると云つて、家に上つた。
「――俺も若い頃にやあ、どんな女にもまけなかつたが、斯うなつては死ぬばかりだなあ……針のめど通すに縫ふ程かゝるどんだ」
皆が、八十の祝ひを、來年の正月早々しようと云つて呉れるが、無駄な費えだと云つた。
「其那こと位してお貰ひになつて結構よ、皆だつてよろこぶわ、是非なさいませ、私も何かお祝してよ」
「有難いことはことだが……」
祖母は、彼方へ立つて行つたきよに聞かすまいと、四邊に眼を配つておろ〳〵囁聲になつた。

「……お前等、今見たいな役たいもないことして居ちや、おれ、そげなことして貰つても、一向詰らないどんだ。――お前來られまいちえ」
伸子は困つた。彼女は曖昧にうなつた。
「ふむ……」
「なじよな譯か知らないが、やくたいもないどんだなあ」
きよは、平常話し相手のない故で、祖母が來ると、よく喋つて相手をした。自分には男の子がなく娘ばかりだとか、其故、
「何の役にも立ちませんのよ、くれてやつたものでございますから」
とか。祖母はそれに答へて、自分は三人息子が居たのに、たつた伸子の父、一人になつたとか、孫が他の娘のもまぜて何人あるとか話した。彼女は、
「孫は大勢あるが、これが子供のうちから馴染んで居る故か、一番めんごいことよ」
と、伸子を見た。
「もう死ぬ〳〵と思ひ乍ら、やがて曾孫まで見るかも知れないなあ……」
祖母は樂しさうに干菓子をたべ乍ら、何か考へて居たが、眞面目な顏つきになつて呟いた。

「……お前、見たとこ倒れで、丈夫でないかしらて……」

「なぜ？　丈夫よ」

「何して子が出來なかろ」

昔ものらしい遠慮なさで、祖母は續けた。

「今の若いものは、嫁入るとすぐ子を產むぢやないか」

「いやあね、どうでもいゝわ、其那こと」

「弱かあるまいかと思ふからさ……さう云へば佃さんは顏色がいつもよくないな、佃さんが子種なしであらうかしらて」

伸子は、本氣になつて、

「やめて頂戴、其那話」

と遮つた。彼女はいやで、涙が出さうであつた。子の話は、いつ、だれにされるのもいやであつた。まして祖母のやうに、まるで飼牛か何かのやうに話されては堪らない。いそいで話題をかへようとすると、きよが傍から、一種の笑ひを湛へ乍ら、ずつと祖母の方へ頸を延し、耳の遠い人に物でも云ふやうに、大きな聲で云つた。

「御隱居樣、御心配なさることございませんよ、もうじきお目出度でございますよ——はい」

そして、伸子の方に、いやに心得て居るといふ風な笑ひを含んだ横眼を使つた。何といやな婆！

厭がるのを知つて居ながら。——きよが、其那ことを豫言めかしく囁いた意味が、伸子によくわかつた。彼女は女のさとさで伸子の定りが半月も遲れて居ることを知つて居る、と仄めかしたのだ。祖母は、たゞ漫然と、

「さうかなあ」

と答へた。

伸子は、祖母が頭巾をかぶり、俥に乘つて歸つてからも、不愉快な心持から自由になることが出來なかつた。きよが云ふまでもなく、伸子はもう充分、自分の體の小さい變調に神經質になつて居ることろであつた。數日來、折々動物が感じるだらうやうな不安が彼女を襲つた。伸子は、母親になるといふことが既に恐しかつたし、この、生活に疑問だらけの時、その生活に自分を縛す權利を持つて居るかもしれない子供を持つたら、如何なるであらう。

次第に薄暗がりの濃くなる柱に靠れ、伸子は種々考へ、沈んだ。自分の心の奥深くさぐつて見ると、結婚する時、佃に念を押した一つの約束——自分は決して母に成りたくないといふ——も、微妙な女

の性の直覺とでもいふものが働いて居たのかとさへ思はれた。伸子が理性で附けた理由は、自分の仕事であつた。けれども、今、自分の心を凝つとさせないこの嫌惡と不安は、そんな主知的なものではなかつた。もつと本能的だ。何か本能が、不安を絶叫して居る。若し夫として佃を敬愛して居ても、このやうな暗憺とした恐怖を覺えるであらうか。佃を夫とする刹邦、自分の裡にある女性が、彼を父としては承認出來ない者だと見拔き、拒絶したのかもしれない。そして、あのやうな警戒を敷いたのではあるまいか。その人の子を持つことは嫌だ。けれども夫にはする……。

複雜な感情から、伸子はその夜二人きりになつた時、夫にそつと訊いた。

「ね、貴方子供欲しくおありなさらない？」

佃は指を櫛のやうにして頭を掻いてはスーと毛を梳き、拔けた毛を眺め乍ら大きな聲で答へた。

「子供なんぞ五月蠅くて仕樣がありません」

そして、

「大分拔けるな」

兩手で頭を掻き、雲脂を自分の胡坐の上へ落した。

五

一

上野には博覽會が開催され、英國皇儲が來遊されるといふ、事の多い三月下旬であつた。

うら〳〵と體も心も包むやうな光線が、椽側一杯に部屋の中まで射し込んで居た。

直き七十になる佃の老父は、

「同じ日本國中でも違ふもんぢやなう。……私が彼方を立つ宵は吹雪ぢやつたに――東京は、はやすつかり春ぢや」

眩ゆさうにその日さしを眺めつゝ云つた。

「……今日は特別ね、……」

伸子は眞正面から日を受けて居る顏を伏せるやうにし、傍の老人を顧みた。

「――まあ、お髭の光ること」

老人は自分から胸元を見下し、指を擴げて裏から白髯を扱いた。長い白髯は春の光の中で、支那素麺のやうに清らかに輝いた。

「何でお洗ひになりますの？」

「玉子の白味で洗へと云はれてな、伸ばしたては珍しいもんぢやで根よくやつたが、私のやうに山歩きの好きな者はどむならん――髯も日に焼けます、すぐ又、しよむない色になつてしまひをる……」

……長閑だ。……伸子は、自分の祖父と日向ぼつこでもして居るやうない〻氣持であつた。

襖をあけて佃が入つて來た。

「一寸電話をかけて來ます」

「ほう」

「何か用はありませんか」

「さて――どうでわが身も、後で何處ぞへ出んならんと思ふとるさかいに……」

伸子は、佃の着こんだ厚い黒マントや、毛絲の襟卷を見て笑つた。

「――あついことよ其ぢや、外は」

「そんなことはありません。――ぢや一寸行つて來ます」

日當りのよい部屋から來ると、暫くは物もよく見えない陰の四疊半で、伸子が洗濯物を仕舞つて居るところへ、佃が手間をとつて戻つて來た。老人は、獨り八疊の方で新聞を讀んで居た。その方へ行かず、彼は、

「たゞ今」

と云ひ乍ら、伸子の後に立つた。

「おそかつたわね、郵便局？」

「――いつものことだのに、若い者が計算をぐず〳〵して居るから」

「電話だけぢやなかつたの？……」

伸子は振向いて夫を見た。彼の顏が、何かぼんやり、感情を現して居るやうに見えた。

「どうして？――只今をしていらつしやいな」

佃はぐるり、ぐるり、自分の首の方を廻して襟卷を脫ぎ、

「――會社に電話をかけて來ました」

と云つた。伸子の父の會社といふ意味であつた。

「何か御用だつたの？」

「――金曜日の夕方から親父と一緒に上りますが、御都合はどうか、伺つて見たんです」

伸子は不意打ちを喰つたやうな變な顏をした。

「そしたら？」

「多分いゝとは思ふが、確かな返事は明日するから、又電話をかけて見て呉れろと仰云つた」

「――」

父の性質で、左樣しか返事出來なかつたのが、伸子に察せられた。

其にしても、何故電話をかける前に、一言相談して呉れなかつたゞらう。家を持つて初めて滯在に來た老父に、去年の秋以來の、佐々との不快ないきさつを知らせたく無い佃の心持は、伸子によく分つた。尋常に、妻の兩親にも會はせて歸したいのは、自然なことであつた。けれども、佃は、去年往來を絶つたまゝ、何の諒解もなく今日まで來て居た。祖母の、理窟ぬきに懸命な心遣ひに動かされて、伸子だけ、春から、たまに出入りし始めた。歪んだ關係であつた。和解の出來て居ないところへ、出しぬけに電話一通の、而も押しつけがましい氣もしないではない前觸れだけで、老人を連れて行かうとする佃の態度には、缺けて居るものゝあるのが感じられた。

鍵の手になつた椽側の彼方では、老人が背中を日に暖め乍ら、二人の聲を無心に聽いて居る。伸子は云ひたいことの半分も口に出しかねた。

「私に云つてからにして下さるとよかつたわね……其だけぢやあ濟まなくてよ」

彼は、默つて伸子と眼を見合はせて居たが、軈て、

「まあいゝ」

斷念したやうに云つた。

「明日又かけて見りや分るでせう」

そして、座敷へ去つた。父子の話聲がした。

「今日は一つ上野へ出かけませうか」

「偉い人なこつちやらうな、然しいつと云ふて、すいた時はあるまいから――」老人は乾いた咳をした。

「……伸子さんはもうおいきたのか？」

「まだです……餘り好きでないんでせう」

「おいきたらいゝだらう。折角天氣も此那ぢやし……」

伸子は一緒に、博覽會見物に出かけた。青山御所の土手に蒲公英が咲き、濠端の櫻が八分通りの見

頃であつた。電車に、揃ひの花簪と手拭をつけた田舎の見物人が乘り合はせた。

會場で、老人は、各縣から集つた村木や農產物に、深い興味を覺えるらしかつた。

「同じ農業と云うても、近頃は私の若かつた頃とは萬事ころりと違ふな。稻の種類も、こんなに今は澤山になつたが、眼目は何かと云ふと、早う、澤山收穫せうと皆が狙ひをる。——早う、澤山獲れる種類ほど、味ないな、どうも……」

古風な毛皮帽をいたゞき二重廻しを着た白髭の老人と、悠くり、材木の間や赤リボンのついた壜づめの麥粒の見本などを眺めて歩くのは、伸子に珍しい樂しい感じであつた。けれども、佃は氣をせき、老父や伸子の先に立つて歩き、ともすると一人離れた。はぐれまいとするので、彼等二人もひとりでにいそぐやうになつた。佃が、

「こゝも見ますか？——彼方と同じやうだな」

と云つて立ち止りかけると、老父は遠慮さうに、

「もうえゝにしよう、なんぼ見ても、まあ、大同小異と云ふもんぢやろ」

などゝ、自分もすどほりに通り過ぎた。

「なるたけなら、第二會場の方も今日見てしまひ度いと思ひますからね」

伸子は、老人が氣を張つて足を早めたり、見たいかも知れないのに、強ひて詰らないものと定めてそのまゝ過ぎたりするのを見ると、氣の毒でたまらなかつた。土產話にもなるやうに、ゆつくり、滿足に、見物させたかつた。彼女は杖がはりの洋傘を持ちなほし、佃のあとに跟いて人波をかき分けようとする老人に云つた。

「私共は、悠くり行きませうよ、迷兒になつたつて大丈夫よ……いそぐとお疲れになるから」

池の端で、彼等は萬國街に入つた。舞臺には、椰子の生えた海邊の背景が置かれ、その前に裸體へ草の腰蓑だけをつけた女が二人現れて居た。黑い剽悍さうな縮毛の頭に花環飾をのせ、胸にも同じやうな花飾りを吊つて居る。傍に腰かけた黑人の男の音樂者が、白ズボンの片脚でドタ〳〵床を鳴らしつゝ、バンジョーとウクレリーで、南洋的な、官能的な音樂を奏す。其に合せ、女達は並んで手を叩いたり、足ぶみしたり、腕を動したりしながら、ぶる〳〵、うね〳〵體中の筋肉を顫はせた。卅越して見える肥つた方の女の體は、特別人間離れしてよく動き、腰蓑の上につき出ただぶ〳〵の腹などは、遠くからでさへ、上へ下へ、右、左へ、音樂につれてくねくり廻るのが見えた。舞臺の端に「埃及筋肉顫動ダンス」と書いた札が出て居た。

「變な踊ぢやなう——」

伸子は笑つた。野卑だが、得意になつて、腹など妙に動かして見せるところ、子供らしい感じで伸子は可笑しかつた。

佃は、默つて見て居たが、軈て、苦々しげに呟いた。

「――下劣だ」

舞臺の上の裸の女達は數百人の見物に面しても、故郷の海邊に居ると同じに、呑氣で、野生であるらしく見えた。歌を二言三言唄ひ乍ら仲間同志巫山戯るかと思ふと、急に自分の商賣を思ひ出したやうに本氣に、熱心に、腹や腰を蹴らせた。

彼等は、七時頃疲れて家へ歸つて來た。

二

羽織を着換へただけで、伸子は臺所を始めた。食器を洗つて居ると門が開き、誰かゞ臺所の横窓の下に來る氣勢がした。

「今晩は――」

伸子は鬱硝子の障子をあけて、外を覗いた。片明りで女の横顔が見えた。

「今晩は」

「あの、お向うの山下でございますが――先程佐々さんから御電話でございました。御留守でございましたからさう申上ましたら、お歸りんなつたら直ぐ彼方へ掛けるように、と仰云つてゞございました」

少女は、成程、山下の女中であつた。

「まあ、さう、どうも有難うございました。おいそがしいところを度々、御苦勞さま」

――この取次は、伸子にとつて、不意なやうで不意でなかつた。朝、佃から、會社へ電話をかけた事を告げられた時から、彼女は豫期して居た。何とか勁坂から云つて來るに違ひない。今日中でなければ、きつと明日。重苦しい感情を伴づて、博覽會場を歩き乍らも、考へて居たのであつた。

伸子は、

「勳坂から電話がかゝつたんですつて」

と云ひ乍ら八疊へ行つて見た。老父と夫との間に、東京地圖が擴がつて居た。頭をさしよせて何處か郊外の部分を説明して居たらしい佃は、一箇處を指で押へたまゝ、顔を擡げた。

「……？」

「さつき。——歸つたら直ぐかけろと云ふんですつて……」

彼は空々しく、何氣なく答へた。

「——かけて來たらいゝでせう？　其なら」

伸子は、その聲をきいたら、變にいやな心持になつた。

老父が眼鏡をはづし乍ら、二人を見較べた。

「何ごとぢやろ、今頃」

「さあ……」

伸子は下駄をはき乍ら、佃が何とか面倒さうに一口説明し、直ぐ地圖に戻つて行くのを聞いた。

電話には多計代が出た。伸子が思つた通りの用向きであつた。

「父様がおかへりになつて初めて話を伺つたやうなわけでね、是非話したいことがあるから、今から來て呉れないかい」

伸子は電話口で當惑した。

「もうおそいし、今日は博覽會のお供をして草臥れて居るから、明日ぢやあいけないかしら」

彼方では、電話の傍に父も居るらしい樣子で、伸子の云ふことを繰返す母の聲がした。

「それでもいゝけれどね、明日私は御悔みに行くところがあるんで、都合がわるいし、金曜日と云へば——左樣だつたらう？——もう日もないしするから、その前に、すべき話はして仕舞はないと、お前も迷惑だらうと思ふから……」

「——ぢやあ上りませう……少しおそくなるけれども」

伸子は、淋しく暗い裏通りを、一跨ぎで自分の家へ戻つて來た。襖をあけると直ぐ、老人が眞面目に不安さうに訊ねた。

「何事でした？　御病人か？」

伸子は、突嗟の思案がつかず、

「いゝえ、さうぢやありませんでしたけれど……たゞいま」

彼女は輕く老人の前に手をつき、頭を下げた。そして、二人のうち、孰れへともつかず云つた。

「……私、これから勳坂へ行つて來なければならないんだけれど……」

佃は、萬事事情を承知して居る者の不自然な冷淡さで、

「さう」

と云つた。

「そんなら、寒くないやうにしていらつしやい」

「――御苦勞なこつちやなう、今頃から……」

伸子は老人が、心の中では、何事だらうと深く訝つて居るのを感じた。彼は、遠慮から、其を口に出さないだけなのだ。伸子は、それを知らない振で出かけるのを、辛く感じた。

「……歸るのがきつとおそくなりますから、どうぞお先へおよつてゐらして下さい」

伸子は、自分達の部屋へ來、衣桁にかけて置いた羽織に再び手を通した。戸棚から毛織のコートを出した。手袋をはめて仕舞ふまで、伸子はわざと時間をかけるやうにして夫を心待ちした。老人を、謂はゞ胡麻化して行くことも、草臥れて居るのに又電車で一人ぼつち行かなければならないことも、その先にある用件も、彼女を悄げさせた。彼女は、きつと佃がこちらの部屋に來て、出かけるまへに、一言或は一目、彼女を勵まして呉れるだらう、と期待して居たのであつた。襟卷をするばかりになつて、

伸子は部屋の眞中に立ち澱んだ。佃は、老父に内緒話をすると思はれない用心からか、いくら待つても來る樣子がなかつた。伸子は、

「一寸」

と、高く夫を呼んだ。

「――電車の切符はどこ？」

彼女の眼ひ通りに夫は此方へ來ず、八疊に居るまゝ答へた。

「外套の、いつものポケットにあるでせう」

外套は玄關の折釘に下つて居る。伸子は仕かたなく玄關に出た。

「――ぢやあ行つて參ります」

「何時頃歸る？」

「今時分から行くんですもの……でも歸つては來てよ、どんなに晩くなつても」

三

伸子が勤坂の家を出たのは、十二時であつた。伸を命じて呉れた。店が閉まり、家並みが左右で急に低くなつたやうに思はれる深夜の電車道の上を、悠くり駈け乍ら、彼女は伸夫とたまに口を利いた。

勤坂から赤坂まで、伸では長い道中だ。彼女は揺られて行くうちに晝間の疲勞が出て、眼を嗅りたくなつた。次に目をあけた時、伸は牛込見付にかゝつて居るらしく、松――松――行つても行つても太い松の幹ばかりあつた。提灯が瞬く。ゴム輪が、プツ！　プツ！　微に小砂利を飛ばす。……

がく〳〵骸を揺られ乍ら、伸子は、いろ〳〵兩親の云つたこと、その他を思ひかへして居るのであつた。

佐々の兩親の云ひ分は尤であつた。佃が、もう先の長くもない父親に、落膽させまいとするのは無理もないが、これ迄の事は如何うするか。一旦足踏みしなかつた以上、何とかけじめをつけるべきであらう。自分の都合によつて、電話一つでどうにでもなると思ふのは間違つて居よう、と云ふのであつた。その點は伸子も同感であつた。

佃が隱して電話さへ掛けなかつたら、彼女も、何とか少しは彼の威嚴も傷けない行動をとらせることが出來たのだ。今でも、伸子には、何故夫が自分に默つてそんなことをしたか、心持が理解出來ず、居心地わるかつた。

「今度のことに限らず、佃さんのすることは正々堂々として居ないよ――、古いことを云ひ出すやうだが、引越しの時にしろ、何故、いつもお前を先棒に使ふのだらう。――あの時だつて、私共は隨分不愉快だつた。佃さん、自分ぢや出入りしないが、必要とあればいつもお前を先に立てゝ、此方を利用するぢやないの――私共は、お前が、今夜だつてさうやつて、お人好しに遙々よこされて來るのを見れば、厭だと云へやしないぢやないか」

引越しの時、と云ふのは斯ういふ譯だ。片町の、あの西日の壁まで差し込む家に、彼等は二月まで暮したが、或日、よろづ案内で、赤坂の便利な位置に、廉くて手頃な貸家のあるのを見つけた。佃の勤先に近くもあつたので、伸子等は直ぐ見に行つた。電車から一町餘しか離れて居ないが、靜かな裏通りの垣に蔓がからんで居る、古い家であつた。隨分ぼろ家であつた。でも、狹い空地には楓や薔薇

が生えて居て、どこやら落付いた趣もあつたので、借りることに定めた。引越しの手傳ひ、大工等急に入用になつた。夜、

「どうしませうね」

伸子が夫に相談した。

「トラックいるでせう？」

「さあ――たゞ馴染のないところへ云つても、たかくとるばつかりだらうし――勤坂に出入りの、あるでせう」

「そりやあるわ」

「一つ、それをきいて見ていたゞいたらどうだらう、電話で」

「今夜？」

「早い方がいゝでせう」

佃は近所の自働電話まで、伸子を連れて行つた。佃は電話箱の外に待つて居た。伸子が、

「あゝ、母様？　今日、急にいゝ家が見つかつたの」

其那調子で、運送屋その他のことを頼んだ。勤坂では、兎に角伸子の頼みを皆承知して呉れた。彼女が電話を切つて出ると、佃が、

「どうでした」

と云ひ乍らよつて來た。

「いゝつて」

佃は滿足さうに、

「――君がかけた方がいゝ、だから……」

と云つた。

その事を、云ふのであつた。が、伸子には、自分があの時「いゝつて」と答へた、滿足の心持をはつきり思ひ出せるので、悪いのは佃だけと思へなかつた。伸子がしやんとして居たら、勤坂へなんぞ、頼むのやめませう、と云つたゞらう。それだけ佃の信用は救はれたゞらうのに、伸子も同じやうにずぼらで、いい氣であつたから、少し工合悪いなと思ひつゝ、持ち込んで仕舞つたのだ。伸子は、母にその事を云はれた時、愧しく、自分に腹立たしく感じ乍ら、

「私も悪かつたんだわ、それは……」

と云つた。

「私が、いけないつて、云ふべきだつたんだから」

「そりやさうさ。だが、お前と佃さんとは十五も年が違ふんだし、男なんだからね、一人前の。外であの人のする事を、一々お前が自分の責任には仕切れないから云ふのさ」

伸は、その時、伸子の重くのろい自己反省にふさはしく、悠くり悠くり、御所傍の暗い坂を登つて居た。伸子は、心持に濕さの足らぬ、理想では颯爽とした生活態度を心がけつゝ、實際事に當ると兎角ぐや〳〵な自分を明かに見た氣がし、陰鬱であつた。佃もぐうたら、自分もぐうたら。似た者夫婦。伸子は、自分等に忿然とした氣になつて、其那ことを考へつゞけた。

がくん。急に梶棒が下り、伸子は正氣に還つた。伸夫に心づけをやつて、門の鍵を下した。門燈と格子の外の灯が灯いて居るだけで、家ぢゆう、隣近所、寢鎮まつた氣勢が、夜半の暗さの中に漲つて居る。伸子は、音を立てないやうに玄關へ上り、外からの薄明りでコートを脱いだ。さつと一條、右手の襖の際から光がさした。佃が目を醒したらしい。伸子は、そろりと後手で襖をしめ、夜具の裾を廻つて夫の枕の傍に坐つた。喘き聲で、

「たゞ今」

佃は、一眠り熟睡した揚句の、暖かさうな頬の色を枕に横へて居た。

「おかへり……どうだつた？」

「――貴方明日おいそがしい？」

「何故です」

「勳坂ね、私の考へた通りの意見なの。あの電話だけでは、押しつけられるやうで厭だつて云ふ――折角お父さんをお呼びするんなら、その前に一度貴方に會つて、さつぱりして置きたいつて云ふ譯なの――貴方明日一寸いらつしやらない？　私と」

佃は低く、傷つけられたやうに、

「――私にあやまれと仰云るんですか」

と、上瞼を釣らすやうにして伸子を視上げた。老人を起すまいと、顏を苦しい位下げて、小さい壁を出して居る伸子は、力一杯頭を振り、眉を顰めた。

「違ふわ、あやまれなんて云ふんぢやないのよ、たゞ會つて口を利いて、お互に――まあ、さつぱりしようつて云ふだけなのよ。その方が自然だわ、實際。喧嘩別れみたいにして半年以上居たのに、いきなり顏を合はせたんぢや、貴方だつて自然に喋れないでせう」

伸子は夫の耳に唇をつけて囁いた。

「貴方の心持、あつちだつて解つて居るのよ」

佃は、白い枕の上に仰向き、默つて天井を見て居たが、軈て上を向いたまゝ唇も動かさず云つた。

「さうすれば君が幸福になると云ふんなら、行きますよ、私は何でもする」

伸子は、喉へものを閊へさせたやうな表情になつて、夫の仰向いた顏を見下した。苦しき昏迷が彼女を襲つた。佃は、何と變な癖、或は考へかたをするのであらう。一昨年の夏、勳坂に居た頃、彼を養子にするとか、しないとか、甚く揉めた事があつた。あの時も、佃の返事は、伸子に對しても、伸子の兩親に對しても、その「私は何でもする、伸子の幸福になることなら何でも仕ます」一點張りであつた。伸子は其をどんなにか苦しんだ。

「ね、貴方のそんな態度、ちつともすべてをよくしてやしないのよ。私の幸福は、貴方が勇ましく拒絕して下さることよ」

彼は、それに對して、

「あゝ、そんなに泣かないで下さい、私はこんなに君を愛して居るのだから、伸子！伸子！」

一晩ぢゆう愛を誓ひ、伸子を撫で、然し、彼は決して、明朝直ぐ兩親に確答を與へることはしなかつた。その事で、伸子はヒステリーを起す程苦しんだ。養子問題はこのうち有耶無耶に消滅した。當時の混亂した心の苦痛が今甦つて來て、伸子は、又同じことが始つたかと恐ろしくなつた。彼女は

「私の幸福つて――妙ね、何だか」

と、切なく、皮肉な吐息を洩した。

「そんなこと拔きでも、あたりまへぢやないの――つまり、貴方として一足飛びのことなすつたから、順序を踏みなほすと云ふだけぢやあないの」

「……」

佃は不足げに上を向いたまゝであつた。

「いやなら行らつしやらないだつて、勿論私平氣よ」

伸子は熱心に囁いた。

「あやまる必要なんか、決してありやしなくてよ貴方に。勳坂が抑々滅茶を云つたんだから。――お父さんにすつかりお話して、行くのなんか、やめませうよ、ぢやあ。ね？　却つて立派かもしれない、その方が……」

佃はやはり沈默して、天井を見て居る。

「ね、そつちばかり見て居ずにさ……何故默つて居らつしやるのよ」

「だから――君が望むんなら行きます、と云つて居るでせう」
「北那の、いや」
「どうして」
「だつて――貴方、あんな風に電話かけたつきりで、すらりと運ぶと思つて居らしつたの？　それで、はいと承知すると、思つて居らしつた？　――正直に云つて」
「……」
歸途、俥の上で思ひつゞけて來た自分等に對する叱責、仰の、いつも伸子を苦しめるその妙な心持の持つてゆきかた、其等を二重に悲憤する氣持で、伸子は云つた。
「本當を云へばさうぢやないでせう？　それなら、いづれ仕なければ成らないことぢやないの。私の幸福のためにするんぢやない、實際のゆきがかり上、必要だからするのよ。それで又、いゝんですものの――いやに恩になんか、きせつこなし」
「――君が行けと云ふから、私はそれに從ふだけです」
「私、行つて下さいと云ひやしなくてよ、御自分が折れて出るの癪なら、勳坂へなんか、行くのやめとしなさいつて、云つて居るのよ。お父さんに體裁のいゝところを見せて、安心させたいなら、

仕方がない、行く。どつちかぢやないの。御自分はどつちがいゝのよ、本當に！」
「……」
「――貴方、本當に變だわ」
伸子は苦い汁のやうな涙を滲ませた。
「もう少し率直だつてよかないの。へまをするより餘程いやだ」
「行きますよ、だから」
「行く、行かないなんか、どうだつていゝわ、さう云ふの私腹が立つのよ。貴方みたいに、何でも誰かの爲にしなけりや氣のすまない人、珍しい」
翌朝、老人にお早うと云ふ時、伸子は極りわるく、平氣にして居るのに努力がいつた。老人の智慧で、老父はいつも通り穩やかであつたけれども、眼ざとい年寄りが、物音で目を醒し、納戸一つ隔てたばかりの彼方の部屋で、伸子がいろ〳〵云つたり泣いたりしたのを聽かなかつた筈はない。
その日、勳坂に行く行かないに就て、伸子はもう何も云はなかつた。一時過ぎると、俥が、
「――今日、勳坂へ一寸行つて來なければならない事になりましたから、一人で明治神宮へでも行つて呉れませんか」

と云ひ出した。

「ほゝう――矢張り誰ぞ悪かつたのか」

「お母さんが一寸――大した事ぢやあないんです」

「それなら結構ぢや。――辨慶橋はぢきぢやつたなう――あの邊なら、若い頃よくぶらついたもんぢやで分つとる、あすこいら見物して來るさかい、心配せいで、ゆるりと行つておいで」

「ぢやあ」佃は伸子を促した。「髪はもうそれでいゝの」

動坂に彼等は夕方まで居た。佐々も歸つて、居合はせた。伸子にとつては、辛い陪席であつた。圓卓子を中央にして、大きな安樂椅子に佐々、向ひ合つて母、佃はその間に坐つて、ぽつ〳〵話が交はされたのだが、傍から聞いて居る伸子には、三人の心持が融合しないのばかり感じられた。佐々は、天性面倒な論議や衝突は嫌ひであつた。どうせ緣がある以上、圓滑に納めて行く意嚮だ。其故、穩やかな常識的な言葉しか洩さない。多計代は、勿論結局妥協するしかないのを知つて居るが、夫――佐々の微溫的態度も癪痒し、佃のさつくりしない心持も不快、自分が本氣になれない焦立たしさも蟠つて居て、兎もすると小競合が、佃との間に再燃しさうになつた。

「多計代もこの機會に、將來圓滿にやつて行くやうにしたいと云ひますし、どうか私もさうしたいと

思ふので」

「お母様が、さう思ひかへして下されば幸です」

「私は、何も自分が悪いとは思つて居ないんですから、思ひかへした譯ではありませんよ」

多計代は、腹立たしげに云ふのであつた。

「貴方がお父さんといらつしやりたいと云ふから、それなら、何とかお話があつて然るべきだと思つて來て頂いたわけです」

佐々が、雙方をとりなすやうに言葉を挾んだ。

「まあ、互に家族となつた以上、出來るだけ誤解のないやうに、平和に暮さなくちやならんのだから――論判してはきりがない」

丁度、焦點の合はないレンズで映す活動寫眞を見て居るやうな切なさであつた。三つの心が、近より近より、やつと一つの影像になり切れさうになると、ぶる〳〵輪廓が震へ始め、又、ぼ――つと散つて、三重にぼやけて仕舞ふ。

對談は愉快な諒解によつてゞはなく、言葉の循環に倦怠して、打ち切られた形であつた。

佃の老父は、初め通り金曜日の晩食に招かれる事になつた。

往きも伸子は快活でなかつたが、歸途は一層氣が重かつた。總てのことが晴やかで無いといふ感じが、深く伸子の心を壓へつけた。佃、自分、佐々の兩親とのいきさつでは、衝突しても和解しても結局何にもよくならない氣のするのは、何故であらうか。ふつ切れたところが、一つもない。善も惡も、のび切らず、伸子に解釋のつかぬ曖昧なものに覆はれて居る。老父はまだ歸つて居なかつた。佃は平常着に着かへ、さも、のう〳〵したやうに自分の机の前の椅子に體をなげ下した。彼は、體中で伸びをし乍ら、後の伸子に云つた。

「やれ〳〵これでやつとすんだ。――私が死んだ母親のことを云つたら、お父さんは泣いて居らしつたね、お母さんは泣かれなかつたが……お父さんは確に涙をこぼして居られた」

彼はそれを、悠くり思ひ出して、自ら後味を樂しむやうに云つた。その特別の調子が最初伸子の注意を牽き、次で恐怖を喚び起した。

「――」

伸子は何か云はうとして口を開きかけたが、そのまゝ、默つて息を吸ひ込んだ。彼は、では、しんでは其那に冷靜に、効果を見守る餘裕をもつて、あれをやつたのであつたか。――佃は、自分が五つの時生みの母に死なれた事、その限りない淋しさを、伸子の兩親を愛し彼等からも亦愛されることによつて充さうと、どんなにか樂しんで居たのに、圓滿にゆかず、此那遺憾なことはないと、自身あのやうに涙に咽んで云つたのに。――さうであつたのか。……伸子は、大聲あげて笑つてやりたかつた。同時に佃を打ちのめしたかつた。荒々しい自棄が、彼女を吹き捲つた。佐々も伸子も、その哀れつぽい述懷にうまく引きこまれた。多計代さへ、それからは少し調子が和んで、ずる〳〵に、「では」と云ふやうなところで落付いたのであつた。

四

伸子は老人や夫と一緒に、大抵毎日、何處か見物に出歩いた。泉岳寺へも行つた。博物館のやうに大きな硝子張りの棚があつて、古びた義士の衣類、筆跡など陳列してある。

大石内藏之助使用の扇などを眺めて居る最中、伸子は、「斯うして居ていゝのか」と、鋭い疑問を自分に感じ、氣が遠くなるやうな苦しさを覺えた。佃は、先達つて、佐々から歸つて自分の云つた言

葉が、どんなに伸子の心に致命的なものであつたか、全く心付かないらしかつた。伸子は、あれから、一層明かに佃と自分との生活の裂目を感じ通しで、不安が續いた。深い處から湧く「斯うして居ていゝのか」と云ふ疑ひは、空中に囁かれる聲のやうに、屢々、思ひがけぬ處で、彼女の心を摑んだ。それを感じると、二つ三つ息をする間、伸子は自分が居る場所、して居ることの知覺を失ふやうな內面の緊張に捕はれた。

獨りで居ると、その疑問は猶大聲で叫んだ。直ぐ返答を要求して、伸子を攻めたてた。伸子の理性は、其に對する答を出して居た。けれども、まるで逆な力があつて、自分に向つてさへも、それを言明させまいとする。——然し、伸子は、佃の妻として生きることの恐怖を新たにした。彼女は、斯ういふ狀態が一生つづくと思ふのさへ、恐ろしかつた。

晩春らしく、埃つぽい風の吹く午後であつた。雨戸のしまつた隣りの家の軒下に、何か小さい赤い布が乾してある。暖く、乾いた風が吹くごとに、細い竹竿とその赤いきれが動いた。其處の小庭と軒先だけ日かげで、ひつそりして居た。机に頬杖をついてその樣子を眺め乍ら、伸子は決斷のつかない苦しい思ひに耽つて居た。佃も老人も、各々の出先に赴いて、家には彼女一人であつた。

「御免なさい——おいでですか」

思ひがけず横田が來た。

「まあ珍しいかた、——どうぞ」

横田は、どこか變つた男であつた。彼の妹が、伸子の父の會社に勤めて居た青年と結婚した。或時、その夫婦が、兄である横田をつれて來て、紹介した。駒込に暮して居た時分のことであつたが、それから、極たまに、數時間立ちよつて喋つて行つた。彼自身の話によると、種々語學が出來るので、つい、創作より飜譯をするのでいけない、と云ふ境遇に居るのであつた。彼は玄關の隅にイムバネスをぬぎ乍ら、耳が少し遠いので首を曲げ、丸い背をかゞめるやうにして伸子に訊いた。

「お一人ですか？　佃さんは？」

「今日は一寸出かけたの、でも直きかへるでせう」

「休みでせう、まだ」

「えゝ。近いうちに學校へ宮樣がいらつしやるんですつて、その相談よ」

「あゝ」

横田は大きく頷き、

「さうですか」

猶幾度も自分自身に合點をした。彼の癖であつた。彼は頻りに伸子の机の方へ目をやつた。

「近頃何かお書きですか」

「何にも――貴方は？　おいそがしいの」

「下らないことにいつも追ひ廻されてね、どうも」

「飜譯――面白いものしてゐらつしやる？」

「――別に、大して面白いつて云ふものでもありません。……そりやあ、たゞ讀んで居りや面白くも樂しくもあるけれど、譯さなくちやあならないとなると、ぞつとしませんね」

彼の體格に比べると、どこやら弱い笑擘を立てた。

「今、なに」

「即興詩人です……私は、あれの原本を、第一版で持つて居るんだが……面倒くさいんでね、獨逸語のと對照してやつて居ます……」

「あの人の自叙傳と云ふの――面白いでせうね、およみになつて？」

「あゝ、――何とか云ふのがありましたね」

彼は傍机に、丸善の包紙のまゝ、一冊の本が載つて居るのを見つけた。

「何です、あれは」

伸子は笑つた。

「目が早いのね」

雜談の末、彼は、

「どうです、家をお持ちなさると、仕事をするのがなか〳〵困難でせう」

と云ひ出した。

「――男のひとは、どう？」

「さあ、どうだかな、私は經驗がないからわかりませんね、だが――勿論負擔が殖える點はわるいが、概して落付けるらしいですね」

そして、横田は、例の癖で獨り幾度も頷いた。

「それは、ちやんと奥さんが、獨身時代よりよく世話をしてあげるからでせう？氣持のゆとりも出來るわけね――女の人の方は、立場が何と云つても逆だから」

「いけませんか？　どうも」

伸子は、變に自分の言葉に責任を感じた。

「断言は出來なくてよ、絶對に駄目だなんていふ――。けれども、何て云ふか、男の人は夫になつたつて、どこまでも、その人で通るでせう。細君は何だか、生れつき以外に、細君的屬性とでも云ふものが要求されるみたいね。細君業は、女の適應性を極端に發達させる點で、危險ぢやないかしら？……」

……「私」といふものがなくたつて立ちゆくんだから可恐いでせう？」

冗談めかして云ひつゝ、伸子は、心にひろく女性の寂しさといふものを感じた。

「――難しいもんだな」

「――誰でも一應むづかしいとは知つて居るけれども、實際になると、愈々複雜ね。だから獨身がいゝつて云ふわけかもしれないけれど――仕事の爲に、リーベもしないなんて、其那ぎごちないの、私には出來ないわ。――男女に關はらず、まあ當人にとつて自然な、自由な生活をして居る人は少いのぢあなくて？　勇氣がいるもの」

「さう――さうです、窮屈だからな、特に日本ではね……全くさうです」

其那ことを話して居るところへ、佃が歸つて來た。伸子は玄關へ出た。

「横田さんが來てゐらつしやつてよ」

「あゝさう」

佃は、眞直横田の居る部屋に入つて行つた。

「いらつしやい」

「やあ――お留守に上つて居ました。いかゞです？　おいそがしいらしいですね」

佃は、深く椅子にかけ、上體を捩つて片肱をかけ、椅子の背を抱へこむやうな形恰をした。

「いやどうも――相變らず貧乏暇なしで痞せて居ます――貴方はよく肥つておゐでゝすね」

新しい茶を持つて入つて來た伸子には、その言葉が何だか角々して、相手を傷つけるやうに感じられた。

「――ぢやあ、貴方や私は得な性分でいゝわけね……」

横田は聲を出さず、はあと口を開いて上を向き、笑ふやうな顏をした。つぎ穗ない沈默が生じた。用談でも切り出されなければ、納りがつかないやうであつた。横田は顏を顰め乍ら、懐をさぐつて、原稿紙の疊んだのをとり出した。

「――若しお暇があつたら、一寸お訊きして見ようと思つたんですがね――これ……」

「なんです――希臘語ですか」

「こんな風なことだらうと、見當はつけて居るんですが、どうも曖昧だから」

「詩らしいですね――何かに引用してあるんですか」
横田は伸子を顧み、
「どうも西洋の學者は、何ぞと云ふと直ぐ羅典や希臘をかつぎ出すから厄介です」
と笑つた。
「おいそぎですか」
「いや、いそぎません」
「ぢやあお預りして置きます」
又話が途切れ、居心地わるく成つた。横田は、
「どうぞよろしく」
と程なく歸つた。
見送つて再び部屋に戻つた。伸は横田の置いて行つた紙片を手にとり、立つたまゝ見て居たが、ふんと云ふやうな表情で、手近い本棚にのせた。伸子は何だか嫌な氣がした。
「大丈夫？　そんなところへ置いて」
「大丈夫ですよ」

伸は伸子がそんな注意を拂ふのさへ不快らしく、云つた。
「いつ頃から來て居たの？」
「何故？」
わざとらしい訊きかへしが、殆どひとりでに伸子の唇をこぼれ出た。
「何故つて――又君の邪魔をしたと思ふからですよ、下らないことつきや話しもないのに」
――伸子は皮肉な顏をして、肩をゆすつた。彼女は意地わるい心持になつた。伸は、彼女の友達が來ても、恐らく唯の一度もと云つてよい位、愉快な對手となつた例がなかつた。彼が席に現れると來た人は歸り仕度をする。女の人でも、それは同じであつた。今も、彼は明かに心穩やかでないのだ――不思議な、伸子に責任はない理由で。それをまともに表はさず、親切らしいお爲ごかしの云ひかたを、又してもする。彼女はいきなりつきとばすやうに、
「ちつとも邪魔ぢやなかつてよ、面白くてよかつたわ」
と憎らしく口答へした。伸は、反感を沈默に表して、着物を着換へに行つた。伸子は、愛情からでなく、腹立たしさ、厭さ、憎らしさ。それ等の感情で對手から離れられず、自分も伸の後を跟いて行つた。本當は横田に對して、彼女の心持はもつと複雜なのであつた。彼が頻りに机の方ばかり氣にす

るのや、妙にききたがりのやうな處があるのなど、彼女は好きでなかつた。それでも、夫のさう云ふ口の利きかたが、伸子の平靜を奪つた。伸子が居るのを知り乍ら、知らないやうに洋服を脱ぎ、それを衣裳箱筒にかけて居る佃の、强情さうに太い耳の後の骨を見て居ると、彼女は、盲目的に衝動がこみ上げて來るのを感じた。あゝこの平氣さうな樣子！　いぢめて、いぢめて、本音を吐くまで參らせられたら、どんなにすつとするだらう。こんな濟した彼でない彼。こんなぬらりくらりした彼でない彼、その彼が見たい！その彼が欲しい！――しぶとく、叩きのめされても此處は退かないぞ。猛々しい情熱で、伸子は心が唸んだ。相搏つ烈しい二つの力を自分の中に感じ、裂けさうであつた。何處かで、熱心に、止めた方がいゝ、さあ、彼方に行かうと勸めるものがある。それを見向きもせず、手を振り拂つて、ひたむきに、ひたむきに、喧嘩したがり、喰つてかゝりたがつて居るもう一つのもの。自分も彼も紛々にし、樣見ろと叫びたい程の暴々しさ。――佃は着換へをすませると、彼一流の利口さで、口も利かず、振りかへりもせず、靜に納戸を去つた。伸子は、急に名狀し難い空虛を感じた。自分と彼とに對する悲しみが彼女を壓倒した。伸子はそこに立つたまゝ、歔欷いた。

程無く、佃の老父が歸宅した。

伸子は臺所へ入り、魚を煮はじめた。火氣で蒸し〳〵する狹い厨房の空氣は、苦しい伸子の心をとり卷いて、益々彼女を苦しめた。

伸子には、今、別な悲しみがあつた。若しこれが、一年前のいがみ合ひであつたら、自分はこのやうに、嫌惡と暗さに滿ちた心で、而も頑固に獨りを守つて、捩くれて居たであらうか。伸子は、佃の言葉を素直に受けられなかつた自分の心持の故だけにでも、きつと彼に謝らずには居なかつた。夫のところへ忍びより、

「御免、御免」

朗らかに擧手の禮でもしたであらう。其後、彼等は少くも、喰嘩の前よりさつぱりした心地になれた。

伸子は今も、自分の太て太てしさは充分知つて居た。自分が、鬱積して居る苦しさから、直接の原因以上に、ひどく刺戟されたことも解つて居た。

けれども、彼女はどうしても、元のやうに、佃にそのやうな心持を話し、又詫びたりする氣になれなかつた。自分が彼のところへ行つて、そのことを話せば、佃は、如何にも伸子が自己省察をし、後悔するのが當然で、彼もそれを豫期して居たかのやうに、彼女の告白を聽くだらう。そして、自身の心には一つの鞭をも加へず、宛然汚れなき小羊のやうに、彼女に祝福を與へるに違ひない。

それを思ふと、伸子はむら〳〵とした。僞善的な佃の心の姿勢が、伸子を窒息させるやうであつた。鍋の下に搖れる瓦斯の焰を見つめ、考へ沈んで居た伸子は、自分等二人の男女の生活の恐ろしさで體が震へるやうになつた。

自分の前に、次第に廣く擴がつて來た道は何であらう。一人の女が、人間で無く成らうとする道ではないか。彼女が、生活に於けるこのやうな苦痛、切なさ、齒痒さから、假令どんな外形上の我儘をしようと、楽て鉢な惡たれ女に成り下らうとも、佃は依然として、見たところ非の打ちどころない、寛大な、忍耐强い夫の役割を演じつゞけるだらう。

伸子は絶望と恐怖とで涙をこぼした。永い、しづかな、地にもぐり込みたいやうにそれは悲しい涙であつた。

五

英國皇儲の來遊は一般的な好意を呼び起して居た。馬場先に大きな歡迎門が出來た。夜はアーク燈の光で、ぞろ〳〵通る人間も、お濠の松の枝ぶりも、いつもと違ふやうに見えた。佃の老父はその賑はひを見物してから、田舍の生活に役立つ、實用的な手土産をもつて歸國した。

窓をあけ放して置くと、夜氣とともに、春の土のにほひや若葉の匂ひが、明るい部屋に流れ込んだ。

老人が去つた後、宵は長く感じられた。佃は、さういふ夜、部屋の眞中に胡坐をかいて、外國から來た書籍包みを開いて居た。伸子は側で、解きすてられた紐や紙を始末して居た。界隈がしづかなので、彼女がたゝむ厚い包紙の、ゴワ〳〵いふ音ばかり耳立つた。

「――彼方の机に送り狀があるから、とつて來てください」

伸子はそれをとつて來た。彼は一旦卓子につみ上げた本を、一冊づつその送り狀とてらし合はせ始めた。伸子は凝つとその樣子を見て居たが、

「――ねえ」

と聲をかけた。彼女はこの呼びかけを、なみ〳〵ならぬ心持でしたのであつたが、佃は手許の仕事に氣をとられ、うつかりした調子で答へた。

「何ですか」

「相談があるの」
「なんです」
「ねえ……夫婦の生活といふものは斯ういふ形しかないもの？」
「さあ……、どう云ふ意味で云ふのか知らないが、さうでせう」
「もつと自由ぢやいけないのかしらん」
「俺は本を手にとり上げ乍ら、警戒するやうに伸子の顏を視た。
「何故？――何か違つた形が必要なんですか」
「私――當分私共別々に暮して見たらどうかと、此間から思つて居るの」
「私はちつとも其那ことは必要だと思ひません」
斯りすてるやうな語勢であつた。
「だから御相談なのよ、お父さんがお歸りになつてから、悠くり相談していたゞきたいと思つて居たの」
以前から、別々に生活して見るのもよいのではあるまいか、と思つたのは屢々であつた。最近、彼女には、さうでもして見るしか新生活の拓けやうなく感じられて來た。自分達夫婦の、生活態度の違ひを、抽象的に批評したり主張したり、其那ことで實生活が寸毫も變化しないことを、伸子は經驗で知つた。俺は生活の對手として、さういふ種類の人ではなかつた。彼は、獨特な消極さで、強い生き手であつた。

生活を一緒にして居て心持を影響されまいなどゝ云ふのは、出來ない相談であつた。
先、田舍で考へたやうに、彼には彼の生きる場處がこの世にあるといふ考へも、一緒に暮して居ては、その平和的な微溫さを保つて居られなかつた。
一人の人間として、自分が愧ぢ卑しむ行爲をも、それが夫だといふ許りに共犯者になることは、伸子に堪え難かつた。彼の考へかた、彼の生きかたに釣り込まれまいとして、勢、伸子は批評的になつた。批評的になつた瞬間、彼女は淺酷な程露骨に、一箇の、自分とは正反對の方角に生きようとして居る男を見た。
その男は夫だ。彼と自分との間に、欲情の交換はある。然し、美しい戀心と、よく生きようとする張り合ひ、其があればこそ生きる望みは、滿される見込みがない。――伸子は、それではやつて行けないのであつた。まして、俺の誠意にさへ信用を失つた今、夫であり妻である約束、それが何の權威であらう。夫婦だからと云つて、無理やり一まとめの形を繕はず、一人一人それ〳〵に生きるところ

を生かしつゝ生活したら、彼も自分も、自然になれるのではあるまいか。伸子は夫の反對は覺悟で、相談を持ち出したのであつた。

「――勿論それは變則よ。けれどね、病氣になれば、私共轉地もするし、病院へも入るでせう？　結婚生活が病氣なのよ、私共のところでは」

但は、不快な話が出るといつも現はす二本の横皺を、深く額によせた。

「私には解りません――それは、始つから幾度も云つてある通り、君は自由です。飽くまで自由なんだから、どうでも、好きになすつたらいゝでせう――私に其那ことは出來ません」

伸子は自分の考へを說明した。彼女は、別々に生活すると云つても、動坂へは行かない積りであること、經濟的には但に厄介をかけない積りなことを話した。

「本氣で、各々が自分の心に正直な生活を始めたら、この、變に嘘だらけのやうな暮し方の、兎に角一部分だけでも、さつぱりすると思ふのです。さうお思ひなさらない？　私共は、本當によくない胡魔化し暮しをして居るのよ」

但は頬桁でも打たれたやうな眼をして、伸子を見据えた。

「我々が、どんな罪を犯して居ます？　少くとも私は、神にいつ呼び出されてもいゝ、潔白な心持で君を愛して居るし、生活して居る」

「でも……私が嘘だらけの生活と云ふのはね、斯ういふ點なの。一つの例を云へば、私共は……」

自分の云はふとすることに怖えたやうに、伸子は思はず躊躇した。が、直ぐ早口に續けた。

「私共は――もう永いこと腹の中で衝突して居てよ、勿論、貴方は其を御存知だわ。でも、まるで、斯うやつて私が切り出すまで、知らん振りぢやあないの？　何故？　私はね、さういふ貴方が――厭で――……怖らしいの。さう感じ乍ら、私は又私で、近頃は何だか正直に、貴方に其那ことが云へないのは、私恥しいのよ、全く」

但はもう本などかまはず、腕組みをし、微に唇を震し乍ら、壓しつけるやうな聲で云つた。

「――私が、此那に眞心をかけて愛して居るのに、苦しめるのは全く氣の毒です。――然し、別に暮すなんて云ふことは絶體に出來ない」

夫の口から、すら〳〵眞心とか愛とか云ふ言葉が出るのを、伸子は、間の惡い疑はしい心持で聞いた。彼女は、

「何故絶對に出來ないの？」

と云つた。

「夫婦は夫婦なのよ、たゞ生活法だけ、二人の習生にかへつてやりなほして見るのよ」

「出來ません！考へて御覽なさい、假にも敎壇に立つて敎へる者が、其那ことで、どうして人に顏向けが出來ます？——折角、理想的な結婚だと思はれて居るのに」

「それは變だわ」

伸子は熱心に、夫の言葉を否定した。

「私はさうは思はないわ。第一、私共は、如何う人に思はれたい、といふ爲に生活して居やしない。又、顏向けが出來ないなんて云ふのは、却つて、このさゝ二人で、なり下つてこそよ。若し本當に、私共の繋りにちよんぴりでも理想的なものがあるなら、それこそ、形なんかに拘泥しないで、生活の內容を進めて行けるだらうと思ふわ。——ね、私共本當にほかの夫婦みたいに、どぐろ卷いて暮す爲に生きてやしないのよ」

永い沈默の後、佃は、伸子が意外に感じた平靜さで、寧ろ彼女を劬るやうに反問した。

「——ぢやあ君は、暫くでも別に暮したら、二人の間がきつとよくなると云ふ、信念がありますか」

「……」

其はある、と伸子には答へられなかつた。佃のいふ意味では、よくなるかもしれない。けれども、それが各々を天性のまゝに還すのだとしたら、つまり、よいことになるのではあるまいか。結婚生活の習俗だか、蒙昧だか、ごた〳〵したものゝ大掃除だ。この繋りから一生自由になれないと思ふばかりでさへ、佃に反感が起り、憎惡を感じるやうな立場は、互の爲に堪へ得ないのであつた。

佃の意見は、全然逆であつた。不調和があればある程、嫌なところがあれば在る程、一緒に生活しなければならない。近くに居て、互に日夜糺し合ひ、矯正し合つてこそ夫婦だ、と云ふのであつた。

夫がさう云ふのをきくと、伸子は胸の中が熱くなるやうに感じた。顏色をかへ、彼女は掴みかゝるやうな眼で彼を見た。

「貴方は、ぢやあ、いつか一度でも、私が伺ふことに、淡白に、男らしく、返答して下すつた事があつて？　自分の間違ひを、內心でだけでも、正直にお認めんなつたことがあつて？」

伸子は彼を見据えて、瞬もしない眼から、ほろ〳〵涙をこぼした。

「さういふところが、我々の生活の地獄よ。貴方は、私が腹を立てゝ、つい失禮なことを云つたり、仕たりしちまふまで、冷淡だつたり、狡かつたりなさる。あとで、私がそのことを謝ると、本當の理

屈まで私が引こめでもしたやうに、御自分の方はそれなりけりぢやないの。貴方のは言葉だけよ——言葉だけです。それで、本氣な生活が出來ると思つてゐらつしやるの？」

伸子は袂で自分の顏を拭いた。

「……私は馬鹿だから、いつも、今度こそは、今度こそはと、思つて居たけれど、もう、いや！」

佃は眉を寄せ、頭を、さも痛ましいと云ふ風に振り乍ら云つた。

「——私の眞心をどうか信じて下さい」

「信じられないの。……信じられなくなつたの、此頃」

「あゝさうだらう、さうでなくて其那……」

一時間にも感じられた數分の後、佃は改めて始の問題に立ちかへつた。

「では——どうしても、別に暮したいと思ひますか？」

聲の裡に閃くものを感じ、伸子は本能的にはつとした。彼女は濡れた瞳で夫を見上げた。蒼白い、疲れた表情で彼は顏を反け、伸子の返答を待つて居る。伸子は、自分の一言が何か運命的な反響を、夫の裡から引出さうとして居るのをはつきり感じた。

「——その方がよくはないかと思ふの」

泥濘を歩くやうな重さで伸子は云つた。それをきくと、佃は椅子の上で、それでよし、と云ふ風な身じろぎをした。

「——ちやあ仕方がない——一緒に生活出來ないんなら……別れませう」

「……」

籐椅子の肱かけのところに頬杖をついて、默りこくつて居る伸子の顏を、今度は佃の方が覗き込むやうにして續けた。

「ね、さうしませう、左樣するしか仕方がないでせう。——私は總てをすてゝ田舍へ引込みます。——實に、實に殘念だが止を得ない」

伸子は不可抗な力に釣られて、自分の心が一歩ふみ出すのを感じた。

「其とこれとは別問題よ」

「どうして？　どうして別問題です？　私には全部です。——だから君になんぞ解らないと云ふんだ。此那ことを云ひ出す位なら、何故、何故」

佃は、伸子の手をいきなり捉まへると、自分の手も一緒くたに持ちそへ、髪を滅茶〳〵にかきむしりつゝ、烈しく歎歎し始めた。

「初つから、すつと友達のまゝで居なかつたんだ」

六

涙でびしよ〳〵になつた、夫の歪んで蒼白な顔、溺死人のやうに、額に引かぶつた髪、聲。それを思ひ出すと、伸子は二三日經つた後でも、ひとりでにぞつとした。そして、落付かない、變な氣がした　恐ろしい眞實を瞥見したやうにも思はれ、芝居と思はない芝居を見せられたやうでもあり――――佃に、この懷疑の責任はあつた。伸子は、男は女より、誠意をもつてしか涙はこぼれないものと思ひ込んで居た。それを、彼が、いつぞや動坂の親達に示した感傷劇の涙で、伸子に強い感銘を與へて仕舞つた。

翌朝、佃が、伸子の起きないうち、机の上のコップにさして行つて呉れた期節はづれの櫻草の花。その花からも、伸子は其に似た感じを受けた。その櫻草は、裏の竹垣の下に先住の人が忘れて行つた根から、さゝやかな薄桃色の花を開いたものだ。伸子は、自分に向つて何だか表情して居るやうな可憐な花を、見るのもいや、どけて仕舞つてもすまない、一種な心持で、永いこと眺めた。

兎に角、伸子は金しばりのやうな佃の摑みを全身に感じた。根本は何であれ、彼は自分を離したくない。占有から解きたくないのだ。

伸子に、彼の切ないであらう氣持も、通じて居ない譯ではなかつた。二人が結婚してから、彼ばかりいゝ目を見て居るどころか、普通から見れば、伸子は隨分、我まゝな女房であつた。彼を一人殘して旅行に出た。寢坊であつた。伸子には、さういふ日常の些細な自由をさへ、妻となれば大特權のやうに貼紙つきで與へらるといふ云ひ難い憂鬱、夫が、其等さへ與へておけば、不滿を云ふべきものもないやうに、他を省みない魂の孤獨さがあつた。これは勘定の外にするとしても、彼が、結婚について周圍から受けた批評は我慢ならない事が多かつた。佃は、最初から愛なくて伸子を騙し、自分の社會的地位を作らうとしたやうに云はれた。彼としては、今、伸子と別居し、世間に家庭生活の破綻を示し、從つて自分に加へられた評言を事實で裏書きするやうなことは、全く苦痛であらう。結婚生活を形に於てだけでも成功させ、それ見ろ、と冷評を浴してやりたい――ほんものゝ愛のあつたことを後からでも思ひ知らしてやりたい。

悲しいことに伸子の感じるのは、彼の、その、ほんものゝ愛があると思ひ知らせたい、と云ふ二次的な慾欲であつた。太陽のやうに捕へ得ず、而も、四時明るく、暖く、ふれる心を生かす愛そのものゝ流露より、伸子と自分で形造つた生活の組織を、中折れさせたい、ものにしようとする、中年の男の實際的な固執ばかりが、金挺のやうに感じられるのであつた。伸子に疑なく感じられる彼の眞情はこれ丈であつた。

伸子は、折があると、有耶無耶に終つた話を復活させた。……種々の方面から。

「――私共は、自分達といふものを間違へて考へて居るんぢやないかしら。貴方、私の爲にだけ生きて居ると仰云るけれど、お互に其那生活力の弱い者同志？。私は、始めつから云ふやうに、生活そのものを、愛して居るのよ。――若し、貴方が其那氣の弱い、生存力の稀薄な人なら、彼那に若いうちから苦勞して、自分の路はつけて來られなかつたゞらうと思つてよ。貴方は、やつぱり、自分を強く守つて生きる性の方なのよ。それを、不自然で、又不必要なほど、私の爲、私の爲、と云つて下さるからいけないんぢやあないかしら。生れつき通りになりませうよ。ね、そうしたらきつとさつぱりしてよ。二人の間も晴れ〳〵してよ。貴方は貴方として、充分生きる權利を、正面から主張なさればいゝのよ」

佃の返事は定つて居た。

「どうにでもお考へなさい。私の本性はこれきりだ。――私の覺悟は、もう結婚する時から定つて居る。その決心を、自分がいゝと思つた時に實行するだけです」

決心といふのは、死ぬとか、すべてを放棄して田舍に引込む、とかいふ意味なのであつた。斯樣な言葉も、伸子は、どこまで本氣にすべきか判らず、默り込むしかなかつた。本當かと思ふと可怖かつた。この心理的嚙合ひは、どちらかゞ死ぬまで、では續くのか、――然し、脅かされて居るのかと思ふと、伸子は、莞爾笑つて片足引き、お辭儀をし、

「さうお、ではどうぞ」

と云つて見たいやうであつた。――

七月に成つた。

佃は、勤め先から、關西へ出張することに成つた。短い旅行の爲に入用なものが、ちつとも揃つて居なかつた。互の間が不穩な、底鳴りのして居る有樣ではあつたが、その爲却つて、みつともない旅行はさせ難い氣がした。伸子は、或日僅の金を持つて、來合はせた保と三越に出かけた。暑いが、さつぱりした風に吹かれて三越の赤い旗が、愉快に蒼空に翻つて居た。

一時間ばかりで買物が濟んだ。

「どうする？　これからすぐ動坂へかへる？」

「僕どうでもいゝや」

「又赤坂へ歸るとおそくなるだらうから――ぢやあ少し銀座でも歩かうか」

保はひどく嬉しさうに、大莞爾々々で合點した。

彼等は資生堂でアイスクリームソーダを飲んだ。伸子はストロウを二本とつて保に渡し、自分も同じだけのストロウをコップにさした。

「やつて御覽なさい、この頃流行る飲み方。――一本の方を吹いてよく泡を立て乍ら、もう一本の方で飲むの」

保は、何の氣なく、

「ふうむ」

二本一度に唇へ當てがはふとしたが、

「やあ！　怪しいぞ、怪しいぞ」

と、手を離した。

「すまないが、僕、よく分らないから、姉ちやん一寸先へやつて見せてよ」

「何でもないわ、ほら」

伸子は、コップから溢れる程、ソーダの泡を立てゝ見せた。

「――本當？」

保は、少年らしい眞面目さで覗いたが、泡が立つて居る時には、もう一本のストロウを黃色の液體が昇つて行かないのを發見すると、本懷さうに體を搖つて、ふきだした。

「ほうら！　だから僕、變だと思つたのさ、息を二つに分けて使ふなんて――」

伸子も笑ひ出した。

「でも、すぐ變だと思つた？　私は本當にやつて見ちやつたわ」

「いつ？」

「ずつと先、西洋のお爺さんにかつがれたの」

保が上野行きに乘るのを見送つてから、伸子はライオンの前から電車に乘つた。早い午後で、車內は空いて居た。伸子は包みを膝の上にのせ、開け放した窓から濠端の景色を眺めた。夏らしく、透き徹つた明るい西空であつた。重い、石垣の面と色、芝生、蒔葱と綠濃い老松などが、潤やかに曲折し

た水と照り榮へて、如何にも日本的な美しさに充ちて見えた。伸子の、さつきからの名殘りで、表にだけ明るさの溢ふ、沈んだ心持に、この眺めは快適であつた。

向ふ側に、一人女のひとがかけて居た。三十七八の品よい夫人で、ものゝいゝ黑つぽい服裝、軟かさうな髮の毛から下駄の爪先まで、落着いて素直な感じであつた。膝の横にある洋傘も黑であつた。內端な裝から、身嗜のよさや生來の寬容さが、一目の中に輝いて居た。ゆつたり正面を向き、やつぱり窓外を觀て居た夫人は、伸子が見たのに心付いたらしく、極自然に彼女の方を見た。計らず眼が合つた。それが何とも云へず朗らかな溫い見かたであつた。——瞳が微かな茶色で輝いて居るのまで、懷しく目に止つた。

時々其夫人を眺めるうちに、伸子は、一種異樣な心持になつて來た。その夫人の心の狀態がいゝのが、伸子にひた〳〵と感じられた。そして、奇妙にも、自分が傍によつて行つて、その豐かな手に自分の手を當て、一言、

「ね、私……」

と囁きさへすれば、この頃の心の苦しさ全部が、たちどころに對手に通じさうに思はれて來た。そして、奇績的に、自分の行詰つた、切ない境遇が展かれさうでならない心持がする。……

伸子が猶々見るので、夫人の方も、彼女にやゝ特別な注意を拂ひ始めた。茶色がかつた瞳が、亂れない朗らかさで、時々彼女の額や頰にふれた。伸子は、視線に撫でられると云ふ、文字通りの感覺をおぼえた。今席から立ち上らうか、今立たうか。苦しく胸がどきついた。そんな事は、恐らく自分に出來ないことを、伸子は知つて居る癖に、夫人から注意をひき離すことが出來なかつた。ロシアの小說に、よく汽車でいきなり隣りの人を捕へて男が身上話を始めるところがある。半信半疑で讀んで居た。さういふ男の、哀れた、胸一杯の心持、それがこの氣持なのだと、伸子は思つた。

自分の降りる場處へ來た時、伸子は、吻つとした。歩道へ出ても、尙、心持の搖れが遺つて居た。彼女は、自身の驚きを振返つて見るやうな心持で、停つて居る電車の窓を見上げた。カーキ色の軍服の背中で、夫人は見えなかつた。

「——手紙下さること？　勳坂の方へ」

「さあ……其那暇があるかどうか……私の手紙なんぞ詰らないでせう」

翌々日、伯は旅行に出發した。伸子は勳坂へ行つた。

七

其那ことを云つて立つたが、佃は、時々伸子へ便りをよこした。景色を、自分で寫生したハガキが多かつた。簡單に、その日の天氣のよし惡しなどだけ、書いてある。彼は、自分が旅行して居る間に伸子の感情が推移することを、期待して居るらしかつた。實際、伸子も、毎日相刻の狀態で佃と狹く暮して居るよりは、精神に餘裕が出來た。動坂の家は、夏中休暇で、がら空きであつた。多計代は子供づれで、田舍へ避暑して居た。のこつて居るのは、父と伸子だけであつた。それも伸子に休安を與へた。

或朝、風通りよい入側のところで、伸子は、浴衣地や海苔の鑵などを、大きなバスケットに詰めて居た。晝頃の汽車で書生が田舍へ行く。それに持たせてやる品々であつた。佃のところから來たハガキが、傍に散つて居た。今朝のは、奈良からであつた。眼ばかり大きい大きい鹿と、鳥居が描いてあつた。

「昨日寸暇を利用して、奈良を伸で一巡しました。春日神社の森の中は、別天地のやうに涼しかつた。鹿がやさしい顏で幾匹もよつて來ました。此那優しい動物なら足の痛くなるやうなこともあるまい」

伸子はその文句を讀んで、苦笑した。

保と三越へ行つた日、歸つて見ると左足に鼻緒づれが出來て居た。素人療治をして居るうちにこぢれて、伸子は、この頃毎日病院へ通つて居るのであつた。鹿が纖い脚の先を自分のやうに繃帶され、のたり〳〵歩く形恰を空想すると、一寸滑稽であつた。が、荷作りの合間にもう一度讀みなほすと、伸子は何だか、單純に可笑しがれなかつた。此那優しい動物なら云々。伸子が優しくないと云ふ心があるのであらう。彼らしい感じかただ、と、伸子は思つた。優しさなどといふものも、彼にすれば、愛と同じに消耗しない固形物のやうな存在に思はれるのであらうか。

伸子は着物を着換へ、病院へゆく仕度をした。伸に乘りかけて居ると、遽しく、廊下を女中が駈けて來た。

「あゝ、一寸！　お電話でございます」

「どなた？」

「柚木さんと仰云ひました」

伸子は急いで電話口へ戻つた。柚木さんと云ふのは、伸子の師とも云ふべき、老博士に違ひなかつた。彼女は、勤坂へ來るつい前日、長い手紙を出した。彼女は、昨日今日生理的に持ち堪へ切れず、諦言に出さうになつた内心の苦しさ、自由な生活への憧れを、その手紙へ吐露したのであつた。

先方は夫人であつた。

「もし〳〵伸子さんでいらつしやいますか、あのう、宅の代理でございますが、御手紙は確に拜見致したさうでございます」

伸子は夫人に對し、或極りわるさを感じた。彼女は無器用に禮を述べた。

「それでね、早速御返事申上げるところでしたが、丁度興津へ參つて居りましたもんで、失禮致しました。——貴女、明日やはり其方においでですか」

「はあ、當分こちらに居りますが」

若し伸子が在宅なら、面談したいから、柚木先生自身、伸子のところに來て下さらうと云ふ言傳であつた。伸子は恐縮した氣持になつた。彼女は、今は足の工合が惡くて駄目だが、早晩、自分で上らうと思つて居る旨を云つて辭した。

「でも、どうせ小石川についでがあつて出ますのださうですから……」

では、どうぞと、伸子は電話を切つた。

病院は、月曜日で、特別混雜して居た。控室は暑苦しくて居られなかつた。廊下の突き當りに一つ窓があつた。そこから、重庭の汽罐室や、その周圍の空地が見下せた。其處を、岡持を下げた若い出前持が通つたり、二の腕まで出した元氣好い看護婦が時々姿を見せた。看護婦は上草履のまゝ、石炭殼の上を、ひよい、ひよいと飛び越えて斜向うの別棟の入口へ姿を消す。白い廣い裾の下に赤いスリッパアの先が見えるのなど、病院らしい美しさがなくもない。そんな光景を伸子は永い間見て居た。

やつと控室の人ごみの中から、左手に帳簿を持ち、伸子の馴染の看護婦が出て來た。

「——どうもおまち遠さまでした。どうぞ」

髯の薄い、いつも懶ぐさい風で患者を扱ふので、伸子が嫌ひな醫者が、其日は當番であつた。彼は伸子の挨拶に、

「や」

と鼻の先で答へ、ちよいと人指し指を動した。繃帶をとけと云ふ合圖であつた。彼は指の先で、一二ケ所、患部を押した。

「きのふの通り」

看護婦が、平手で、石膏の型でも作るやうに、べた〳〵伸子の足一杯膏藥を塗りこんだ。其をやつて居る間に、白いカーテンで仕切つた隣りの區切りの中へ、眼と鼻と口のところだけ、穴をくり拔いた、顔ぢゆう繃帶の男が呼び込まれた。

伸子は陰氣な表情で、厄介な荷物のやうになる足先を見守つて居た。彼女の裡に、その間にもこびりついて離れない或錯綜した感情があつた。明日、柚木先生が來て下さる——來て下さる——それに對して　自分には、恐縮と厚意を有難く、重く感じる心持しか起らないのが、出がけ電話を切つた時から、伸子のこだはりになつて居るのであつた。

柚木先生へ送つた手紙に、伸子は、佃と結婚してから、自分以外の者に打ちあける其が最初の、不滿と疑惑とを、包むところなく書いた。數年來心に溜つて居た勞が、先生を少なからず動したさらうことは、伸子に推察された。先生は、彼女が伸るか反るかの瀬戸際に居るのを知り、其危期を最も適當に處置する、具體的な相談相手になつてやらうと、明日來て下さるに違ひないのであつた。自分の樣子はどうであらうか。伸子は、我ながら自分の精神が不活潑なのに、愕きを感じた。電話を聞いた時、彼女は、この機會を力綱に、一つ潔く、率直に、自分の計畫を實行しようと云ふ、賴もしい勇氣を感じるどころか、却つて、後じさりする怯懦な自身を感じた。先生の訪問によつて、事態が一變しさうな不安、まだ、其處までは決定的でありたくない未練。遂には同じ結果になるにしろ、先生の言葉に從つてした事だと、後でその意識に苦しみさうな自分の性分。理窟から云へば、抑々其なら何故、何の責任もない柚木先生に其那手紙を出したか　といふことになつた。書き乍ら、泣いて自分の苦しみと憧れとを訴へずに居られなかつた心持、それも、伸子は自分を僞つて居たのではなかつた。心が、燃えて、燃えて、我慢出來ずに其を命じたのだ。其かと云つて、現在の、この踏ぎりのつかない、無いとわかり切つて居る筈だのに、何か大切なものを見失ふのではあるまいかと、今更遲疑する心の狀態も、嘘ではない。動かせない本心の兩端なのであつた。

翌朝、約束の時間に先生が見えると、伸子は、愈々愚かな氣後れを感じた。いつそ、病氣にでもなつてしまひたい氣がした。片方の足を厚ぼつたく繃帶し、そのやうに萎れて居る伸子が慘めな有樣に見えたのだらう。先生は、老年で幾分嗄がれたが、精彩のある音聲で、懇ろに彼女の健康を尋ねた。

「五月蠅いものです、宅の家内なぞも、矢張りそれに類似のもので永く困却しました。……ところで、あのお手紙は細かく拜見しましたが……何ですか……佃さんは、何處へか……御旅行ですか」

伸子はぶきつちようにに、必要な答をした。

「あゝさうですか……」

先生は安樂椅子の奥によりかゝるやうにし、考へ乍ら、右手の指で輕く、既に白い髭を撫でた。

「お手紙で、實は意外に驚きましたやうなわけです。御母堂は初つからなか〳〵御心配で、種々お話もありましたが、貴女も御婦人である以上、一度は家庭の人となられるのも結構だらうと申して居た次第ですが……御兩親にはもうお話しですか」

「……まだでございます」

云ひ終るや、伸子は何とも云へない極りわるさに襲はれた。彼女は、自分が答へた瞬間に、それが先生にとつて案外なものであつたこと、同時に、先生の心の裡で、この問題がすつかり初めの重さを失つて仕舞つたことを、直覺したのであつた。伸子は、自分のぐうたらな態度の故で、先生が自身の親切心まで愚弄されたやうに感じられたら、それこそすまないと思つた。彼女は謝罪するやうに云つた。

「本當に筋違ひのことで、先生に御心配おかけ申すべきことでないのは、よく承知して居りましたのですけれど……」

「いや、決して其那御遠慮には及びません。力の及ぶことは何なりお役に立ちませうが」

最初とは、明に變つた微かな氣輕ささへ含んで、

「では、何ですな、まだはつきり斯うと、實際の計畫はお立てゞないんですな」

伸子は、意氣地なさを、座に堪へない程自覺しつゝ、ありのまゝ答へるしかなかつた。

「手紙で申上ましたやうに仕ようと、考へては居りますのです。迚も今〻でのまゝでは、やつては行けませんから」

「然し、このまゝ、ずつとお別れになり切り、と云ふわけでもないですな」

「……どうなりますか」

杜木先生は、

「いや」

と、伸子の方にこゞんで居た背を延し乍ら、云つた。

「伺つて安心しました。御手紙の樣子では大分御苦しみのやうだし、御悄瀟でも御婦人だから、萬一ひよつと何事かあつてはと、老婆心を起したのですが――その位考へる餘地をお持なら、大丈夫です」

伸子にとつて、此等の言葉は苦しさを增すばかりであつた。氣でばかり思ひつめ、結局實行し得ない優柔不斷を、體よく指摘されたとしか感じられず、情けなかつた。けれども、杜木先生は、其のやうな伸子の心持を、まるで心づかないやうに、次第に快活に話し進めた。